ISSN　1341－0105

九　州　大　学
健康科学センター年報

── 自己点検・評価報告書資料 ──

第　33　巻（平成22年度）

教育活動 …… 3
業務活動 …… 15
研究活動 …… 51
社会的活動 …… 87
委員会活動 …… 95
資料 …… 99
人事等の一覧 …… 119

九州大学健康科学センター

平　成　24　年　3　月

スタディオン・クレスト

人間が姿勢よく立って歩くさまを「健」という。歩くふたりの間に横たわる二重のらせんには，Read Nature，Not Books”と刻まれている。ＤＮＡの生命の糸は，普遍の記号でつづられたヒトと生物たちの物語，温古の手がかり，知新の源泉である。

砂漠の朝，太陽が昇る。巨大な日輪が出始めてから地平を離れるまでの時間に，人が歩いた平均距離を，古代バビロニアンはスタディオンと定めた。この単位で古代人たちは，地理を測り旅程を考えた。地球の全周は25万スタディアと記されている。人間そのものが社会活動の基準にすえられた時代があった。世紀で刻むにはあまりにも巨大な進化の流れ，そのなかをヒトは歩きつづけてきた。

「歩けないヒト」のためには医学が生まれた。現代文明における「歩かなくなったヒト」を反省し未来を拓くため，「歩くヒト」の健康科学は，物質ではなく生命に，神よりは人間に，具体具象の基盤，新しいスタディオンを探るものである。

夜の闇をたちきる黎明，スタディオンの刻まれるときであった。

改革の嵐、一致団結して

健康科学センター長　大柿哲朗

私にとって最後の巻頭言の執筆となります。巻頭言など、どなたにも読んでもらえないことを承知の上で、書かざるを得ないのがつらいところです。この 2 期・4 年間を振り返りますと、「5 年目評価・10 年以内組織見直し」制度への対応に追われた日々でした。そして得たものは、平成 17 年に認められていた臨床心理士（全学管理人員）の補充がやっと叶った、ということだけでした。大学はこの間、学生や教職員のメンタルヘルスの悪化に伴い、「責任部局としてその対策を何とかしろ」と言い続け、本センターはそのために臨床心理士の補充をお願いしてきました。そして、その解決に 5 年半の歳月を要しました。

改めて過去の巻頭言を読み返してみました。大学の改革は、平成 3 年の大学審議会の大学改革案に始まり、平成 6 年の教養部改組、さらに大学院重点化構想が出され、本学も次々と改革が行われました。巻頭言でも、これらの改革への対応を読み取ることができます。第 14 巻（平成 3 年）では、当時の山田センター長が「大学改革と健康科学」を、続いて「変化と変革」（15 巻）、「自己点検・評価の総評」（16 巻）などで本センターの改革を訴えられ、次のセンター長の徳永先生は「課題の困難さ」（18 巻）で改革の難しさを痛感されました。さらに平成 11 年度以降、峰松センター長の「大学改革と健康科学センター」（22 巻）、「粛々と改革に臨む」（23 巻）、「“偽解決”とならないために」（24 巻）、「不易流行のこころで」（25 巻）と続きます。平成 15 年には九州芸術工科大学との統合があり、平成 16 年には国立大学法人化がなされました。上園センター長は、「改革の始まりに自戒を込めて」（26 巻）、「健康科学センターの使命は」（28 巻）、「健康科学センターの行方は」（29 巻）と悩まれました。本センターは、時代の流れを先取りし、それなりの改革をして来たと自負していました。しかし大学側の評価は十分ではありませんでした。そこで私は、本センターの更なる充実と発展のために、30 巻では「教職員が一丸となって、本気で努力を」、31 巻では「自分の特性を生かし、ひとり一人が教育、業務、研究、社会連携のいずれかで“一人一アピール運動”を展開すべき」、32 巻では「改革や業務の充実が見えるように、効果的で積極的な情報の発信を」（32 巻）と訴えてきました。

本学では、改革案がさらに次々と出されています。上園先生は、「変わるべき部分は多々ある。反対に変わってはいけない部分、変える必要ない部分があるのも真実である。……変えて良かった計画もあれば、変えてみたら悪かったという方針もある」（28 巻）と書いておられます。本学では、新たに「基幹教育院」が設立されました。これは教養部廃止に伴い、一般教育・全学教育がおろそかにされたことを反省して、新しい教員組織の確立を目指したものです。これなど、まさに上園先生の指摘の例でしょう。また峰松先生は、「人を育てる教育者の能力を削ぐ一つの方法は『忙殺』だ……、忙殺の副作用をさらに忙殺で対処しているのではないか……。きらびやかで万能薬のような改革にはどこかに無理が潜んでいる可能性があります。副作用はじんわりとくるものでしょう。われわれ大学人は慎重に事態を分析し、結果をフォローしながら、その改革の良い部分を引き出す努力を続けるべきでしょう」（24 巻）と書いておられます。

昨年の暮れから 2 ヶ月間は、新たな改革案「大学改革活性化制度」への対応に追われました。これには何度も臨時教員会議を開催して、何とか本センターの思いを成し遂げることができました。「何がベストな改革か」については、誰も予測できないでしょう。これからも改革は続きます。本センターの教職員の多面的・冷静な状況分析、意見交換、一層の協力が必要と思われます。改めて「一致団結して」を、最後の巻頭言の題目とします。

教　育　活　動

概況 …… 3
内容 …… 4

教　育　活　動

健康科学センターの教育活動としては、全学教育、業務を通した教育、大学院教育、課外活動への支援、研究生指導、FD 活動等がある。

全学教育では、第一部門担当の健康・スポーツ科学関連科目(演習、講義、実習、保健コース)、コア科目(共通コア、理系コア),第二部門担当の周辺教養科目(健康科学)と高年次教養科目(応用心理学、心理健康学)が開講された。

開講科目の受講者数の一覧は次頁のとおりである。健康・スポーツ科学演習は、最初のオリエンテーションの次にコミュニケーションゲーム 1 コマを増設したことは、新入生に和やかな雰囲気をあたえて、よかったのではないかと思われる。身体運動科学実習は、曜日・時限によって受講者にバラツキがあったが、全体としては人数を保っている。学生による授業評価は、概ね高い評価であった。

業務を通した教育には、定期健康診断の待ち時間を利用した健康教育、サイコリトリート(箱崎分室)へ来室する学生へのリラクゼーション指導、肥満改善および生活習慣病予防支援を意図したウェルカムホームベース型健康支援プログラムなど多様な健康指導・支援があり、第一部門と第二部門とで協力しておこなわれている。

大学院教育では、人間環境学府と芸術工学府の教育・指導のほか、大学院共通教育科目があり、第一部門と第二部門の教員が担当している。人間環境学府では、9 名の常勤担当者によって、修士課程科目 10 科目と博士課程の研究指導がおこなわれた。平成 22 年度の入学者数は、修士課程 10 名、博士課程 3 名であった。博士課程では、2 名が学位を取得した。大学院共通教育科目「大学院生に対する人間教育」が、平成 19 年度よりひきつづき筑紫地区でおこなわれた。前期の登録者 3 名、後期の登録者 4 名であり、そのほとんどが筑紫地区以外のキャンパスからの受講生であった。

課外活動の支援では、体育会総務委員会主催の強化講習会をおこなった。約 80 名の受講者であった。その他、筋力トレーニングの方法などの問い合わせを受けている。

FD 活動としては、九州地区大学体育連合研修会が熊本で開催され、2 名が参加している。また、招待講演では、アメリカテキサス州から Refer Lutz 氏を招聘し、「身体活動参加への意識と影響に関する比較文化的研究」の題目の講演を開催した。その他、九州地区大学一般教育研究協議会への参加、「学生の自殺予防とメンタルヘルス対応」をはじめとする三回の全学 FD への参加がある。

（文責: 西村 秀樹）

全学教育の開講状況

科目区分	科目名	単位	対象学年	開講期	開講数	受講者数	備考
健康・スポーツ科学科目	健康・スポーツ科学講義Ⅰ	2	1年	後期	1	8名	
	健康・スポーツ科学講義Ⅱ	2	2年	前期	1	4名	
	健康・スポーツ科学演習	2	1年	前期	50	2,662名	必修
	健康・スポーツ科学演習（保健コース）	2	1年	前期	1	4名	必修
	身体運動科学実習Ⅰ	1	1年	後期	33	886名	
	身体運動科学実習Ⅱ	1	2年	前期	13	351名	
	身体運動科学実習Ⅲ	1	3・4年	前期	2	57名	
				後期	2	23名	
	身体運動科学実習Ⅳ	1	3・4年	前期	2	12名	
				後期	2	5名	
理系コア科目	健康科学Ⅰ「健康と運動の科学」	2	1年	前期	1	256名	
	健康科学Ⅰ「精神医学入門」	2	1年	前期	1	211名	
	健康科学Ⅱ「運動とスポーツの心理学」	2	2年	後期	1	85名	
	健康科学Ⅱ「健康科学概論」	2	1・2年	後期	1	246名	
	健康科学Ⅲ「アスリートの食事を科学する」	2	2年	前期	1	52名	
高年次教養科目	理系主題科目Ⅷ「体験で学ぶコミュニケーションと心の健康」	2	3・4年	前期	1	31名	
	理系主題科目Ⅷ応用健康学	2	3・4年	後期	1	38名	

1. 全学教育

健康・スポーツ科学科目として開講されたのは，必修科目である「健康・スポーツ科学演習（保健コースを含む）」（2単位）50コマと，選択科目である「健康・スポーツ科学講義Ⅰ」（2単位）1コマ，「健康・スポーツ科学講義Ⅱ」（2単位）1コマ，「身体運動科学実習Ⅰ」（1単位）34コマ，「身体運動科学実習Ⅱ（1単位）13コマであった。また，高年次生対象としては，「身体運動科学実習Ⅲ・Ⅳ」（各1単位）8コマが開講された。各々の具体的な内容等については下記を参照されたい。総開講科目数は114であり，このうち常勤が70を，非常勤が44を担当した。

（文責: 斉藤 篤司）

（1） 健康･スポーツ科学関連科目

1）健康・スポーツ科学演習

全学生必修科目である「健康・スポーツ科学演習」は，すべて，前期に開講された。具体的な実施内容は，右表に示すとおりであるが，平成 22 年度より授業回数が増加したことに伴い，E（コミュニケーションゲーム）を 1 回増やし，また，F（総括）を新たに追加した。テキストは，前年度と同様，2008 年 3 月発刊「実習で学ぶ健康・運動・スポーツの科学」および 2010 年 3 月発行「同 別冊 平成 22 年度版」（いずれも，九州大学健康科学センター編，大修館書店）を用いた。

＜授業内容＞
A: オリエンテーション，健康とは何かについての講義，脈拍測定
B1: 健康づくりのための運動に関する講義
B2: 最大酸素摂取量の測定
B3: 有酸素性運動実習
C1: 身体と心身に関する講義
C2: 身体・体力測定
C3: 栄養評価，ストレッチング実習
D1: 動き・運動・スポーツ科学に関する講義
D2: 筋力・敏捷性の測定
D3: SAQ・筋持久力トレーニング実習
E1～4: コミュニケーションゲーム
F: 総括

（文責: 杉山 佳生）

2）健康・スポーツ科学講義Ⅰ・Ⅱ

①健康・スポーツ科学講義Ⅰ

健康・スポーツ科学講義Ⅰは，後期の月曜日第5時限に開講した。受講生は8名であった。受講生全員が1年生であった。

現代生活と健康問題（生活習慣病），特定病因説とその破綻，社会変化と健康・福祉，現代社会とストレス，生活習慣病の各論，健康と身体活動との関わり，健康の維持増進の手段としての運動の科学的基礎等について講義した。今回，8名の受講生うち4名がラグビー部所属の学生であったため，スポーツ・トレーニングに関する講義も随時行った。定期試験の成績に基づいて評価した。

（文責: 大柿 哲朗）

②健康・スポーツ科学講義Ⅱ

・火曜日第5 時限開講

前期火曜日5 限に開講した。受講者は3名であった。2年生が2名、4年生が1名。

「健康・スポーツをめぐる現代的課題を考える」というテーマで、内容としては、現代社会における健康問題、体内時計、記憶術、日本人の歩行、修行、笑い、スポーツアニメ、スポーツマンシップ、スポーツと日の丸・君が代、スポーツと抑制の美学などであった。

（文責: 西村 秀樹）

3）身体運動科学実習Ⅰ

身体運動科学実習Ⅰは，伊都地区において1年生を対象に選択科目として，後期: 11コマ・34コース（集中1コースを含む）が開講された。今年度の受講者は，887人（登録者数）で，種目内容（コマ数）は，テニス（5），サッカー（1），バドミントン（7），バスケットボール（1），ソフトボール（1），卓球（7），バレーボール（1），ソフトバレー（1），筋力トレーニング（2），ゴルフ（1），ニュースポーツ（1）,総合型スポーツ（1）,ヨガ（2），ボディワーク（2），スキー（集中コース: 1）であった。

（文責: 高柳 茂美）

4）身体運動科学実習Ⅱ

身体運動実習Ⅱは，伊都地区において2年生を対象に選択科目として，前期: 4コマ・13コースが開講され，受講者は351人（登録者数）で，種目内容（コマ数）は，テニス（2），ソフトボール（2），バドミントン（3）,卓球（3），ヨガ・ピラティス（1），中国拳法（1），ボディワーク（1）であった。

（文責: 高柳 茂美）

5）身体運動科学実習Ⅲ・Ⅳ

身体運動科学実習Ⅲ・Ⅳは，箱崎地区で火曜の1限目に開講された。種目としてサッカーを開講し，受講者数は23名であり，全て男性であった。ほぼ全員が，理系の学生であった。参加した全員の士気は高く，極めて高度なテクニックを有する学生がいた。数名が欠席するとフルメンバーでのゲームができない場合が多かったのは，その点は課題として残された。

（文責: 熊谷 秋三）

身体運動科学実習Ⅲ・Ⅳは，箱崎地区および伊都地区において，高年次生対象の選択科目として，前期に箱崎で1コマ・1コース，伊都で1コマ・2コース，後期に箱崎で1コマ・1コース，伊都で1コマ・1コースが開講された。受講者は，前期69人（実習Ⅲ・57人，実習Ⅳ・12人），後期28人（実習Ⅲ・23人，実習Ⅳ・5人）であり，種目は，箱崎が前期: バドミントン，後期: サッカー，伊都が前期: ソフトボール，バドミントン，卓球，後期: バスケットボールであった。

（文責: 橋本 公雄，西村 秀樹，山本 教人）

6）保健コース

受講者数は健康スポーツ科学演習の登録者5名であった。一般コースの内容も交えながら，受講者の心身の状況を考慮したスポーツ種目（ダーツ，ビリヤード，ゴルフ，射的，動体視力や巧緻性のトレーニング等）を取り入れた。運動・スポーツの実施に当たっては，個々に心身の状況に応じて内容（強度や時間）を調整した。これらの運動・スポーツ活動を通して，各々の状況に応じて身体を動かすこと（どこまで身体を動かせるか）を学ばせた。同時に健康スポーツ科学演習の目標でもある身体運動の必要性や方法の理解や人間関係の改善・向上を図った。

（文責: 村木 里志）

（2）コア科目

1）共通コア科目

「共通コア科目」は，「人間性」と「社会性」の二科目からなっており，それぞれ2単位の修得が必要となっている。それぞれの主題については3つのサブテーマ群（『人間性』－「意識と言葉」「歴史と文化」「生命

と身体」,『社会性』–「社会と制度」「平和と共生」「自然と環境」）が設定されており，健康科学センターでは，「人間性」の中の「生命と身体」部の講義を担当した。具体的には，前期2名，後期2名の健康科学センター教員が，生命や身体に関する科学的な見方とそれにまつわる実践的問題について解説し，人間存在や人間性に対しての理解が深まるような講義を実施した。

（文責: 高柳 茂美）

2）理系コア科目

①健康科学 I : 健康と運動の科学

スポーツを含む運動行動を健康支援（支援理論，対人支援，政策支援）の立場から考察する。

支援理論では，スポーツを含む運動行動の恩恵や弊害など，その意味や意義を明らかにする。対人支援では，個人あるいは集団を対象とした運動行動の継続に関して行動科学理論と，様々な健康事象をアウトカムとした運動疫学研究の成果を紹介する。最後に，政策支援では運動行動の政策的側面からの課題を討議し，現代社会が抱える多くの健康問題に解決に向けた展望を行った。また，毎時間トピックスとして，身近な健康問題や健康・スポーツ科学に関する新たな研究知見などの話題提供を行った。

成績評価は，出席とレポートに加え，筆記試験の成績を加味して行った。受講学生数は 170 名であり，学生による評価は概ね好評であった。概ね以下の内容で講義を進めた。

1) 疾病対策モデルから健康支援モデルへ

Key words: 健康モデル，健康生成論，疾病対策モデル，健康支援モデル

2) 運動（スポーツ）行動の恩恵と弊害

Key words: 生理学意的観点，社会心理学的観点

3) 運動の疫学

Key words: 活習慣病との関連，転倒との関連，メンタルヘルスとの関連，認知機能との関連

4) 健康支援からみた運動行動

Key words: 支援理論，対人（集団）支援，政策支援

5) ヘルスプロモーションからみた運動行動の展開

Key words: 健康日本 21

参考図書:

・日本健康支援学会編集: 健康支援学入門－健康づくりの新たな方法と展開－，北大路書房
・特集: これからの健康支援，教育と医学 9 月号, 2004 年
・特集: 健康支援学－ヘルスプロモーション最前線－，現代のエスプリ, 440 号, 2004 年
・熊谷秋三（責任編集）: 健康と運動の疫学入門；エビデンスに基づくヘルスプロモーションの展開. 医学出版，東京, 2008 年

（文責: 熊谷 秋三）

②健康科学Ⅱ: 運動とスポーツの心理学

1 年次後期の理系コア（運動とスポーツの心理学）を担当し，受講生は 85 名であった。平成 22 年度は，スポーツ競技の心理を中心にしながらも，健康スポーツの心理を含む内容とし，「運動・スポーツの心理学（資料編）」を製本・配布した。授業内容の理解を深めるために, 1 コマの授業を講義，演習，ディスカッションという 3 本柱で組み立て，さまざまな心理的検査用紙を用いて自己を診断し，把握させた。スポーツ競技の心理は如何に試合場面で実力を発揮させるかに焦点を当てた内容とした。

（文責: 橋本 公雄）

③健康科学Ⅲ: アスリートの食事を科学する

アスリートにとって､食事がトレーニングの一部であるという考え方無しに、パフォーマンスの向上を図ることはできない。それにもかかわらずアスリートの食事は量質ともに貧しいこと、食事の自己管理ができない等、意識の低さが指摘されている反面、アスリートの勝ちたいという欲求に対し，数兆円に上るサプリメント市場（社会・経済），ドーピングという果てしないイタチごっこ（科学・倫理）等々，社会のすべてが凝集する。本授業では栄養や食事にとどまらず，多様なサプリメントからドーピングまで、口から入って，パフォーマンスが高まると信じられているものを多岐にわたって，紹介しながら，それがエルゴジェニック（ergogenics）かどうか，科学的エビデンスをもとに紹介した。

（文責: 斉藤 篤司）

（3）周辺教養科目

1）学生による講義評価（健康学講座）

第2部門の教員は，教養科目として年間を通して健康学の授業を行っている。

平成22年度は，理系コア「健康科学」の枠の中で低学年を対象として，一宮が精神疾患や精神保健に関する「健康科学I」を前期に，眞﨑，上園，丸山，入江，永野，福盛によるオムニバス形式の「健康科学Ⅱ」を後期に，それぞれ伊都地区センターゾーンで開講した。高学年向き

には，全学共通教育科目（高年次教養科目）として，「体験で学ぶコミュニケーションと心の健康」(旧:「心理健康学」)を前期に入江と福盛が，「応用健康学」を後期に丸山，上園，眞崎が，それぞれ箱崎で開講した。また，総合科目として山本が後期に「病気と社会と文化」を担当した。

この外，第1部門との共同で，「大学院生に対する人間教育」を通年で筑紫地区で開講した。これらの健康学についての講座は，全学生に共通する身近な問題を取り扱っており，日常生活にも直結するため，関心や需要が大きいものと思われる。

平成22年度の学生による講義評価結果（5点満点）を後の表に示す。評価はおおむね良好であったが，「体験で学ぶコミュニケーションと心の健康」がとくに高い評価を得た。

（文責：永野　純）

2）健康科学Ⅰ

平成10年度に健康科学センターに赴任してから、「精神に関わる問題について考え、精神的な健康について自分なりの合理的な意見を持つこと」を目的とした講義を、1～2年生を対象とした全学教育科目として開講してきた。平成17年度からは「一般学生のための精神医学入門」として単独で開講し、九州大学では医学部以外の学生が精神医学に関して受講することができる唯一の講義である。

平成18年度から全学教育の枠組みが替わり、理系コアの健康科学というカテゴリーの中での開講となったが、今年度も前期に健康科学・として開講した。19年度から講義をすべてスライドで行っている。また、試験を行った。

講義の内容は、専門である精神医学からみたメンタルヘルスに関する講義で、医学としての精神医学についてのイントロダクションから始め、ストレス論、不適応とうつ病、若年者に多い対人ストレスとしての対人関係の病理、精神作用物質、脳障害による精神の異常、さらには精神医療とその特殊性などについて論じた。精神医学的知識で、健康な一般の人々自身に役立つ知識は、ストレスとそれによる精神障害、特にうつ状態（うつ病）、そして、健康維持のためのストレス対策に関するものであるので、そこに重心を置いている。21年度からライフサイクル特に青年期とメンタルヘルス・精神的に健康であるということとその前提について踏み込んで論じた。学生の興味は精神病の特殊な病像にあるようである。

受講登録をした者は211名で、今年度は希望者343名と多く、講義室のキャパシティから受講制限をしなければならず初回に選抜試験を行った。241名が登録し、実際に出席していたのは229名前後で、出席率は高かった。毎回、その講義で取り上げた内容を確認する小テストを行い出席点とした。心理テストは今年も採点が容易な内向性・外向性と神経質さを評価し、九大生の平均に比べ自分が相対的にどのような性格特性をもつのか知ってもらった。また、うつ病スケールを付けてもらい、うつ病の症状と質問紙の精度の限界について認識をしてもらった。この講義により学生自身の精神面の健康さとはどう考えるべきものか、そしてそれを維持するためにどのようなことを知っておくべきかということについての理解を深めてもらえたと考えている。単位認定のための試験は235名が受験し、再試験は実施しなかった。

（文責: 一宮 厚）

3）健康科学Ⅱ

健康科学Ⅱは，理系コア科目の一つとして1年生を対象に健康科学センターの保健管理担当の教員が，誰にでも起きうる心身の疾患などの健康上の諸問題を取り上げ，学生自身の健康の維持増進と学生の身近な人たちへの啓発を目的としている。学習目標としては，自分自身の健康問題や社会的な健康問題に興味を持っている医学的知識に触れる機会が少ない学生を主な対象として，医学や臨床心理学・健康科学などを教養として広く学び，健康に関する正しい見識と良好な生活習慣を身に付けることや，自分自身や身近な友人などの心身の不調の早期発見や,良好とは言えない生活習慣を科学的に説明し改善を助言できるようになることをあげている。単位認定の方法は，各講義担当の教員が毎回の講義で小テストやレポートを課すことで評価することで行っており，学期末試験は行っていない。

受講者数は249名で，実際に出席していたのは230～240名前後で，出席率は高かった。小テストやレポートの結果は，大半の者が良好で講義内容をよく理解しているものと考えられた。249名中，242名が修了した。保健管理を担当しているため，オムニバス形式とはいうものの同じ教員が続けて講義できないことが課題として残っている。

（文責: :眞崎 義憲）

学生による健康学講義の評価

質問内容	平成22年度 前期			平成22年度 後期	
	健康科学II	体験で学ぶコミュニケーションと心の健康	病気と社会と文化	健康科学I	応用健康科学
	一宮	入江・福盛	山本	眞崎・上園 永野・丸山 入江・福盛 一宮	丸山・眞崎 上園
学期のはじめに、この授業には積極的な気持ちでのぞんだと・・・・・	4.3	4.2		3.9	3.8
その後、学期全体を通して授業への積極的な気持ちは続いたと・・・・・	3.7	4.3		3.7	3.3
総合的に考えて、現在この授業に満足していると・・・・・	3.7	4.6		4	4.2
関連する学修を、授業外で週あたり何時間(h、平均)ぐらいしましたか	1.5	1.4		1.3	1.5
授業には何回、出席しましたか	4.9	4.8		4.9	4.3
この授業のテーマ・目標は明確だったと・・・・・	4.2	4.8		4.1	4.4
授業の構成・内容や展開は適切だったと・・・・・	4	4.7		4.1	4.2
授業の準備は周到になされていたと・・・・・	4.3	4.7		4.3	4.3
よいテキスト・教材・資料が使われていたと・・・・・	4	4.7		3.8	4.1
成績の評価基準は明確だったと・・・・・	3.8	4.3		3.5	3.9
レポート作成などに必要な時間・労力が考慮されていたと・・・・・	3.5	4.3		3.7	3.2
授業内容の難易度は・・・・・	3.5	2.6		3.1	2.5
授業の進行ペースは・・・・・	3.3	3		3	3
学生と授業担当者とのやりとりに双方向性があったと・・・・・	3.4	4.8		3.1	3.3
授業担当者に、教えようとする熱意があったと・・・・・	3.8	4.7		3.7	3.9
授業担当者に、学び続けている者の姿勢を見たと・・・・・	3.8	4.2		3.6	3.9
授業担当者は学生の理解度を把握して授業を進めていたと・・・・・	3.3	4.3		3.3	3.5
授業担当者が学生に接する態度は適切だったと・・・・・	3.8	4.8		3.8	4.4
授業の開始・終了時刻は守られていたと・・・・・	4.2	4.3		4.2	4.5
黒板や視聴覚機器の使い方は工夫されていたと・・・・・	4.1	4.1		4.1	4.1
ある分野について一定の知識を身につけることができたと・・・・・	4.1	4.4		4	4.3
ある分野について系統的に学ぶことができたと・・・・・	3.9	4		3.8	4.1
後に専攻科目を学ぶための基礎を固めることができたと・・・・・	3.5	3.5		3	3
自分なりに考えて捉え直すところに学びがいがあったと・・・・・	3.4	4.2		3.2	3.5
調べて検証し考察する方法を経験する学びだったと・・・・・	3	3.9		3.2	2.8
自分の今後にどう役立つかを意識する学びだったと・・・・・	3.8	4.6		3.6	4.1
自分の能力や可能性に自信を得ることができたと・・・・・	3	4		3.2	2.5
自らの関心事として考えることの大切さに気づいたと・・・・・	3.5	4.3		3.5	3.4
物事の見方を新たにすることに楽しみがあったと・・・・・	3.3	4.3		3.6	3.8
より難しい問題に取り組もうとする姿勢を培ったと・・・・・	3	3.6		3.1	2.3
社会的問題の解決と研究とのつながりを見つけたと・・・・・	3.4	3.8		3.4	3.4
考えや意見に共感し合える仲間との出会いがあったと・・・・・	3.2	4.4		3.1	2.3
よい評価・成績をめざして努力することができたと・・・・・	3.5	4.2		3.6	3.4

4）高年次教養科目　理系主題科目Ⅷ　体験で学ぶコミュニケーションと心の健康

現在の大学生は，知識に比べて体験，特にコミュニケーションの発達が不十分であるため，豊かでクリエイティブなコミュニケーションスキルを体験学習する事を目的として，高年次の学生を対象に体験的実習とミニレクチャーを行っている。これから社会に旅立つ，または大学院生として研究生活に入る際に役立つような，実践的な心理的コミュニケーション（知的コミュニケーション，情緒的コミュニケーション）の基本的スキルの習得を目指す授業である。従来は「心理健康学」と称していたが，より具体的に授業内容を反映させるために，今年度から「体験で学ぶコミュニケーションと心の健康」にタイトルを変更した。また，担当教員の診療やカウンセリング活動での多忙さ，授業を実施する箱崎地区から新キャンパスの伊都地区への学生の移転などを考慮して，前期と後期の2

回開講していた授業を前期のみに実施することとした。

この授業ではファシリテーターを必要とすることから，例年50名前後に受講者を制限している。平成22年度は，入江，福盛，アシスタントの馬場　梢さん（人間環境学府）の3人で講義を担当し，最終的な受講者数は31名であった。

本講義を受講する学生は，過去の受講生の口コミによって参加している場合も多く，講師にとっても嬉しいことである。

●講義内容

第1部　オリエンテーション，カウンセリングやコミュケーション概論，実習にあたっての注意

第2部　コミュニケーション序論 自己紹介ゲーム，第一印象ゲーム，ブラインドウォーク，ネガティブリスニングとポジティブリスニング・アクティブリスニング，ライフラインなど

第3部　グループ課題を通してのコミュニケーションやリーダーシップ練習「ブレインストーミングとKJ法」「砂漠で生き延びるには？」「個人情報の集約による地図作成」など

●成果と今後の課題

学生にとって授業での体験はとても新鮮のようであり，毎回行うミニレポートでは，自分のコミュニケーションのスタイルに気がついた，今後に役立つ，といった感想が数多く認められた。大部分が講義形式ではなく体験形式であるため，終始なごやかな雰囲気の中で学習が行われ，回を重ねる毎に受講者同士のコミュニケーションが促進された。また，最終レポートでは，複数の学生が通年での講義を希望していた。

大学側が実施している学生による授業評価では，専門的知識を教授する他の授業と比べて難易度は低く，進行ペースもほぼ平均と同等であるが，それ以外の評価は全て全学平均よりも大きく上回っている。特に，コミュニケーションの授業であるだけに，学生と教員との双方向性や教えようとする熱意，学生に接する態度，今後に役立てる意識づけなどに関する得点が高かった。

（文責: 入江 正洋）

5）高年次教養科目　応用健康学（後期）

平成22年度後期の理系主題科目（高年次教養科目）の応用健康学は，箱崎地区の高年次学生を対象に後期の火曜日一限目に開講した。講義内容は，学生の日常生活に関連する健康問題や身近な疾患の対処法，将来的に自分の意見を持っておいた方が良い社会的な医療問題に焦点を当てた。具体的には食に関する問題，アルコール問題，エイズ予防，代替医療，移植医療，旅行医学，心拍のゆらぎの観察などを丸山が，インフルエンザや結核などの感染症の動向と予防，喫煙の健康への影響，メタボリックシンドロームを眞崎が，血圧の測定法や生命現象のバイオリズムを上園が行い，全員参加型で簡単な実習や体験を通した双方向的な授業を心がけた。

例年のように高年次教養科目の後期授業ということで卒業がかかった受講者も多く，受講態度は概ね良好で真剣さが感じられた。最終的な受講者（履修登録者）数は38名（3年生33名，4年生5名）であった。講義は毎回定刻に始まり休講はなかった。受講者は文系と理系にまたがり，講義内容によっては共通の理解度に至ることが困難な場面もあったため，講義資料を毎回準備しビデオなどの視聴覚教材も使用した。学生による全学授業評価のアンケートでは，実生活へフィードバックできる実利的な授業内容であったとの評価を得たが，成績評価基準が明確でないとの指摘もあった。合否結果は出席回数が6割丁度の学生2名に対してレポート提出を課して全員合格となった。

（文責: 丸山　徹）

6）病気と社会と文化（後期）

上記科目を開講した。

（文責: 山本 和彦）

2. 業務を通した教育

1）定期健康診断時の健康教育

定期健康診断は，本来の目的である健康状態のチェックと同時に，年に一回多くの学生が参加する貴重な健康教育の機会でもある。こうした考えに則り，第2部門では，毎年健診の流れに関する説明時間を利用して学生への健康教育を行などに掲載して周知させる他に，今後もこうした健診などの機会を利用して学生に還元していく必要がある。

（文責：永野　純）

2）サイコリトリート（箱崎分室）へ来室する学生へのリラクゼーション指導

箱崎分室において，サイコリトリートに来室する学生を対象にボディワークの指導を実施している。また，健康相談・学生相談に来室する学生・教職員で，身体への気づ

き・リラクゼーションが必要であると，医師あるいはカウンセラーが判断した者を対象にボディワークの個人指導を延べ61回にわたって実施した。

（文責: 高柳 茂美）

3）ウエルカムホームベース型健康支援プログラム（学生に対する肥満改善および生活習慣病予防支援）

ウエルカムホームベース型健康支援プログラムは、肥満の改善および生活習慣病予防を目的に、学生が日常生活している場（home）で目標達成型の行動変容を目指すものとして各分室（健康相談室）で実施した。平成 22 年度からは、プログラム参加者に歩数計を貸し出し、活動量の目安として歩数による利用してもらえるよう支援した。

4 月の定期健康診断時に、BMI が 25 以上の肥満と判定された学生と腹囲が 85cm 以上あった男子学生にプログラムへの参加を勧奨した。内容は、週 1 回体重・血圧・腹囲を測定し、食事・運動・生活の 3 つの行動目標を実行してもらいながら、個人面接の中で目標を実行するにあたっての助言や食事・運動・生活についての指導を行った。期間は 5〜7 月の 10 週間とし、それ以降の継続は自由とした。

平成22年度の定期健康診断受診者は13,954名であり、BMIが25以上の学生は1,527名（受診者の10.9%）、腹囲が85cm以上の男子学生は1,146名であった。プログラムへの参加申し込み者は195名であったが、7月まで10週間参加した者は91名（男性82名・女性9名）であった。10週間終了後は平均して、体重が3.00kg、BMIが1.09kg/m2、収縮期血圧が13.8mmHg、拡張期血圧が8.6mmHg、腹囲が1.87cm有意に減少した。プログラム期間中の一日平均歩数は、7,352歩であった。

（文責: 松園 美貴）

3. 大学院教育

1）人間環境学府 行動システム専攻健康行動学コース

平成 22 年度の入学者数は，修士課程 10 名（3 名は留学生），博士課程 3 名であり，ほぼ定員を満たした。修士課程の修了者数は 7 名であり，そのうち 3 名は博士課程に進学した。博士課程では, 1 名（山崎将幸氏，博士：人間環境学府）が博士の学位を取得した。また，論文博士第 1 号（竹中晃二氏，早稲田大学，博士：心理学）を出した。年間行事としては，修士論文の中間発表会（5 月），修士論文発表会（2 月），および博士論文公聴会（11 月, 2 月）を開催した。

（文責: 橋本 公雄）

2）生体ストレス人類学特論

上記科目を開講した。（文責: 山本 和彦）

3）大学院共通教育科目（大学院生に対する人間教育 ’10）

平成 22 年度の「大学院生に対する人間教育第一･第二」は例年と同様に，筑紫地区で水曜の 4 限目に開講した。「第一」は前期の 6-7 月に 7 回（7.5 コマ），「第二」は後期の 10-11 月に 7 回（7.5 コマ）開講した。

《講義名》平成 22 年度「大学院生に対する人間教育第一･第二」

《キーワード》人間力，自己実現，コミュニケーション能力

《履修条件》大学院生（前期･後期博士課程）

《授業の目的》大学院生に対する，専門教育を推進する支援的教育。 1）体力アップ・2）精神力アップ・3）コミュニケーション能力アップ・4）チーム力（人的ネットワーク）の形成・5）知る楽しみ・気晴らし・6）就職試験対策等。

《達成目標》心身の状態を自ら判断し，良い状態を維持増進して，自己実現を達成できる力を身につける

《授業の進め方》講義と実習

《授業スケジュール》毎週水曜日の 4 時限目（14:50-16:20），1 回 90 分×6 回 と 4〜5 時限目（14:50-17:05）, 1 回 135 分×1 回の 都合 7 回（7.5 コマ）シリーズ

《授業内容》「第一」（前期）；上園「オリエンテーション･感染症」，丸山「心拍のゆらぎの不思議」，大柿「健康科学の視点」,入江「こころの健康とコミュニケーション」，高柳「心身一如」，杉山「身体運動を通したコミュニケーションスキルトレーニング」，熊谷「メタボリックシンドローム」

「第二」（後期）；橋本・山本（教）「オリエンテーション･教養としてのスポーツ科学－健康手段論を超えて」，永野「感染症と免疫」，林「ゆらぎと健康」，一宮「気持ちが落ち込んだら」，眞崎「たばこよ，さような

ら」，西村「文学に見る健康観」，上園「心身のリズムと健康･まとめ」

《評価法》出席点・実習点・テスト･レポートから総合的に評価した。

《教科書》テキストは定めず，講義・実習に必要な資料は担当教員が作成し配布した。

《受講生数など》平成 22 年度は周知が徹底しなかったためか，前期は登録数 3 名，内修了者 2 名，後期は登録者 4 名，修了者 2 名であり，そのほとんどが筑紫地区以外のキャンパスからの受講生であった。講義や実習に対する受講生の反応は良好で，学生による授業評価も肯定的であった。

（文責: 上園 慶子）

4. 課外活動の支援

本年度の体育会支援は体育会からのメイルでの問い合わせが2件あった。両者とも筋力トレーニングの方法に関するものであった。

体育会総務委員会主催の強化講習会を行った。杉山准教授が「メンタルトレーニング」の講義を12月20日に行った。80名程度の受講者であった。講義内容は好評で，詳細を聞きたいとの積極的要望が多かった。

（文責: 林　直亨）

5. 研究生の指導

平成 22 年度健康科学センター研究生

氏　　名	研 究 期 間	指 導 教 員	研　究　題　目
尾原　遼平	H21 .4. 1～22 .3.31	斉藤　篤司	階級制競技選手の減量時におけるコンディショニングに対する取り組み
劉　　暢	H22. 4. 1～23. 3.31	杉山　佳生	競技選手の心理的サポートに関する研究
李　　旭	H22. 4. 1～23. 3.31	杉山　佳生	エリートバスケットボール選手の心理的スキル
丁　健東	H22.10. 1～23. 3.31	杉山　佳生	Study about character building in university PE class

6. ＦＤ活動

(1) 九州地区大学体育連合

平成 22 年度九州地区大学体育連合研修会

日時：平成 23 年 3 月 13 日（日）・14 日（月）

場所：神園山荘（熊本市）

「平成22年度体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」が平成23年3月13日（日）・14日（月）の2日間，熊本市の神園山荘で開催され，九州大学から橋本公雄教授（会長），杉山佳生准教授の2名が参加した。研修会プログラムは，例年同様，研究発表，招待講演，シンポジウムの3部構成であった。研究発表は，大学体育授業関連研究（8演題），大学スポーツ関連研究（2演題）の合計10演題であり，教員8名，大学院生2名から研究報告があった。年々発表演題数は増え，しかも教員の発表が増加している。招待講演では，アメリカテキサス州からRafer Lutz氏(Baylor University)が招聘され,”A cross-cultural comparison of attitudes and influences on physical activity participation（身体活動参加への意識とその規定力に関する比較文化的研究）”と題して講演が行われた。氏は，現在橋本教授らと環太平洋諸国の大学生の運動・スポーツに対する意識と行動に関する比較文化的研究を行っているが，その分析結果の一部を紹介した。シンポジウムは，「現代社会におけるスポーツ体験の意味を考える」と題して，橋本氏（九大）の司会のもと，根上優氏（宮崎大），山本勝昭氏（福岡大），阿南祐也氏（長崎大）をシンポジストとして討議が行われた。ヒューマンエージェンシー（人間力），レジリエンス（復元力），ドラマチック体験などについて話題が提供され，人間形成に及ぼすスポーツのもつ機能的側面が論議された。今回は参加者数も多く活発な議論がなされ，実りある研修会であった。

（文責: 橋本 公雄）

(2) 九州地区大学一般教育研究協議会

第 59 回九州地区大学一般教育研究協議会は，9 月 10 日（金）～11 日（土）の 2 日間，福岡市の福岡大学で開催され，1 日目には基調講演と系列別部会発表が，2 日目には

「大学教育と就業力育成」をテーマとした全体発表会が行われた。

健康科学センターからは，杉山が参加し，保健体育部会において，「『就業力』に向けて『健康・スポーツ科学演習』で教えるべきこと」という演題で口頭発表を行った。発表では，九大の全学必修科目「健康・スポーツ科学演習」の現行の内容を紹介したうえで，この授業が学生の「就業力」の獲得にどのように貢献しているのかを分析するとともに，今後取り入れていくべき新たな内容についての提案を行った。発表後のディスカッションでは，部会参加者より，多くのご意見，ご提案を戴くことができた。

（文責: 杉山 佳生）

（3）健康・スポーツ科学科目ＦＤ研修会

平成 22 年度健康・スポーツ科学科目 FD 研修会を，平成 22 年 3 月 31 日（水）の午後 1 時 00 分～4 時 40 分に，伊都キャンパスの講義室および体育館で実施した。淵田高等教育開発推進センター長のご挨拶の後，平成 22 年度の健康・スポーツ科学科目の授業にあたっての留意事項や成績評価の基準などについて，説明した。引き続き，平成 22 年度から採択された P&P 研究「疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築」について熊谷教授，林准教授，高柳講師から全体の目的，背景，実施内容の説明および質疑応答が行われた。その後体育館に移動し，演習・実習授業で使用する施設や用具・機材等の説明が行われた。参加者は，常勤講師，非常勤講師および TA 学生であった。

（文責: 林　直亨）

（4）全学ＦＤ

平成 22 年度の全学 FD は以下のとおり開催された。

第1回全学FDの実施について

1. 企画運営: 全学FD委員会，教育改革企画支援室，高等教育開発推進センター
2. 実施日時: 平成22年4月2日（金）10: 30～14: 30
3. 場　所: 旧工学部本館大講義室（箱崎地区）
4. テーマ: 新任教員の研修
5. 趣　旨:

本学に新たに採用となった教員等を対象として，本学が取り組んでいる諸問題等について共通認識を持つことを目的として，本学の歴史を踏まえた将来の展望等について理解を深め，教育者・研究者としての資質と九州大学教員としての自覚を高める契機とします。

6. 出席者: 福盛英明（講師）

第 2 回全学 FD の実施について

1. 企画運営: 健康科学センター，全学ＦＤ委員会
   共 催: 高等教育開発推進センター，学生生活相談連絡協議会・自殺予防対策等検討ワーキンググループ
2. 実施日時: 平成 22 年 9 月 10 日（金）
   10: 00～11: 30（伊都地区）
   15: 00～17: 50（箱崎地区）
3. 場　所: 伊都地区 センターゾーン センター1 号館 1302 講義室
   箱崎地区 創立五十周年記念講堂 大会議室
4. テーマ: 学生の自殺予防とメンタルヘルス対応
5. 趣　旨:

近年，我が国ではメンタルヘルスの問題がクローズアップされており，大学生のメンタルヘルスの悪化についても全国的に問題となっています。九州大学でも，疾病による休学者の増加や成績不良者，不登校・ひきこもり学生への対応ニーズの増加，うつ病を発症した学生への対応の増加など，多くの教職員が教育的指導に困っている実態があります。メンタルヘルス悪化の最悪の帰結である自殺も近年増加しており，大学全体で予防対策をとっていくことが喫緊の課題となっています。メンタルヘルス問題は，専門家だけでなく教職員自らの問題としてとらえるように意識を高め，大学全体の問題として各部署が連携し，システムを整備するなど組織的対応なくしては，効果を挙げることはできません。

自殺予防対策のポピュレーションアプローチ（一般の人々への予防対策）では，誤解や偏見をなくし正しい知識を普及啓発することが重要です。9月10日は世界自殺予防デーと定められており，「自殺総合対策大綱」には，毎年9月10日からの一週間を自殺予防週間とし，国，地方公共団体が連携して，幅広い国民の参加による啓発活動を強力に推進することがうたわれております。

つきましては，教職員の自殺予防への啓発と，メンタルヘルス対応の基礎知識を提供し，対応・指導の力量を高める活動の一環として，自殺予防に関して我が国の第一人

者である高橋祥友先生を招聘し，一般教職員向けの講演会を伊都・箱崎で開催します。

また，箱崎地区での講演後に，教職員同士の意見交換会を行い，学生指導上・学生支援上の各自の取り組みや困難に感じていること，うまくいった工夫についての情報交換・意見交換を行い，メンタルヘルス対応について意識を高めることを目的とします。

6. 出席者: 上園慶子，福盛英明，眞崎義憲，一宮　厚，入江正洋

第 3 回全学 FD の実施について

1. 企画運営: 全学 FD 委員会，教育改革企画支援室，高等教育開発推進センター
2. 実施日時: 平成 22 年 9 月 28 日（火）14: 15〜17: 15
3. 場　所: 50 周年記念講堂大会議室（箱崎地区）
4. テーマ: 学生の「学力」と「学ぶ力」はどのように変わったか〜今日の初年次学生の学習特性について〜
5. 趣　旨:

全学並びに各学部等の教育目標を達成するには，教育内容・方法の不断の改善は欠かせませんが，その前提として，学生，特に初年次の学生の学習特性を把握することが，近年の大学教育においては特に重要視されています。これまでの学習経験が，学生の学習特性をどのように形成し，今日の学生像を作り出しているのでしょうか。また，それに対し，大学及び教員はどのように対応するべきなのでしょうか。

本学の中期目標の第一項目には，「世界的な視野，自律的な学習能力及び実践力を有する学士を育成するために，教育内容及び方法を整備・改善し，一貫した学士課程教育を実施する。」とあります。中期目標に掲げてある一貫した学士課程教育を構築するためには，入学から卒業までの学生の動向を把握し，それに適切に対処することが必須となります。

本学においても，全学教育，各学部，もしくは個々の教員の授業において，学生の学習特性に応じた多様な工夫がなされています。そこで，今回の全学ＦＤでは，それら取組の紹介を通じて各部局の参考としてもらうとともに，教育の実施方法や課題等の意見交換を行うことで，教育方法の改善に役立ててもらうことを目的とします。

6. 出席者: 上園慶子

（文責: 熊谷 秋三）

業　務　活　動

概況 …… 15
内容 …… 15

業　務　活　動

概　況

九州大学健康科学センター（以下，健セ）は，健康について種々の専門分野から科学的研究を行っているが，同時に大学の構成員に対して，自立した個人の健康の維持・増進を支援するという理念のもとに健康教育そして健康支援活動を実践している。

九州大学の学生ならびに教職員に対する健康支援業務は，従来学生が主たる対象であったが，平成 16 年度の大学の独立行政法人化以降は，安全衛生推進室のスタッフも兼務し産業保健活動の割合が非常に増大した。

健康支援業務は，旧健康科学センター第 2 部門（健康医学・心理学）の教員が中心となって担当したが，5 年評価・10 年組織見直しにより平成 23 年 1 月，部門が廃止された後は，健康支援担当者会議のメンバーとして，教員（教授（定員）3 名ならびに准教授 6 名（欠員 1 名））と，技術職員である保健師・看護師（定員 3 名，3 年雇用 2 名，および短時間雇用 3 名）と総務部職場環境室に所属する 3 年雇用の産業保健師 5 名が担当した。

日常の健康支援業務は，九大の 5 つの全てのキャンパスに設置している分室（健康相談室）において，健康相談・診療などのサービスを提供している。学生の定期健康診断は，例年通り 4 月に全学生を対象として実施した。新入留学生のための健診は春秋の 2 回実施した。また，新入生に対する面接を，健康調査結果（健康支援パッケージなど）をもとに 5 月に実施した。教職員の定期健康診断は，健セと環境安全衛生推進室が中心となって企画立案し，一次健診は従来通り外部の業者に委託し 6 月から各事業場で実施したのち，二次検診や健康相談は健セと環境安全衛生推進室が主体となって実施した。

健康教育は，健康支援の活動を充実させるために，学生に対し全学共通教育の中でも行っている。健康支援モデルに基づいた健康学の講義を，平成 22 年度も，健康科学 I，健康科学 II，応用健康学，心理健康学の講義として，健康支援担当者会議のほぼ全員の教員が担当した。学生による講義評価も全学共通の評価法で行った。教職員に対しては，従前通り，10 月の健康週間をはじめ人事課が企画する様々な研修会の講師を務めた。また，学内の FD や学外からの講師依頼にも積極的に応じた。

日常の相談業務や定期健康診断などについては，年間計画のもと，教員・技術職員・事務職員で構成する通称 支援会議を毎月開催し，各担当者や各分室からの課題を討議しつつ情報を共通化し対策決定を行っている。また，教員の共通理解と資質向上のためにＦＤとしての教員研究会を技術職員（保健師や看護師）に対する教育に拡大して毎月 1 回行っている。

医師である教員は，産業医として教職員に対する産業保健活動を行っているが，具体的には 休職，復職判定や長時間労働者の面接などの個別の対応をこなし，各事業場の安全衛生委員会に毎月出席し，また職場巡視などを行っている。

日常の健康支援業務

日常の健康支援業務では，学生および教職員のプライマリー・ケア活動を行うことを最も重視している。福岡地区の 5 つのキャンパスのそれぞれにある健セの分室において，内科医師による一般健康相談と診療，精神科医師・心療内科医師による精神保健相談と診療，ならびに臨床心理士による学生相談，さらには保健師・看護師による保健相談を行った。

平成 22 年度に健康科学センターを訪れた来室者は（23,914）名（前年 19,048 名）であった。常勤の医師 7 名，臨床心理士 1 名，保健師 13 名（うち 5 名は安全推進室所属で，このほかに非常勤の職員もいる）で全 5 キャンパスの毎日の健康支援業務に当たった。教員は週に 2.5〜3 日を各分室での相談・診療業務に当てているが，それでも学生と教職員のニードをこなせないため，非常勤の医師，臨床心理士の方々の協力を得ながら運営している。

学生の定期健康診断

全学生を対象とする定期健康診断は，支援担当の教員と保健師・看護師のスタッフ全員が担当し，多くのアルバイトを雇用して，毎年 4 月に 3 週間にわたり病院地区同窓会館で実施している。

平成 22 年度の受診者は 13,954 名であり，受診率は 74.1%であった。受診率は前年の 75.5%より 1.4%減少した。受診率を向上させるために，例年同様，ポスターや HP などで開催日等の情報を広報し，授業担当教員へ休講措置を依頼した。

健康支援パッケージによる新入生面接

5 月の連休翌週から伊都地区センターゾーン分室において，心理系の教員と内科系の教員が協力して，新入生に対する面接を行ってきた。この新入生面接は，入学時の健康調査票（健康支援パッケージ）にもとづいて，学業に影響を与える可能性のある重大な疾病の罹患や既往がある学生，多くの自覚症状が認められる学生に対して，個人宛に案内状を郵送して面談を促しているものである。なお，平成 18 年度からは，対象の選出条件を変更し，心理的問題は対人コミュニケーションに支障があると考えられる学生を対象に含めることにした。また，従来，面談を実施しても問題が少なかった相談希望のみの学生には，今年度も来談を勧奨するだけに留めた。

その結果，平成22年度の面接の対象者は心理系が86名で内科系が 23 名，来談者は心理系が 83 名（96.5%）で内科系が 23 名（100.0%）であった。

健康教育

学生に対する健康教育は，全学共通教育の中で支援担当の教員が行っている。講義は，低年次向けの「健康科学Ⅰ」「健康科学 II」および「病気と社会と文化」，高年次向けの「応用健康学」「心理健康学」で，健康問題について理解し自分自身で対応するだけでなく，問題を持った他の人に対しても健康支援ができるようになるための健康教育として開講した。学生の授業評価は平成 19 年度以降，本学共通の“学生による授業評価”を利用し，授業内容や方法の改善に努めている。

産業保健活動

支援担当のスタッフは平成 16 年度の独立法人化以降，環境安全衛生推進室の室員を併任している。医師である教員は福岡地区の 7 つの事業場の産業医を担うことになった。

法人化後の人員削減計画のもと大学全体として教職員の労務が増大している。そのため長時間労働者の面接や休職や復職の判定など職員への対応は年々増加しており，支援担当スタッフの業務も増大している

教職員研修

例年，人事課人材評価係が実施する本学の職員のための研修会や国大協が実施する国立大学の職員に対するさまざまな研修会などにおいて講師を務めているが，平成 22 年度も，心身の健康増進のための講義を教員が分担して行った。

技術職員研修

平成 8 年度から健康科学センターならびに環境安全衛生推進室の技術職員（保健師・看護師）を対象として研修を行ってきた。

平成 22 年度も，保健師・看護師が中心となって月に 1 度ずつ学生や教職員に対する栄養指導やそのための調査研究に関する研修を行い，必要に応じて教員が指導を行った。また教員による最近のトピックスを中心とした講義も実施した。学外での研修活動として，九州地区大学保健管理研究協議会や全国大学保健管理研究集会など，学会･研究会での研修や発表も可及的多数のスタッフが参加してレベルアップに努めている。また，大学構内の禁煙対策のため，禁煙指導士の資格保有者も次第に増加している。

（文責: 上園 慶子）

1. 一般健康相談

1) 伊都地区センターゾーン分室

伊都センターゾーン分室は、開室 2 年目を迎えた。前年、箱崎キャンパスから数理学府（数理学研究院）が移転し、対象となる学生は約 5,800 名、教職員は約 300 名となった。

伊都センターゾーンの健康相談・健康教育は、健康科学センターの教員 4 名（一宮・丸山・永野・眞崎）、看護職 2 名（松園・豊田）、事務職員 1 名（田川）と非常勤 3 名医師（内科医：佐々木悠医師、尾前豪医師（今津赤十字病院内科）、精神科医：川島範子医師）で行った。

平成 22 年度は延べ 5,120 名の利用があり（表 1）、前年度より 1,165 名も増加した。

利用状況は例年通り 4〜6 月に集中していた（表 1）この時期は、学生定期健康診断の２次検査（健診フォロー 1,470 名）や新入生面接（101 名）が実施されている。そのため、利用者の 9 割を学生が占めていた。（表 4）

学生では学部生の利用が 900 名近くも増えたが、開室 2 年目にあたり、相談室
の場所が周知されて利用者が増えたものと考えられる。教職員は、651 名の利用があった。健康診断事後措置、産業医面談のほかに、血圧や体重などの定期的な測定による利用が多かった。

内科系の相談は感冒によるものが一番多かったが、前年度の新型インフルエンザ（A/H1N1）のような大流行はなく、健康相談の件数は減少した。（表 2、表 4）

外科系の相談は、創傷・擦過傷と捻挫・打撲が主である（表 3）。伊都センターゾーンには学部 1〜2 年生が在籍することから、全学教育科目の健康・スポーツ科学履修中の外傷や課外活動中の受傷、化学実験中の外傷が含まれている。また、伊都地区への通学手段は公共交通機関が限られるため、雨天や強風時でも自転車やバイクを利用する学生も多く、転倒事故も多かった。

医師による診察は 824 名、与薬は 751 名が受けており、例年より若干増加している。（表 5）医師の不在時には、近隣の医療機関を紹介した。遠距離通学者、一人暮らしの学生の場合、重症者の受診には全学教育課に送迎や付添いをお願いした。

伊都キャンパスセンターゾーンでは、未成年者が多数在籍するキャンパスとして、喫煙対策にとり組んでいる。平成 22 年度は、喫煙者への禁煙支援として卒煙 Q プログラムを開始した。学生 8 名、職員 2 名が参加したが、プログラム終了者は学生 2 名、職員 2 名であった。

（文責: 一宮　厚, 松園 美貴）

表 1　来室者状況

	4〜6 月計	7〜9 月計	10〜12 月計	1〜3 月計	総計	%
学部生	2200	715	777	319	4011	78.3%
修士	99	69	66	41	275	5.4%
博士	50	31	21	17	119	2.3%
教職員	197	161	167	126	651	12.7%
研究生他	5	9	18	15	47	0.9%
その他	6	3	4	4	17	0.3%
計	2557	988	1053	522	5120	100.0%

表 2　疾病別利用者数（内科）

	4〜6 月計	7〜9 月計	10〜12 月計	1〜3 月計	総計	%
感冒	326	86	213	104	729	68.5%
上部消化管	13	4	11	5	33	3.1%
下部消化管	28	10	15	6	59	5.5%
頭痛	30	11	16	8	65	6.1%
その他	48	41	62	27	178	16.7%
計	445	152	317	150	1064	100.0%

表 3　疾病別利用者数（外科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
創傷・擦過傷	71	57	37	13	178	39.4%
打撲・捻挫	81	18	39	14	152	33.6%
熱傷	9	7	4	0	20	4.4%
腰痛	16	10	4	1	31	6.9%
その他	26	16	25	4	71	15.7%
計	203	108	109	32	452	100.0%

表 4　疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
健康相談	38	3	9	9	59	1.5%
禁煙相談	31	39	28	10	108	2.8%
眼科	13	12	16	6	47	1.2%
皮膚科	36	33	24	13	106	2.7%
耳鼻科	12	5	11	6	34	0.9%
歯科	11	4	9	4	28	0.7%
婦人科	14	8	10	13	45	1.2%
健診ﾌｫﾛｰ	1069	202	130	69	1470	37.6%
身体計測	293	324	268	116	1001	25.6%
血圧測定	90	143	89	47	369	9.4%
保健ｺｰｽ	3	0	0	0	3	0.1%
新入生面接	101	0	0	0	101	2.6%
その他	167	40	47	35	289	7.4%
産業医面談	7	13	9	13	42	1.1%
心理・精神相談	75	26	47	32	180	4.6%
健康診断証明書	25	4	0	2	31	0.8%
計	1985	856	697	375	3913	100.0%

表 5　処置

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
診察	479	103	155	87	824	14.0%
与薬	399	108	165	79	751	12.7%
消毒	42	48	41	8	139	2.4%
休養室	90	79	71	39	279	4.7%
病院紹介	124	47	92	44	307	5.2%
心理的対応	100	24	38	31	193	3.3%
その他	1725	690	654	332	3401	57.7%
計	2959	1099	1216	620	5894	100.0%

表 6　心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
心理相談	1	0	0	0	1	0.6%
精神保健相談（医師）	57	19	33	24	133	73.9%
精神保健相談（看護職）	15	6	14	7	42	23.3%
ﾘﾄﾘｰﾄ	0	0	0	0	0	0.0%
ﾎﾞﾃﾞｨｰﾄｰｸ	0	0	0	0	0	0.0%

ｷｬﾘｱﾗｲﾌ等	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談（医師）	2	1	0	0	3	1.7%
電話相談（ｶｳﾝｾﾗｰ）	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談（看護職）	0	0	0	1	1	0.6%
電話相談計	2	1	0	1	4	2.2%
計	75	26	47	32	180	100.0%

2) 伊都地区ウエストゾーン分室

平成 22 年度の伊都地区ウエストゾーンは、工学系の学生と職員あわせて 5000 人以上が生活する規模となっている。学生の多くは実験・研究に従事しているが、取り扱う化学薬品等の種類が多岐に渡ること、大型クレーンや旧型の実験器具を設置した部屋が多いこと、酸素欠乏作業の危険のある部屋の存在、健康影響について未知の新素材開発に携わる研究室の存在、その一方で、これらの管理や対策が必ずしも徹底されていない研究室等が存在することなど、教職員と共有する課題が少なくない。自然環境に恵まれたキャンパスは、修学、研究、生活支援の施設が充実してきている一方、キャンパス周辺は飲食店や遊興施設等が無く、いわゆる息抜きができる環境は不十分である。また、徒歩圏に医療機関が無いため、幅広い一次医療への対応が分室に求められる状況も依然として続いている。

平成 22 年度のスタッフは、健康科学センターの教員 4 名（一宮、福盛、眞崎、永野）、非常勤医師 1 名（佐々木）、非常勤カウンセラー1 名（峰松）と看護職員 2 名（福盛、高尾）、事務職員 1 名（高尾）であった。来室者総数は 6743 人と前年度（5544 人）より 1199 人(22%)増加した。内訳を見ると、内科系と外科系はそれぞれ 1057 人（1067）、378 人（361 人）、と、前年度と同様であったが（表１～表４、表６）、心理・精神相談の利用者数が 1331 人（618 人）と倍増し、健診フォローも増加、禁煙相談が加わっている。

教職員の来室者数が、19 年度 519 人、20 年度の 888 人、21 年度 1333 人、22 年度 1759 人と増加し、来室者に占める割合でも 11%、19%、24%、26%と高まっている。分室の存在や役割の認知度が高まり、血圧や身体測定など定期的に自己管理として利用する教職員が増加しているものと考える。

内科・外科系の受診数は頭打ちとなっているが、これは診察にあたる医師の慢性的な不足によると考えられる一方、潜在的なニーズは他のカテゴリ同様むしろ増加傾向にあるのが実感である。医師の確保も引き続き今後の課題である。

（文責: 永野 純, 高尾祐果）

表 1　来室者状況

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
学部生	422	305	482	283	1492	22.1%
修士	906	598	580	446	2530	37.5%
博士	278	197	146	187	808	12.0%
教職員	461	533	453	312	1759	26.1%
研究生他	4	25	38	16	83	1.2%
その他	20	11	19	21	71	1.1%
計	2091	1669	1718	1265	6743	100.0%

表 2　疾病別利用者数（内科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
感冒	163	116	286	162	727	68.8%
上部消化管	7	8	28	15	58	5.5%
下部消化管	28	6	20	14	68	6.4%
頭痛	30	15	16	19	80	7.6%
その他	41	28	21	34	124	11.7%
計	269	173	371	244	1057	100.0%

表 3　疾病別利用者数（外科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
創傷・擦過傷	42	69	52	28	191	50.5%
打撲・捻挫	38	21	26	16	101	26.7%
熱傷	6	10	2	12	30	7.9%
腰痛	4	3	4	0	11	2.9%
その他	13	13	9	10	45	11.9%
計	103	116	93	66	378	100.0%

表 4　疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
健康相談	141	213	132	115	601	8.7%
禁煙相談	19	52	63	19	153	2.2%
眼科	9	13	11	11	44	0.6%
皮膚科	27	38	38	32	135	1.9%
耳鼻科	4	1	7	3	15	0.2%
歯科	7	1	2	2	12	0.2%
婦人科	6	6	2	4	18	0.3%
健診ﾌｫﾛｰ	743	349	331	179	1602	23.1%
身体計測	280	497	416	319	1512	21.8%
血圧測定	169	302	248	247	966	13.9%
保健ｺｰｽ	0	0	0	0	0	0.0%
新入生面接	0	0	0	0	0	0.0%
その他	137	93	120	166	516	7.4%
産業医面談	18	28	12	12	70	1.0%
心理・精神相談	209	233	278	242	962	13.9%
健康診断証明書	279	23	11	18	331	4.8%
計	2048	1849	1671	1369	6937	100.0%

表 5　処置

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
診察	265	207	448	283	1203	14.6%
与薬	253	189	353	221	1016	12.4%
消毒	30	52	37	30	149	1.8%
休養室	41	66	62	45	214	2.6%
病院紹介	119	76	96	80	371	4.5%
心理的対応	184	203	268	228	883	10.7%
その他	1553	1139	976	718	4386	53.3%
計	2445	1932	2240	1605	8222	100.0%

表 6　心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
心理相談	63	48	78	75	264	27.4%
精神保健相談（医師）	60	60	50	70	240	24.9%
精神保健相談（看護職）	80	99	114	76	369	38.4%
ﾘﾄﾘｰﾄ	0	0	0	0	0	0.0%
ﾎﾞﾃﾞｨｰﾄｰｸ	1	0	0	0	1	0.1%
ｷｬﾘｱﾗｲﾌ等	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談（医師）	1	5	2	6	14	1.5%

電話相談（ｶｳﾝｾﾗｰ）	1	2	1	1	5	0.5%
電話相談（看護職）	3	19	33	14	69	7.2%
電話相談計	5	26	36	21	88	9.1%
計	209	233	278	242	962	100.0%

3）箱崎地区分室

箱崎地区分室の一般健康相談は，保健師・看護師 2 名（中山・國松，いずれも学生相談・精神相談を兼務）・健康科学センターの内科系教官 4 名（一宮・丸山・入江・上園)・医学部からの非常勤医師 2 名（精神科 古賀，神経内科 4-7 月；鳥居, 7-3 月；古田）・事務職員 2 名（4-8 月；藤尾, 9-12 月；藤尾・吉村, 1-3 月；藤尾・安藤）で行った。

全体でのべ 6,324 名（前年度 5,651 名）が利用した。5 キャンパスの中では依然来室者が多いが，次第に伊都地区への移動が進んでいる。

この章ではいわゆる“身体的相談”を主目的に来室した学生・教職員について利用状況を記載する。

内科系相談（表 2）の年間利用者数は 558 名であった。症状は例年同様，風邪症状が圧倒的で，利用者 289 名，内科の 52%を占めた。風邪症状は秋に多発していた。その他の症状としては消化器の症状や頭痛が多かった。

外科的相談（表 3）は 221 名であった。来室理由は例年同様，外傷や打撲・捻挫が多く両者で外科的相談全体の 74%を占めた。

内科･外科以外の疾患など(表 4)で利用した学生は 5,940 名であった。今年度も健診フォローが多かった。例年 4 月に行われる学生定期健康診断の事後処理のため 5～6 月に学生が来室し，6 月に実施される職員健診の事後処理のため 8～9 月に職員が来室するが，いずれも再検査の期限を厳密に区切らず各人の都合に合わせて検査するため，年末まで受診者が続いた。また，体重・体脂肪や血圧の測定だけに来室する学生も多く関心の高さを維持している。さまざまな心身の症状を訴えての健康相談は 38 名であった。

処置別（表 5）に見ると診察・与薬が多いが，保健師・看護師による心理的対応も多い。

箱崎分室では，多目的室ウイズ（with）の部屋・ロビーで，ウエルカムホームベース型の心地よい健康教育を細やかな心くばりで実施中であり好評を得ている。

外国人留学生の来室者は 1 年間にのべ 663 名であった。留学生センターが隣接していること，健セの教員が留学生へのオリエンテーションを担当し場所や役割を講義しているため良く周知され，留学生の利用率は日本人学生に比べ相変わらず高かった。

教職員の利用は 1,511 名であった。近年，産業医活動や，健康診断・衛生委員会などでセンターの存在や機能が広く知られるようになり，自己測定も含め，日常的に利用する教職員も多くなっている。教職員の健康管理に関しては専任衛生管理者 1 名（井上 美緒: 産業保健師，人事課所属）が箱崎地区分室に常駐し，健康科学センター教職員と協力しあって活動している。

（文責: 上園 慶子，中山 博子，國松　令）

表 1　来室者状況

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
学部生	518	347	445	275	1585	25.1%
修士	534	381	323	256	1494	23.6%
博士	244	249	191	132	816	12.9%
教職員	317	531	379	284	1511	23.9%
研究生他	90	74	73	31	268	4.2%
その他	171	179	145	155	650	10.3%
計	1874	1761	1556	1133	6324	100.0%

表 2　疾病別利用者数（内科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%

感冒	69	42	105	73	289	51.8%
上部消化管	12	4	14	9	39	7.0%
下部消化管	14	9	7	4	34	6.1%
頭痛	15	4	11	7	37	6.6%
その他	44	40	53	22	159	28.5%
計	154	99	190	115	558	100.0%

表 3　疾病別利用者数（外科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
創傷・擦過傷	27	34	27	20	108	48.9%
打撲・捻挫	17	9	22	8	56	25.3%
熱傷	3	3	7	0	13	5.9%
腰痛	3	1	2	2	8	3.6%
その他	16	6	6	8	36	16.3%
計	66	53	64	38	221	100.0%

表 4　疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
健康相談	15	4	8	11	38	0.6%
禁煙相談	4	6	0	9	19	0.3%
眼科	9	9	12	5	35	0.6%
皮膚科	26	28	11	15	80	1.3%
耳鼻科	10	6	9	5	30	0.5%
歯科	11	7	15	4	37	0.6%
婦人科	7	12	11	6	36	0.6%
健診ﾌｫﾛｰ	530	543	257	70	1400	23.6%
身体計測	147	258	190	99	694	11.7%
血圧測定	60	45	63	20	188	3.2%
保健コース	0	0	0	0	0	0.0%
新入生面接	0	1	0	0	1	0.0%
その他	114	55	81	63	313	5.3%
産業医面談	98	89	81	85	353	5.9%
心理・精神相談	662	623	643	645	2573	43.3%
健康診断証明書	84	21	13	25	143	2.4%
計	1777	1707	1394	1062	5940	100.0%

表 5　処置

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
診察	262	215	245	244	966	13.1%
与薬	87	48	96	68	299	4.1%
消毒	38	44	36	23	141	1.9%
休養室	39	28	39	19	125	1.7%
病院紹介	166	135	161	123	585	8.0%
心理的対応	633	606	630	622	2491	33.9%
その他	935	923	604	286	2748	37.4%
計	2160	1999	1811	1385	7355	100.0%

表 6　心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
心理相談	223	223	259	288	993	38.6%
精神保健相談（医師）	153	141	124	149	567	22.0%

精神保健相談（看護職）	33	32	33	25	123	4.8%
ﾘﾄﾘｰﾄ	203	182	195	155	735	28.6%
ﾎﾞﾃﾞｨｰﾄｰｸ	17	17	12	11	57	2.2%
ｷｬﾘｱﾗｲﾌ等	0	0	0	1	1	0.0%
電話相談（医師）	10	1	6	4	21	0.8%
電話相談（ｶｳﾝｾﾗｰ）	10	7	6	6	29	1.1%
電話相談（看護職）	13	20	8	6	47	1.8%
電話相談計	33	28	20	16	97	3.8%
計	662	623	643	645	2573	100.0%

4) 病院地区分室

病院地区分室は，医歯薬系の学生や教職員以外に，九州大学病院の職員の健康管理も担当しており，平成 17 年度から病院地区の専属産業医（九州大学病院を除く）となった入江が分室長を務めている。病院の建て替えに伴い，平成19年12月に旧九州大学病院歯科医療センターに移転した。

平成 22 年度の病院地区分室の一般健康相談（診療を含む）は，健康科学センター教員の入江（医歯薬系の専属産業医を兼任），丸山（九州大学病院専属産業医を兼任），ならびに非常勤内科医師 7 名，保健婦 1 名（戸田）と看護師 1 名（田中）が行った。精神保健相談は，心療内科医の入江と精神科医の一宮，非常勤精神科医が担当し，心理相談は，基本的に学生に対しては，非常勤の臨床心理士の中園照美先生，教職員に対しては磯貝希久子先生にそれぞれ週一日担当して頂いた。その他，平成 20 年度から安全衛生推進室所属の産業保健師の体制も強化されることになり，教職員の健診や健康管理業務の企画や運営などの中核的役割を担う病院地区は 2 名に増員された。平成 22 年度は，野村，荒尾（9 月まで），副島（10 月から 12 月まで），上田（1 月以降）が従事した。

平成 22 年度の病院地区分室の来室者数は，学部生 709 名，大学院生 716 名，教職員 2,440 名，研究生 82 名で，その他を含めると総計 3,980 名であった。平成 21 年度（総計 2,483 名）よりも 1,497 名も来室者数が増加した。対象者別にみても，平成 21 年度と比べて全体的に来室が増加したが，特に教職員の増加が著しかった。増加の理由として，平成 21 年度は，年度途中に旧九州大学病院歯科医療センターの一部を事務棟に改修するための工事が行われることになり，9 月から 3 月にかけて利便性や稼働性が悪い旧九州大学附属病院外来に移転したことが挙げられる。

教職員の来室者数は，平成 16 年度の 546 名から平成 17 年度 941 名，平成 18 年度 1,287 名，平成 19 年度 1,405 名，平成 20 年度 1,605 名へと増加の一途を辿っていたのが，平成 21 年度は 1,440 名に減少した。これは，上述した一時的な移転場所が手狭であったため，面談件数を制限したことによる。平成 22 年度は，2,440 名と再度増加傾向に転じ，過去最多を記録した。平成 16 年度からの大学法人化前と比べると，教職員の来室者数は約 5 倍となっている。大学法人化以降，教職員を対象とした健康診断事後措置や長時間労働者面接，心理・健康相談などの産業保健活動が充実してきていることや，後述するようなメンタルヘルス不調者が法人化を境に増加しているためである。

利用者数を疾患別にみると，内科系が 207 名（平成 20 年度 219 名），外科系が 88 名（同 63 名），内科・外科系以外が 4,143 名（同 2,554 名）であり，産業保健関係や心理相談関係など、内科・外科系以外の増加が著しかった。心理・精神相談は，前年の 784 名から 1,051 名へと増加している。臨床心理士による心理相談（142 名から 196 名へ），医師や看護職による精神保健相談（640 名から 849 名へ），いずれの場合も同様である。平成 16 年度の心理・精神相談件数が 96 名であったことを考慮すると，実に約 11 倍もの極めて著しい増加であり，病院地区におけるメンタルヘルス不調者数の増加や対応件数の増加を示している。

ちなみに，平成 22 年度は，精神神経科の横田謙治郎医師，平野昭吾医師，第二内科の吾郷哲朗医師，中野敏昭医師，医療経営管理学の馬場園明医師，桑原一彰医師，臨床薬理学の笹栗俊之医師に非常勤医師を依頼した。

（文責: 入江正洋，戸田美紀子，田中朋子）

表 1　来室者状況

	4〜6月計	7〜9月計	10〜12月計	1〜3月計	総計	%
学部生	289	124	164	132	709	17.8%
修士	130	74	40	40	284	7.1%
博士	201	121	66	44	432	10.9%
教職員	782	726	575	357	2,440	61.3%
研究生他	33	18	13	18	82	2.1%
その他	4	5	8	16	33	0.9%
計	1,439	1,068	866	607	3,980	100.0%

表 2　疾病別利用者数（内科）

	4〜6月計	7〜9月計	10〜12月計	1〜3月計	総計	%
感冒	32	15	23	25	95	45.9%
上部消化管	6	5	6	5	22	10.6%
下部消化管	3	5	7	4	19	9.2%
頭痛	2	3	3	4	12	5.8%
その他	15	6	16	22	59	28.5%
計	58	34	55	60	207	100.0%

表 3　疾病別利用者数（外科）

	4〜6月計	7〜9月計	10〜12月計	1〜3月計	総計	%
創傷・擦過傷	6	12	6	9	33	37.5%
打撲・捻挫	13	2	4	3	22	25.0%
熱傷	4	3	1	0	8	9.1%
腰痛	3	1	3	0	7	8.0%
その他	4	6	3	5	18	20.5%
計	30	24	17	17	88	100.0%

表 4　疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4〜6月計	7〜9月計	10〜12月計	1〜3月計	総計	%
健康相談	7	8	9	3	27	0.7%
禁煙相談	0	20	46	21	87	2.2%
眼科	2	5	3	0	10	0.2%
皮膚科	5	9	6	2	22	0.5%
耳鼻科	3	3	1	1	8	0.2%
歯科	10	11	5	16	42	1.0%
婦人科	5	3	3	1	12	0.3%
健診フォロー	988	527	307	137	1,959	48.8%
身体計測	20	76	51	21	168	4.2%
血圧測定	21	17	13	7	58	1.4%
保健コース	0	0	0	0	0	0.0%
新入生面接	0	0	0	0	0	0.0%
その他	14	18	19	17	68	1.7%
産業医面談	97	153	98	127	475	11.8%
心理・精神相談	217	231	322	271	1,051	23.0%
健康診断証明書	59	45	28	24	156	3.9%
計	1,448	1,126	921	648	4,143	100.0%

表 5　処置

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
診察	188	236	225	249	898	19.4%
与薬	31	22	32	42	127	2.7%
消毒	2	7	3	8	20	0.4%
休養室	10	5	11	9	35	0.8%
病院紹介	37	34	22	49	142	3.1%
心理的対応	192	205	265	234	896	19.3%
その他	1,107	699	490	216	2,512	54.3%
計	1,567	1,208	1,048	807	4,630	100.0%

表 6　心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
心理相談	42	42	53	59	196	18.6
精神保健相談（医師）	158	166	220	181	725	69.0
精神保健相談（看護職）	17	23	58	26	124	11.8
ﾘﾄﾘｰﾄ	0	0	0	0	0	0.0
ﾎﾞﾃﾞｨｰﾄｰｸ	0	0	0	0	0	0.0
ｷｬﾘﾔﾗｲﾌ等	0	0	0	0	0	0.0
電話相談（医師）	0	0	0	1	1	0.1
電話相談（ｶｳﾝｾﾗｰ）	0	0	0	0	0	0.0
電話相談（看護職）	0	0	1	4	5	0.5
電話相談計	0	0	1	5	6	0.6
計	217	231	332	271	1,051	100.0

5) 大橋地区分室

表 1　来室者状況

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
学部生	86	58	87	67	298	48.1%
修士	71	21	32	35	159	25.6%
博士	14	16	13	2	45	7.3%
教職員	32	37	14	9	92	14.8%
研究生他	6	3	6	7	22	3.5%
その他	0	0	4	0	4	0.6%
計	209	135	156	120	620	100.0%

表 2　疾病別利用者数（内科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
感冒	36	13	34	12	95	69.9%
上部消化管	3	2	3	5	13	9.6%
下部消化管	1	0	2	0	3	2.2%
頭痛	1	2	3	4	10	7.4%
その他	2	2	7	4	15	11.0%
計	43	19	49	25	136	100.0%

表 3　疾病別利用者数（外科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
創傷・擦過傷	12	17	7	7	43	58.1%
打撲・捻挫	7	1	7	2	17	23.0%
熱傷	1	4	1	1	7	9.5%
腰痛	1	0	0	0	1	1.4%
その他	5	0	1	0	6	8.1%
計	26	22	16	10	74	100.0%

表 4　疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
健康相談	1	0	0	2	3	0.7%
禁煙相談	0	0	0	0	0	0.0%
眼科	0	0	0	1	1	0.2%
皮膚科	0	0	3	1	4	0.9%
耳鼻科	0	0	0	0	0	0.0%
歯科	0	0	0	0	0	0.0%
婦人科	0	0	1	0	1	0.2%
健診ﾌｫﾛｰ	40	10	1	1	52	11.8%
身体計測	0	0	0	0	0	0.0%
血圧測定	0	0	0	0	0	0.0%
保健ｺｰｽ	0	0	0	0	0	0.0%
新入生面接	0	0	0	0	0	0.0%
その他	17	28	11	42	98	22.2%
産業医面談	1	9	2	0	12	2.7%
心理・精神相談	69	44	73	71	257	58.3%
健康診断証明書	11	1	1	0	13	2.9%
計	139	92	92	118	441	100.0%

表 5　処置

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
診察	75	35	52	29	191	26.0%
与薬	53	17	43	23	136	18.5%
消毒	15	22	10	8	55	7.5%
休養室	0	6	0	2	8	1.1%
病院紹介	4	0	6	6	16	2.2%
心理的対応	50	43	62	64	219	29.8%
その他	53	32	18	6	109	14.9%
計	250	155	191	138	734	100.0%

表 6　心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
心理相談	49	43	60	69	221	86.0%
精神保健相談（医師）	19	1	11	2	33	12.8%
精神保健相談（看護職）	0	0	0	0	0	0.0%
ﾘﾄﾘｰﾄ	0	0	0	0	0	0.0%
ﾎﾞﾃﾞｨｰﾄｰｸ	0	0	0	0	0	0.0%
ｷｬﾘｱﾗｲﾌ等	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談（医師）	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談（ｶｳﾝｾﾗｰ）	1	0	2	0	3	1.2%

電話相談（看護職）	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談計	1	0	2	0	3	1.2%
計	69	44	73	71	257	100.0%

6) 筑紫地区分室

筑紫地区の一般健康相談は，健康科学センター教員，眞崎，上園，丸山，入江，永野，一宮（精神保健相談）と保健師 1 名（濱田），事務職員 2 名（高原，福嶌）で行った。

平成 22 年度の来室者数は，学部生 36 名，大学院生 661 名，職員 383 名，研究生・その他 13 名を合わせると 1,127 名であった。平成 21 年度と比較して 200 名ほど来室者が増加しているが、特に教職員の来室増加が顕著である。

疾患別利用者数では，内科が 159 名，外科が 78 名，内科・外科以外が 1044 名であった。内科・外科以外は健診フォローが 427 名であり、前年度と比較して 240 名ほどの増加であり、健診フォローでの来室が増えていることは健セの取り組みが評価されいてるものと思われる。

来室者数は，昨年の 921 名より大幅に増加した。学生の受診は微増で、先に述べたように教職員の来室増加がそのほとんどを占めている。内訳で検討すると，内科・外科ともに利用者数はほぼ横ばいである。しかしながら、疾患別で検討すると，心理・精神相談が昨年の 166 名から 230 名に 65 名も増加している。昨年度相談者数と比較すると 40%もの増加である。また，産業医面談も 21 名と増加している。こちらも毎年増加の一途をたどっている。

心理・精神相談がここ２年増加の一途をたどっている。どうようにメンタル不調を訴える学生に関する教員からの相談は，毎年増加してきている。学生を抱える教員と連携していくことが重要であると思われる。

保健活動としては，生活習慣病の予防，メンタルヘルスに問題を持つ学生の支援を中心として行った。分室の役割は広く学生のプライマリ・ケアを行うことである。今までにも増して，分室で幅広い機能も充実させるとともに，地区内における FD の実施などメンタルヘルス面での対応の強化が望まれる。

（文責: 眞崎 義憲，濱田 百合）

表 1　来室者状況

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
学部生	17	11	5	3	36	3.2%
修士	193	124	121	75	513	45.5%
博士	58	20	42	28	148	13.1%
教職員	89	162	72	60	383	34.0%
研究生他	2	0	7	4	13	1.2%
その他	5	11	9	9	34	3.0%
計	364	328	256	179	1127	100.0%

表 2　疾病別利用者数（内科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
感冒	28	16	38	23	105	66.0%
上部消化管	0	3	5	6	14	8.8%
下部消化管	3	1	1	2	7	4.4%
頭痛	4	2	0	2	8	5.0%
その他	13	4	5	3	25	15.7%
計	48	26	49	36	159	100.0%

表 3　疾病別利用者数（外科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
創傷・擦過傷	22	6	4	4	36	46.2%
打撲・捻挫	9	3	1	2	15	19.2%
熱傷	6	0	10	2	18	23.1%
腰痛	3	0	0	0	3	3.8%
その他	4	0	1	1	6	7.7%
計	44	9	16	9	78	100.0%

表 4　疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
健康相談	4	1	4	8	17	1.7%
禁煙相談	6	14	7	1	28	2.7%
眼科	3	4	4	0	11	1.1%
皮膚科	5	6	4	0	15	1.5%
耳鼻科	2	0	0	0	2	0.2%
歯科	2	0	0	1	3	0.3%
婦人科	2	3	1	2	8	0.8%
健診フォロー	161	168	61	37	427	41.7%
身体計測	14	34	39	9	96	9.4%
血圧測定	15	36	40	13	104	10.2%
保健コース	0	0	0	0	0	0.0%
新入生面接	0	0	0	0	0	0.0%
その他	11	20	9	22	62	6.1%
産業医面談	4	10	3	4	21	2.1%
心理・精神相談	55	47	59	48	209	20.4%
健康診断証明書	14	2	2	2	20	2.0%
計	298	345	233	147	1023	100.0%

表 5　処置

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
診察	78	68	61	53	260	18.3%
与薬	63	42	60	44	209	14.7%
消毒	28	3	9	4	44	3.1%
休養室	2	3	3	6	14	1.0%
病院紹介	22	12	25	14	73	5.1%
心理的対応	42	35	42	33	152	10.7%
その他	218	238	126	90	672	47.2%
計	453	401	326	244	1424	100.0%

表 6　心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
心理相談	21	21	25	23	90	43.1%
精神保健相談（医師）	25	22	27	22	96	45.9%
精神保健相談（看護職）	9	4	5	3	21	10.0%
ﾘﾄﾘｰﾄ	0	0	0	0	0	0.0%
ﾎﾞﾃﾞｨｰﾄｰｸ	0	0	0	0	0	0.0%
ｷｬﾘｱﾗｲﾌ等	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談（医師）	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談（ｶｳﾝｾﾗｰ）	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談（看護職）	0	0	2	0	2	1.0%
電話相談計	0	0	2	0	2	1.0%
計	55	47	59	48	209	100.0%

2. 産業保健活動

1）伊都地区センターゾーン事業場

今年度、伊都地区センターゾーン事業場の産業保健活動は，六本松を引き継ぐ形で一宮が嘱託産業医として担当した。引き続き教職員の相談件数はさほど多くなかった。

事業場の巡視・衛生委員会は年間を通して予定通り行われた。この地区は実験施設はあるものの、その数は少なくまた大きな施設でもないため、巡視においても安全面の問題は多くない。しかし、新しいキャンパスであるために主として屋外に安全面の問題を多く抱えている。自転車道などの整備がなされておらず交通問題は見過ごせない問題である。

（文責: 一宮　厚, 豊田千寿子）

2) 伊都地区ウエストゾーン事業場

伊都地区ウエスト・ゾーンでは、産業医永野と保健師高尾が毎月の職場巡視と安全・衛生委員会、ならびに健康診断および事後措置などの産業保健活動を担当した。

教職員の伊都地区ウエスト・ゾーン分室への来室者は19年度519人、20年度888人、21年度1333人、22年度1759人と年々増加し､受診者に占める割合でも11%､19%､24%、26%と高まっている。

裁量労働者の報告は21年度187件(41名)､22年度284件（70名）と増加していた。面談希望者には面談を実施した。

職員健診の結果に基づいて行った、肥満者を対象とした継続的な生活指導「リフレッシュプログラム」は本年度も好評であり、プログラム終了後も測定を継続する職員が多かった。

職場巡視は毎月 1 回、産業医、労働衛生コンサルタント、安全・衛生委員、保健師、巡視先の衛生管理者、および人事係のメンバーで実施された。主な指摘事項は、棚等の転倒防止、整理整頓、転落防止、試薬の管理方法であった。

各部門でも週 1 回、衛生管理者が巡視を行っており、安全衛生に関する労働者の意識も向上しているが、部門により報告状況に差があり、更なる周知・徹底が必要である。

安全・衛生委員会の主な議題は、喫煙所の整備、窓からの落下防止対策､駐車･駐輪マナーについてであった。伊都地区ウエスト・ゾーンに存在するにもかかわらず、箱崎地区、筑紫地区など、他の事業場の管理対象となっている施設が増えてきているが、それらは本委員会の管轄外となっていることから、十分な管理が行き届いているのか、あるいは本事業場での方針との整合性がとれているのかなど､懸念がある｡来年度の課題の一つとなる。

（文責: 永野　純, 高尾 祐果）

3) 箱崎地区事業場

箱崎地区事業場の産業保健活動は, 産業医 1 名（上園）と専任衛生管理者の産業保健師 1 名（井上美緒: 総務部人事課職場環境室 所属, 環境安全衛生推進室勤務）を中心としつつ, 健康科学センターの内科系教員 3 名（一宮・丸山・入江）, 保健師・看護師 2 名（中山・國松）, 事務職員 2 名（H22. 4～8; 藤尾, 9～12; 藤尾・吉村, H23.1～3; 藤尾・安藤）の全面的協力を得て進めた。

(1) 日常の健康相談

箱崎分室には平成 22 年度に全体で 6,324 名の利用者があったが, 教職員の利用は 1,511 名(24%)であった。健診の事後処理や体重・体脂肪・血圧の自己測定のための来室者が多かった。風邪や頭痛など身体的症状のために来室した職員は少数であった。休職中や復職後の職員など, 心身の問題を抱える職員に対する面談を 1～2 カ月毎に延べ 234 回（実数 37 名）に、また関係者に対する面接を延べ 118 回（実数 47 名）実施しており, このための来室者も多い。

(2) 健康診断

6 月に実施した職員健診の事後処理のため 8～9 月から職員が来室したが, 再検査は期限を区切らず, 職員の都合に合わせて実施したため, 年末まで受診者が続いた。また, 過体重の職員を対象に, ステージ理論を利用したリフレッシュプログラムを展開し, その体重管理のフォローのためや個人的な関心のため, 測定を継続する教職員も多かった｡受診後, 有所見者には所見の種類により, 紹介状を発行して再検査や治療を勧告したり, 或いは面談を行って事後指導を実施した。

(3) 裁量労働者の報告書

箱崎地区事業場にある部局の教員から, 1 年間でのべ 692 件（実数 140 名）の報告があった。全員今までに報告をしたことがある人達であり, 初回の報告は無かった｡健康診断の結果を参照して, 健康状態を確認した｡面談希望者にはメールや電話で問い合わせを行い, 面談を延べ 7 回（実数 5 名）実施した。

(4) 長時間労働者の面談

時間外勤務が 1 か月で 100 時間を超えるか, 2～6 カ月の平均で 1 か月につき 80 時間を超える場合は, 健康障害を

生じていないかを確認するため，面談を行った。H22 年度は延べ 7 回（実数 5 名）が対象となった。面談結果は意見書にて所属部署や部局へ報告し事後対策を依頼した。多くの場合，面談までに時間差があり，面談時は既に疲労が回復していたが，回復が完全でない職員については面談を継続した。

(5) 職場巡視

箱崎地区･貝塚地区の部局を順に，毎月 1 回巡視した。巡視は産業医，専任衛生管理者の他，巡視先部局の衛生管理者 1〜2 名・工営係 1〜2 名が加わり，1〜1.5 時間程度見て回った。巡視結果は産業医と専任衛生管理者の連名で報告し，部局からは改善報告書が提出された。年々，部局での対策が進んで指摘事項の改善が見られるものの，相変わらず，整理・整頓・清潔・清掃の 4S，高圧ボンベの固定，本棚やキャビネットの固定，消火器・防災設備・避難通路，喫煙に関することが指摘された。薬品管理システムへの薬品登録は徐々に進んでいた。

表 1: 平成 22 年度職場巡視

	巡視箇所	詳細
4 月	理学研究院等	科学部門科学部門（2 号館，旧工学部 3 号館）
5 月	理学研究院等	先導研（2 号館 2 階, COE 棟，旧工学部共同実験棟）
6 月	農学研究院	1 号館 1〜6 階
7 月	農学研究院	2 号館 1〜6 階
8 月	農学研究院	3 号館 1〜6 階
9 月	貝塚地区	文学部
10 月	情報基盤研究開発センター	情報基盤研究開発センター（1〜6 階）
11 月	附属図書館	
12 月	事務局	情報企画課事務室（第 1 庁舎 1 階）
1 月	理学研究院等	事務部（本館 1〜2 階）
2 月	理学研究院等	宙空環境研究センター（1〜2 階）
3 月	理学研究院等	博物館

(6) 安全･衛生委員会

箱崎地区事業場の衛生委員会は箱崎地区部会（委員長: 農学研究院長，吉村 淳先生）の担当で毎月 1 回，原則として第 4 火曜日の午前 10:30 から開催された。産業医・専任衛生管理者と労働衛生コンサルタントから都合 2 件の職場巡視報告とその改善報告，各部会からの活動報告がなされ，折々に議題が提案された。赤水問題・喫煙場所・駐車場問題・放置自転車問題・防犯対策などが議論された。最後に産業医と労働衛生コンサルタントがそれぞれミニレクチャーを行った。22 年度は新型インフルエンザの集団感染が懸念されたが，幸い本学では事前の予防教育や連絡体制が周知され，集団感染は発生しなかった。

表 2:ミニレクチャーの話題

	産業医	労働衛生コンサルタント
4 月	なし	なし
5 月	なし	なし
6 月	A 型肝炎	安全配慮義務について
7 月	熱中症	法定試薬の取り扱いについて
8 月	インフルエンザ様疾患について	火災予防について
9 月	海外へ行くときの感染症対策について	労働安全衛生週間について
10 月	子宮頸がんとワクチンについて	なし
11 月	ノロウィルス感染症について	なし
12 月	職場復帰	なし
1 月	防火訓練	—

2 月	運動教室	—
3 月	なし	—

（文責: 上園慶子, 井上美緒）

4）病院福岡地区事業場

病院福岡地区の平成 22 年度の産業保健活動は, 産業医丸山と荒尾真由美産業保健師が担当した。年間を通じた産業医の面談件数は, 2,440 名であり（病院教職員と馬出地区教職員を含む）, 職員健康診断の事後措置としての面談と長時間勤務に対する面談が主であった。病院教職員に限った身体関連での面談と心理精神面での面談の比率は、病院分室全体の来室者統計（馬出事業場の教職員、学生、研究生、留学生などを含む）からすると、前者を後者が大きく上回っているのは明らかであろう。これには病院職員の場合対人サービスが多いので、業務は常に逼迫し、業務負荷が大きくなっていることに起因しているものと考えられる。

病院職員における産業衛生相談や長時間労働の面談に関しては, 事務系職員を主に入江が, 医療系職員を主に丸山が対応し, 精神的な問題に関しては一宮が対応した。病院地区でも心理面での問題を抱えるケースも次第に多くなり, 中園・磯貝両カウンセラーへの相談件数も徐々に増えつつある。事務は福元（常勤）と奥村（非常勤）が担当した。なお 10 月に荒尾真由美産業保健師の退職にともない, 後任を戸田美紀子保健師が担当した。職員健康診断で血圧高値, 脂質異常, 耐糖能障害, 過体重を指摘された職員に対しては, 他地区同様リフレッシュプログラムを呼びかけており, 徐々に対象者も増えつつある。

職場巡視は病院地区事業場においても年度計画に基づいて予定通りに行われた。安全衛生週間においては病院長をトップとした安全衛生パトロールを行い当月の職場巡視もこれに替えた。病院内も病棟, 事務部, 検査部や放射線部など業務の特殊性によって指摘事項はまちまちであったが, 室内照度の問題（照度不足）や配線の問題（タコ足, ケーブルの過長と巻線）はかなり共通した指摘事項であった。通年での職場巡視箇所を表に示す。

安全衛生委員会も年間を通して予定通り行われた。委員会では巡視報告以外にも職員健診や特殊検診の案内と結果報告, 時間外労働の実態, 衛生週間の取り組み, 年間の労働災害の内容と件数などについて議論された。

その他シックハウスの起因物質とされるホルムアルデヒドの発がん性が指摘されて以来, 昨年度は院内ワーキンググループで管理方法を検討し, 今年度から病院検査部内の病理部で法令に基づく一元管理を行っている。

	巡視箇所
4 月	北棟 3〜5 階
5 月	北棟 6〜7 階
6 月	北棟 8〜9 階
7 月	北棟 10〜11 階
8 月	総合外来, 医療器材サプライセンター
9 月	検査部
10 月	放射線部, 病理部, 遺伝子・細胞療法部
11 月	事務部総務課, 戦略企画課, 患者サービス課
12 月	事務部経理課
1 月	救急救命センター, 集中治療部
2 月	薬剤部
3 月	ウエストウィング, 栄養管理室

（文責: 丸山　徹, 戸田美紀子）

5）馬出地区事業場

馬出地区事業場の産業保健活動は, 産業医の入江と産業保健師の野村が担当した。馬出地区事業場と病院福岡地区事業場を合わせた病院地区分室への教職員の来室者数は, 平成 16 年度の 546 名から平成 17 年度 941 名, 平成 18 年度 1,287 名, 平成 19 年度 1,405 名, 平成 20 年度 1,605 名, 平成 21 年度 1,440 名（一時移転のため減少）, 平成 22 年度 2,440 名へと著しい増加を示しており, 大学法人化以降約 5 倍となっている。概して, 教職員のメンタルヘルス不調や過重労働, あるいはそれらに起因する休職者数が増加し, そのための面談件数が増えている。特に, 心理・精神相談は, 平成 16 年度の 96 名から平成 22 年度は 1,051 名となり, 実に約 11 倍もの増加である。医師による精神相談の大部分は, 産業医である入江が担当している。産業医の入江は, これまで職場メンタルヘルスや平成 13 年の脳・心臓疾患の労災認定基準改正の草案作成に携わってきた経緯から, 病院職員のメンタルヘルスや過重労働に関する面談も担当しているが, 近年は事務系職員や医師のメンタルヘルス問題への対応件数が増えている。

（文責: 入江 正洋, 野村 桃子）

6) 大橋地区事業場

大橋地区産業医として, 職場巡視を行った。

（文責: 山本 和彦）

7) 筑紫地区事業場

筑紫地区の平成２１年度の産業保健活動は，産業医眞崎と保健師濱田が担当した。教職員の来室者数は 383 名で昨年より 110 名と顕著に増加している。また，産業医面談を求める職員が増加して, 21 名となった。筑紫地区での産業保健活動の認知が広がり来室者が増えたのと同時に、学生、教職員のメンタルヘルス問題に関して対処に苦慮している指導的立場の教員が多く相談に訪れている。

長時間労働を行っている裁量労働勤務者が著しく多いわけではないが，長時間労働を行っている者が偏っていることは否めない。改善を指示しているところであるが，長期的に改善が見られることは少ない。啓発とともに全学での対応が望まれる。

事業場の職場巡視・衛生委員会は年間を通して予定通り行われた。キャンパス内にクレーン等の工作機械が多く設置されていることもあり，各衛生委員の意識は高く活発な議論が行われた。

高圧ガスボンベの管理問題であるが、集中ガスボンベ庫が設置され、その出入庫管理もＰＣ上で管理されるようになった。

職場巡視ではここ数年の巡視成果が蓄積され，指摘事項の改善が多く見られようになった。その反面，改善が見られない部署が際だってきた面も否めず，今後はさらなる指導が必要だと考えられる。

（文責: 眞崎 義憲）

3. 学生相談

(1) 箱崎地区分室

箱崎地区・学生相談では，常勤カウンセラー(福盛)，非常勤カウンセラー，（平井先生，吉永先生，斎藤先生，高野先生，太田先生：原則各週 1 回・4 時間が主）（高野先生は複数曜日）で対応した。また、今年度より、人間環境学研究科より、佐々木玲仁准教授に非常勤で週に 4 時間学生相談カウンセラーとして勤務していただいた。

相談件数は伊都ウェスト 264 件，伊都センター1 件，箱崎 993 件，病院 196 件，大橋 221 件，筑紫 90 件の合計 1765 件であった。

予約に関しては、長期休み期間中は予算的な問題で常勤のみで相談対応を行った。

＜個人カウンセリング＞

相談相談の特徴は，従来通りうつ，対人関係，ひきこもりからの復学相談などの問題が多く，発達障害を疑われる事例などもみられた。また関係者の相談（保護者・教職員）の相談が増えてきている。引きこもり学生や問題行動学生で困った関係者と連携しながら、面接を行っている。

＜サイコリトリート活動＞

サイコリトリート（学生の居場所活動）は、活性化してきたが、平成 22 年度は月に 1～2 回の頻度で行事を実施した。平成 21 年度からスタッフとして人間環境学研究院の大野真利奈さんに入ってもらっているが、今年度も継続してスタッフとして活動していただいた。また，九州産業大学の峰松教授にも行事等にご参加いただいている。

リトリートのメンバーが、福岡市こども総合相談センターでボランティア活動をしたりといった、居場所間交流も行われている。また、福盛も平成２２年５月２１日（金）18:30～20:30 福岡市こども総合相談センターで行われた、平成２２年度第１回思春期ピアサポーター研修・交流会で、居場所活動に関する講演を行った。

＜親の会活動＞

親の会を２回行った。第１回は平成２２年９月１１日（土） 13:00～16:00 「学生生活と修学の問題での保護者のサポート」というテーマで、吉良安之先生（九州大学学生生活・修学相談室 教授）にご講演いただいた。内容は、大学生活における親子関係の重要性、一人暮らしの大変さ、日常における穏やかで自然な親子関係づくりが大切、親が問題に気づいたときは迅速な対応、回復期はなるべくゆっくりかかわる、カウンセラーにとっての親との連携の重要性などで、講演終了後も活発な意見交換が行われた。

また第２回は平成23年３月５日(土) 13:00～16:00、OB 学生の体験談と峰松修先生のコメント、というテーマで、２名に講演していただいた。以前来談して居場所(リトリート)を活用していた学生に保護者向けに、当事者からのメッセージを伝えていただいた。この企画は学生がつらい体験をしているときに、周囲の人がどのようにかかわることがいいのか、という点について、生の声が語られるため、親の会の参加者にとっては、毎回とても心に響く内容であり、続けてほしいという要望の多い企画である。今回も、家にも居場所がなくなっていて煮詰まってつらいときに、大学の居場所への参加が助けになった、家族からはゆっくり進ん

でいいことを保証されたときにほっとした、などの話があり、当事者でないと語れない内容の深い話に参加者が耳を傾けた。

(2) 伊都地区ウエストゾーン分室

伊都地区学生相談では，平成 22 年度は相談件数が 264 件（職員・保護者を含む）であった。相談は、常勤カウンセラーの福盛と非常勤カウンセラーとして峰松（週 1 回、4 時間）が担当した。主な面接のテーマは，不登校が多く、その他うつ，研究室適応，学業，神経症，発達の偏りがあることが疑われる学生への支援など多岐にわたった。工学部だけでなくセンターゾーン所属の学生も来談している。また教職員の相談にものっている。

研究室で人間関係のもつれがおこってしまうと、大学内に居場所のなさを語る学生さんも多く、学生のこころのよりどころとしての居場所を作る必要があるので、来年度に向けて整備したい。

(3) 病院地区分室

病院地区学生相談では，平成 22 年度は相談件数が 196 件（職員・保護者を含む）であった。主に非常勤カウンセラーの中園（週 1 回、4 時間）と教職員相談担当カウンセラー磯貝が担当した。

(4) 筑紫地区分室

筑紫地区学生相談では，週に 4 時間ほど，常勤カウンセラー福盛が対応した。平成22年度は相談件数が90件（職員・保護者を含む）であった。

(5)今後の課題

平成 22 年度の後半に、凍結されていたカウンセラーの後任人事が行われることが決定し、平成 23 年度中には新しいカウンセラーを迎えることができることになった。これにより、学生の相談のキャパシティが少し高くなり、学生がいつも相談にのれる体制にはまだ十分とはいえないが、改善されることが予想される。本センターのカウンセリング業務を日頃からご支援いただいている関係各位に感謝したい。

（文責：福盛　英明）

4. 精神保健相談

精神的な問題について，健康科学センターの各キャンパス分室において医師 が診療したものを精神保健相談業務として報告する。平成 15 年度以降，常勤の精神科医（一宮）と心療内科医（入江）が中心となって精神症状を有する学生・教職員の診療業務に携わっている。精神面の問題での談者は年々増えており，カウンセラーを始め，内科医，保健師・看護師などによる対応も増えている。診断は 15 年度から ICD-10 に従って分類している。

常勤の精神科医（一宮）は，平成 22 年度も大橋地区を除くすべてのキャンパスにおいて週に半日の相談の機会を確保すべく各地区を転々として診察に当たった。原則として月曜から水曜をほぼ半日毎各地区での診療に当て，それでは不十分な場合，木曜や金曜の半日を病院地区などで診療に当てた。金曜午前は従来から九大病院精神科神経科の外来で診察をしてきたが，そこでも九大の学生・教職員の診察を行っている。そもそも常勤の精神科医 1 人では 5 つのキャンパス（7 つの事業場）の全てをカバーするには十分ではない。そのため，従来通り医学部精神科神経科の教員に非常勤業務をお願いした。22 年度は箱崎地区には水曜に織部直弥医師，病院地区には水曜に前期は横田謙治郎助教，後期は平野昭吾助教に来ていただいた。また，伊都地区には金曜日に外部から川島範子医師に来ていただいている。

常勤の心療内科医（入江）は相談件数の多い箱崎，病院地区と，筑紫地区において診察に当たった。また各地区では，他の内科医師も精神面の問題を抱えた学生・教職員の診療している。

産業医としての職員の休職にまつわる面談では，復職の可否に関する手間のかかる判定業務も多く，入江と一宮の業務の多くを占めている。

こうして平成 22 年度の精神面に関する診療は学生 161 名と教職員 252 名，そのほか卒業生などの 122 名に対して行った。

学生の診療者数は前年度が 139 名であったので 15.8%増加した。診察回数は延べ 690 回で前年の 637 回に比べ約 8.3%増加し，1 人当たりの診察回数は前年度の約 4.6 回から約 4.3 回 ／人（最多 31 回～最少 1 回）に若干減っている。長期の治療を要する学生は市内の医療機関を紹介するが，九大病院に受診することができる学生は引き続き大学病院外来でも治療している。

教職員は前年度の 191 名に比べて約 31%増加した。独法化直前の平成 15 年の 23 名に比べると毎年着実に増加して約 11 倍にも増加したことになる。延べ診療回

数は 946 回で前年の 685 回に比べ約 38%増加している。また 1 人当たりの診察回数は前年度の約 4.1 回から約 3.8 回／人（最多 21 回～最少 1 回）に若干減った。産業保健は，復職後の職場環境調整などのために職場の上司との面談が必要で，本人の診察だけでは終わらないのが普通である。この上司等との面談業務が増えており，教職員との面談時間は増加している。産業医としての業務にますます多くの時間を取られている状況である。

診断内訳は，学生では，ストレス関連障害ならびに神経症（F4 ）96 名，うつ病を中心とする感情障害（F3 ）22 名，妄想性障害を含む統合失調症（F2 ）圏内 3 名，その他 37 名で，教職員はストレス関連障害ならびに神経症（F4 ）65 名，うつ病を中心とする感情障害（F3 ）29 名，妄想性障害を含む統合失調症（F2 ）圏内 2 名，アルコール障害を主とする精神作用物質による障害（F1）1 名，その他 155 名であった。その他とはほとんどが教職員の上司などの関係者との産業医面談とである。産業保健においては，職員自身のみならず，職場での対応などのために関係者支援が重要になり時間も割かれることになる。

（文責: 一宮　厚）

5. 健康診断

学生定期健康診断

平成22年度の学生定期健康診断は，例年通り病院地区の同窓会館を会場として実施した。4月2, 5, 6, 7日が新入生（新入修士学生等を含む）, 9日から21日までが在校生を対象とした健診であった。最終日の4月22日は，新入外国人留学生の健診日とした。その後, 6月下旬まで再検査や精密健診を行った。さらに，肥満学生に対する「ウェルカム」生活習慣改善プログラムを実施した。

平成 22 年度の定期健診の全体的な受診数は 13,954 人，受診率は 74.1%で，前年度の 75.5%から僅かに低下した。例年と同様に，学部新入生は 99.4%と高い受診率を示し，就職活動年に相当する学年では受診率が高くなるものの，その間の学年，とりわけ学部 2 年生の低い受診率も例年と同様であった。さらに，学部 2 年生は，今年度は休講措置の配慮がなされなかったことの影響を受けて，例年よりもさらに低い受診率（52.8%から 43.0%へ）となり，これが全体の受診率の低下に反映されている。また，学部によるばらつきが小さくないことも例年通りであり，受診率が低い学年や学部では，当該部局等に働きかけているものの，効果が見られない集団も存在する。

健診の実施については特に大きなトラブルはなく，日程通りに無事終了した。ただし，指定日外受診者の中には健診項目の異なる者があり，その対応が煩雑であったことが反省材料として残る。

（文責: 永野　純）

精密健診

定期健康診断で精密検査が必要と判断された者について，精密健診を行った。心電図や心音にて心疾患が疑われた者は，健診会場にて健康科学センター医師が診察を行い，必要に応じて後日分室で面談を行った。血圧の高い者（150/90 mmHg 以上）や脈拍の速い者（110 bpm 以上）は，後日分室にて二次測定および自己測定を行い，異常が続く場合は医師が診察を行った。尿検査異常（蛋白または糖が 1+以上）のあった者は，後日分室にて最大 2 回の再検査を行った。既往歴などから必要と判断された者についても，分室にて診察を行った。これらの健診にて，さらなる精査や治療が必要と判断された者については九大病院などの二次医療機関へ紹介した。

胸部Ｘ線（間接撮影）で異常所見のあった者のうち，骨格系異常者（高度の側弯など）は整形外科に紹介し，心疾患が疑われた者は，分室にて健康科学センター医師が診察を行った。これ以外の者（主に呼吸器疾患が疑われた者）については，福岡結核予防センターの県庁内診療所および伊都，病院，箱崎の 3 地区で検診車による直接撮影を行った。その結果治療または精査が必要な者は九大病院へ紹介し，精査は不要だが経過観察が必要な者は 3 ヶ月，6 ヶ月，または 12 ヶ月後の再検査（直接撮影）を行った。胸部Ｘ線の読影（間接撮影，直接撮影とも）は，九大病院放射線科の全面的な協力のもとに行われた。

以上についての該当者数は，「資料」章の「定期健康診断精密検査実施状況」項に示す。

（文責: 永野　純）

職員健康診断

大学法人化以降，国立大学時代に行っていた健康診断から，労働安全衛生法に則った健康診断へと順次移行し，現在はほぼその体勢が整っている。国立大学時代に低かった一般健康診断の受診率も，法人化以降は受診率を高めるための様々な活動を行い，全学的にもこれに呼応す

るようになり，平成 22 年度の職員総合健康診断（一般健康診断および前期特殊・特定業務従事者健康診断）の受診者数は 5,494 人，受診率は 99.37%（平成 20 年度は 98.91%，21 年度は 99.01%）に達している。具体的な健康診断の種類と時期は以下の通りである。

・一般健康診断（6 月）
・特定業務従事者健康診断（前期 6 月，後期 11-12 月）
・特殊健康診断（前期 6 月，後期 11-12 月）
・雇入時健康診断（各月随時）
・労災二次健康診断（8 月）
・海外派遣労働者健康診断（随時）
・遺伝子組換え及び研究用微生物実験従事者健康診断（11 月）
・ＶＤＴ作業従事者健康診断（11 月-12 月）
・電離放射線健康診断（2 月, 4 月, 9 月, 11 月）
・大腸集団検査（11 月）
・胃集団検査（11 月）
・子宮頚がん検査（11 月）

このうち，雇入時健診の受診数は 1,420 人，後期特殊・特定業務従事者健診は 2,480 人，海外派遣労働者健診は 18 人，遺伝子組換え等実験従事者健診は 1,390 人（学生 882 人を含む）であった。

（文責: 永野　純）

職員健康診断・事後措置

総合健診等の結果，再検査や精密検査が必要とされた事後措置対象者は以下の通りであった。

・二次検査（尿）: 866 人
・二次検査（血圧）: 284 人
・要産業医面談: 148 人
・要精査（再検査）: 990 人
・治療継続勧奨: 986 人

事後保健指導として，肥満者に対する「リフレッシュプログラム」（生活習慣改善のために本学独自に開発した特別プログラム）を勧奨した。参加同意者は 92 人（昨年度は 91 人）であった。

（文責: 永野　純）

遺伝子組換えおよび研究用微生物実験従事者等の健康診断

本学では，九州大学遺伝子組み換え実験安全管理規則および九州大学研究用微生物安全管理細則の規定に基づいて，遺伝子組み換えおよび研究用微生物を用いた実験に従事する職員，ならびに学生を対象として，特別健康診断を実施している。遺伝子組み換え実験安全委員会の委員である健康科学センターの教員（医師），および病院地区の保健師が実務を行い，総務部職場環境室が事務処理を担当している。

本年度の対象者は, 1,390 名（職員 508 名，学生 882 名）であった。全員を対象に，質問票を用いて既往歴，現在の治療歴，自覚症状，定期健康診断受診の有無と結果についての問診を行った。

昨年度から，下記基準に示すレベル 3 以上は全員特別健康診断対象者とし，下記基準 2 あるいは 3 に該当する者に関しては健康科学センターの教員（医師）が問診票による判定を行った上で対象者を決定し，特別健康診断を実施することとなった。健診結果の総合判定は同じ教員が実施することになった。

以下に特別健康診断実施にかかる要否判断の基準を示す。

1. レベル 3 以上（「遺伝子組み換え実験従事者のうち封じ込めレベルが P3 以上」あるいは「研究用微生物実験従事者のうちレベル 3 以上の研究用微生物を用いて実験を行う者」）の実験従事者
2. レベル 2 の実験従事者のうち，人に対する病原微生物を取り扱う者で，かつ「自覚症状」や「定期健康診断受診状況と結果」等の記載から受診が必要と判断された者。
3. その他，とくに受診が必要と判断された者。

上記の基準 2, 3 に該当した者 11 名について，問診票などによる判定を実施し，11 名全員が特別健康診断の対象外となった。特別健康診断はレベル 3 二層等する該当者がいなかったため、「遺伝子組み換え実験従事者等健康診断」及び、「総合判定」は実施しなかった。

質問票は，平成 16 年以降は職場環境室で保管している。また，血液検査の余剰血清は，筑紫地区の冷凍庫で保管しており，その保管期間は原則として 5 年間である。

（文責: 眞崎 義憲）

外国人留学生の秋季特別健康診断

実施期日: 平成 22 年 10 月 27 日
実施場所: 健康科学センター病院分室および歯学部講義室
対 象 者: 春季留学生は，留学生センターのみならず正規の学部生にも含まれるため，全体数の把握は困難

であった。秋季入学者の留学生で，入学の際に胸部X線撮影を含む健康診断を受け，健康診断書を提出し，かつ結果に異常が無いと判断された場合は，健康診断受診を免除する措置を行った。その結果，秋季の留学生健診対象候補者 568 人のうち，受診が必要であった者は 363 人であった。この数は，平成 20 年度に 179 人であったものが平成 21 年度に 326 人と大幅に増加し，今年度はさらに増加したことになる。

受 診 者: 303 人（平成 21 年度 288 人）

受 診 率: 83.5%（平成 21 年度 88.3%）

検査項目: 身体測定，尿検査，血圧測定，心電図，内科診察，胸部X線撮影

秋季は，胸部X線撮影の異常者は 8 名，尿検査の異常者は10名，血圧測定の異常者は4名，その他内科診察での有所見者が 2 名であった。尿検査･血圧･心電図に所見がある学生は健康科学センター分室において二次･精密検査を行った。胸部X線撮影で精査が必要とされた学生は，日本人学生と同様に，放射線科で直接撮影による再検査を行い，必要に応じて九大病院呼吸器科や放射線科等を紹介した。

（文責: 永野　純）

大学院生対抗駅伝大会のための健康診断

実施期日: 平成 22 年 11 月 16 日～11 月 30 日（8 日間）

実施場所: 健康科学センター伊都地区ウエストゾーン分室

対 象 者: 工学府駅伝大会

受 診 者: 95 人

工学府駅伝大会への出場希望者を対象として大会直前に実施している。ただし，本健康診断は，学生定期健康診断を受診していることを受診の条件とし，項目は医師による問診と診察である。2 人が参加不可と診断され，7 人が条件付きで承認，残る 88 人は参加可能と診断された。

（文責: 永野　純）

6. 健康および安全・衛生に関する全学会議

1）保健管理専門委員会

保健管理専門委員会は，健康科学センター長を委員長とする全学的な学生保健管理業務に関する会議であり，本会議を通じて学生保健管理に関する日常業務への全学の理解と協力を得ている。

以前は各部局の学生委員会の委員のうちから選ばれた教員と関連の事務官，計 26 名で構成されていたが，現在は委員会の集約や委員会への参加の負担軽減などのために，委員は地区別に定めた順番で選出された 12 名で構成されている。平成 22 年度も前年度と同じく以下のような内容について開催した。筑紫地区事務部 教務課保健係が事務を担当している。

（第 1 回）

日時: 平成 22 年 7 月 2 日（金）午前 10 時 30 分から

場所: 箱崎理系地区 21 世紀交流プラザⅠ 2 階講義室B

報告:

1. 平成 21 年度の発熱･登録システムの登録結果について
2. 平成 22 年度学生定期健康診断の受診率について
3. 学生に対する禁煙支援（卒煙Q）の進捗状況について
4. 学生に対するメタボ対策プログラム（ウエルカムホーム型）の進捗状況について

議題:

1. 副委員長の選出について
2. 平成 21 年度学生健康診断等経費の決算（案）について
3. 平成 22 年度学生健康診断等経費の予算（案）について
4. その他

（第 2 回）

日時: 平成 22 年 8 月 5 日

（平成 22 年 8 月 20 日締切の書面会議）

平成 22 年 8 月 27 日

（平成 22 年 9 月 2 日締切の書面会議）

議題:

1. 平成 23 年度　学生定期健康診断実施要項（案）について

（第 3 回）

日時: 平成 23 年 2 月 10 日（木）10 時 30 分から

場所: 箱崎理系地区 21 世紀交流プラザⅠ　2 階講義室A

報告:

1. 平成 22 年度学生保健管理に係る年間行事について
2. 平成 22 年度の感染症発生結果と平成 22 年度の感

染症登録状況について

3. 学生に対する各種支援事業（肥満教室, 禁煙教室など）の状況について
4. 自殺防止対策について
5. その他

議題：

1. 平成 23 年度学生保健管理計画（案）について
2. その他

（文責: 上園 慶子）

2）環境安全衛生推進室会議

（第 1 回）

日時：平成 22 年 5 月 27 日(木)10 時 00 分～11 時 05 分

場所：事務局第二庁舎 3 階　第三（小）会議室

議事に先立ち、本会議新構成員の紹介があった。

（新構成員）

・環境安全センター　池水教授（組織名変更及び昇任）
・川崎　職場環境室室長
・児島　学術研究推進課課長
・倉富　施設企画課課長補佐
・山下　環境整備課課長補佐

報告：

(1) 各部門の報告事項

①健康衛生管理部門

2 月 17 日(水)及び 3 月 24 日(水)に開催された同部門会議において、以下の事項について報告及び審議した旨報告があった。

・職場巡視及び安全・衛生委員会報告について
・平成 22 年度職員健康診断判定資料について
・九州大学職員休職規程の見直しについて
・就業規則の変更について

②環境安全管理部門

平成 21 年度薬品管理システム登録状況及び平成 21 年度後期作業環境測定結果について報告があった。

③高圧ガス等安全管理部門

箱崎地区高圧ガス製造施設保安管理協議会設置に係る検討状況及び教職員向け高圧ガス保安講習会の実施予定について報告があった。

④特定分野安全管理事務部門

平成 21 年 10 月 1 日付け文部科学省科学技術・学術政策局から依頼のあった「管理下にない放射性同位元素等に関する一斉点検の実施」について、4 月中に、該当する放射性同位元素等や核燃料物質はない旨中間報告済みであること、また、現在、各部局で点検報告中であり、点検漏れがないか確認し、放射線障害防止委員会に附議のうえ、文部科学省に報告する予定であることについて報告があった。

⑤エネルギー資源管理部門

5 月 18 日(火)に開催された同部門会議において、以下の事項について報告及び審議した旨報告があった。

・九州大学の地球温暖化対策実現に向けて～体質改善～
・平成 22 年度省エネパトロール実施計画（案）について

(2) 平成 22 年度安全衛生管理年間計画について

平成 22 年度安全衛生管理年間計画（案）について、前回の本会議で審議し、各部門持ち帰りの上 3 月 5 日までに修正等意見をお願いしたところ特段意見の提出はなかったので、本計画（案）が議決されたこと、また、福岡東労働基準監督署へ提出し、各部局及び各事業場安全・衛生委員会へ送付済みであることについて報告があった。

(3) 平成 21 年度職員総合健康診断の受診状況について

平成21年度職員総合健康診断の受診状況について報告があった。

議題：

(1) 九州大学安全衛生ガイドライン（案）について

前回（平成 22 年 2 月 26 日）の本会議で審議した安全衛生ガイドライン（案）について、各部門から修正案の提出があったことについて説明があった。

続いて、ガイドライン（案）について審議の結果、本件については持ち帰りのうえ、修正等がある場合は 5 月 31 日（月）までに職場環境室安全衛生係あて提出することとなった。

なお、提出された修正案が軽微な場合は、該当部門と協議のうえ環境安全衛生推進室長に一任し、必要な場合は書面会議を開催のうえ審議することとなった。

(2) 平成 22 年度省エネパトロールの実施計画（案）について

5 月 18 日開催のエネルギー資源管理部門会議において議決された平成22年度省エネパトロールの実施計画（案）について説明があった。

続いて、実施計画（案）について審議の結果、各研

究院長あて事務連絡「省エネパトロールの実施について」は環境安全衛生推進室長名で通知することとし、原案通り議決した。

(3)「九州大学喫煙対策」に基づく喫煙場所の指定（案）について

平成 21 年 9 月に策定した「九州大学喫煙対策」に基づき、各地区協議会及び事務局が指定した喫煙場所（案）について、4 月 23 日開催の喫煙対策検討ワーキング・グループにおいて議決された旨説明があった。

続いて、喫煙場所（案）について審議の結果、原案どおり議決した。

なお、本件については、6 月 8 日開催の部局長会議に報告の上、各地区協議会及び各事業場安全・衛生委員会あて通知する予定である。

その他：

(1) 精神疾患による病気休暇、休職及び復帰後の状況について

学内でうつ病等の精神疾患に罹患した者が増加しているが、病気休暇、休職及び復帰後の状況について把握し、どのような対策をとるべきか、本会議で示して欲しい旨発言があった。

※次回開催日　7 月中旬予定

（第 2 回）

日時：平成 22 年 7 月 28 日(水)10 時 00 分～11 時 20 分

場所：本部第二庁舎 2 階　第二会議室

報告：

(1) 各部門の報告事項

①健康衛生管理部門

5 月 26 日、6 月 16 日及び 7 月 21 日に開催された部門会議において、以下の事項等について報告及び審議した旨の報告があった。

・平成 21 年度職員総合健康診断の受診率について

・卒煙Ｑプログラムについて

・平成 22 年度職員総合健康診断受診状況について

・胸部エックス線撮影のデジタル化について

②環境安全管理部門

7 月 26 日に開催された部門会議において、薬品管理システム及び作業環境測定について審議した旨の報告があった。

③高圧ガス等安全管理部門

筑紫地区高圧ガスボンベ貯蔵所の運用開始について報告があった。

④特定分野安全管理事務部門

以下の事項について報告があった。

・7 月 6 日に開催された核燃料物資管理委員会において、福岡教育大学で発見された未登録の核燃料物資を受け入れることが決定したことについて

・平成 21 年度動物実験に関する自己点検・評価報告書について

・7 月 15 日に開催された人員管理委員会に放射線障害防止委員会から放射線障害防止血液検査室に人員配置を要望したことについて

・遺伝子組換え実験従事者等に対する教育訓練について

⑤エネルギー資源管理部門

平成 22 年度省エネパトロール（夏季）の実施について報告があった。

(2) 第 7 回七大学安全衛生管理担当者連絡協議会の開催について

8 月 26 日に東北大学において開催され、上園環境安全衛生推進室長、横本教授、池水教授、光武環境整備課長及び職場環境室から 3 名が出席することについて報告があった。

(3) 平成 22 年度全国安全週間について

7 月 1 日から 7 月 7 日の全国安全週間及び同週間の行事として、各安全・衛生委員会等において実施された事項について報告があった。

(4) 平成 22 年度安全衛生セミナーⅠの実施について

有機溶剤作業主任者等を対象とした「安全衛生セミナーⅠ」を 7 月 23 日開催し、42 名の参加があったことについて報告があった。

議題：

(1) 大学等における農薬の適正な使用及び保管管理等の徹底について

平成 21 年 12 月 25 日開催の本会議において、環境安全管理部門で再発防止策を検討、文部科学省への報告を作成することとしていたため、審議した結果、原案どおり提出することとなった。

その他：

5 月 27 日開催の本会議の際、今泉理事から発言のあった「精神疾患による病気休暇、休職及び復帰後の状況について」は、健康衛生管理部門において検討を開始することとした旨の説明があった。

※次回開催日　10 月上旬予定

（第３回）
日時：平成 22 年 10 月 12 日(火)14 時 00 分～14 時 55 分
場所：本部第二庁舎 3 階 第三会議室
議事に先立ち、10 月 1 日付けで就任された藤木理事の紹介が行われた。
報告：
(1) 各部門の報告事項
①健康衛生管理部門
7 月 21 日及び 9 月 15 日に開催された部門会議において、以下の事項等について報告及び審議した旨の報告があった。
・リフレッシュプログラム実施状況について
・卒煙Ｑプログラムについて
・胸部エックス線撮影のデジタル化について
②環境安全管理部門
特になし。
③高圧ガス等安全管理部門
特になし。
④特定分野安全管理事務部門
以下の事項について報告があった。
・8 月 23 日に開催された放射線障害防止委員会について
・管理下にない放射性同位元素等に関する一斉点検結果報告書の提出について
・動物実験計画に係る教育講習会の実施について
⑤エネルギー資源管理部門
9 月 30 日に開催された部門会議において、以下の事項等について報告及び審議した旨の報告があった。
・平成 22 年度 4 月～8 月のエネルギー使用量について
・平成 22 年度省エネルギー（冬季）パトロールの実施について
(2) 第 7 回七大学安全衛生管理担当者連絡協議会について
8 月 26 日に東北大学において開催された標記協議会の概要について報告があった。
(3) 平成 22 年度前期作業環境測定結果について
平成 22 年 6 月から 7 月にかけて実施された前期作業環境測定の結果について報告があった。
混合溶剤の測定評価を検討する必要があること、管理区分 2 及び 3 であった作業場の改善状況を把握していくことについて説明があった。
(4) 平成 22 年度全国労働衛生週間について
毎年 10 月 1 日から 10 月 7 日の間は、「全国労働衛生週間」となっており、同週間における実施事項を定め、各総括安全衛生管理者及び各部局長へ通知、安全衛生セミナーⅡ及び乳がん自己検診講習会を実施したことについて報告があった。
(5) 衛生管理者等資格取得について
衛生管理業務に携わる者を養成するため、衛生管理者試験準備講習会を 9 月 8 日、9 日に実施、34 名が受講、衛生管理者試験を 9 月 27 日及び 10 月 27 日に受験し、資格を取得予定であることについて報告があった。
(6) その他
環境保全管理委員会において「環境報告書 2010」が作成されたことの紹介があり、同報告書の抜粋版に基づき、関係部分について説明があった。
議題：
(1) 全学的な環境安全衛生体制機能の強化について
平成 22 年度計画を具体的に実行するために他大学の安全衛生・環境保全管理体制の調査を実施すること、調査は作業 WG により行うこととし、WG メンバーを、上園室長、横本環境安全衛生推進室教授と事務から施設部及び職場環境室とすることについて説明があり、審議の結果、これを議決した。
なお、作業ＷＧには、必要に応じ、推進室会議メンバーに協力いただきたいとの依頼があった。
(2) 九州地区国立大学法人安全衛生連絡会の運営について
平成 20 年 11 月 27 日開催の九州地区国立大学法人安全衛生連絡会の際、運営に関して協議されたが、持ち帰りとなり、決定されていないため、各大学の意見等を踏まえた要項を連絡会に提案することについて説明があった。
審議の結果、開催方法については、原則として年 1 回開催とし、当番校については、次回の連絡会において協議することを議決した。
※次回開催日　12 月上旬予定

（書面会議）
日時：平成 22 年 11 月 1 日（平成 22 年 11 月 5 日締切）
議題：
(1) 平成 22 年度計画の自己点検・評価について

○付議理由

平成 22 年 10 月 8 日開催の大学評価専門委員会において、第 2 期中期目標期間における年度計画の進捗状況に係る自己点検・評価 については、添付の「実施要領」により行うことが決定され、本年度より、10 月 1 日時点における年度計画の進捗状況を確認し、その内容を「中期目標・中期計画進捗管理システム」に入力することとなっている。

ついては、進捗状況を以下のとおりとすることについて諮った。

◎平成 22 年度計画

・中間自己評価：Ⅲ（年度末までに「達成内容」をすべて達成することが見込まれる）

・中間自己点検・評価

（達成内容の進捗状況）

七大学安全衛生管理担当者連絡協議会参加大学の安全管理体制などを参考に、集中管理体制を構築している大学を選定するとともに、具体的な調査を実施するためのワーキング・グループを設置し、検討を開始した。

＊参考：年度計画の達成内容

環境安全衛生推進室の機能を強化するため、同室において、他大学の安全衛生・環境保全管理体制を調査の上、望ましい管理体制と必要な要員の配置を検討する。

（第 4 回）

日時：平成 22 年 12 月 22 日(水)16 時 00 分～16 時 50 分

場所：本部第二庁舎 2 階　第二会議室

議事に先立ち、新構成員である水野学術研究推進課課長補佐の紹介が行われた。

報告：

(1) 各部門の報告事項

10月12日に開催した前回の本会議以降に各部門で審議された事項等について、各部門から以下のとおり、報告があった。

①健康衛生管理部門

10 月 13 日、11 月 17 日及び 12 月 15 日に開催された部門会議において、以下の事項等について報告及び審議した旨の報告があった。

・各事業場の職場巡視及び安全・衛生委員会の報告について

・平成 22 年度職員後期健康診断について

・定期健康診断時の採血に係る病院検査部からの要望について

・労災保険二次健康診断対象者に対する産業医面談の実施状況について

②環境安全管理部門

池水環境安全管理部門長から、以下の事項について報告があった。

・11 月 4 日に排出水について、福岡市からの立入検査が行われたこと及び理学部の排出水の水質が悪化、基準値を超過することが懸念されることについて

・12 月 13 日から後期の作業環境測定が行われており、1 月にかけて実施されることについて

・化学物質の管理規程を整備することについて

なお、藤木理事より、排出水の水質が基準値を超過することが懸念される場合には、事前に該当部局長に 連絡するほうがよいとの発言があった。

③高圧ガス等安全管理部門

筑紫地区において、高圧ガス容器管理システム導入の試運転を開始したことについて報告があった。

④特定分野安全管理事務部門

以下の事項について報告があった。

・平成 22 年度放射性同位元素取扱施設立入検査について

・実験動物飼養保管施設の調査について

⑤エネルギー資源管理部門

冬季の省エネルギーパトロールを実施したこと及び結果は次回報告する旨の説明があった。

(2) 第 2 回九州地区国立大学法人安全衛生連絡会の開催について

12 月 16 日（木）に 2 回目となる九州地区国立大学法人安全衛生連絡会を開催したことについて報告があった。

なお、今後は、毎年、8 月又は 9 月に開催される七大学安全衛生管理担当者連絡協議会後の 10 月又は 11 月と時期を決めて開催することについて、各大学に提案していくとの説明があった。

(3) 平成 22 年度計画実行のための安全衛生管理体制調査結果について

前回の会議で議決された平成22年度計画を具体的に実行するための作業WGにおいて、東北大学、東京大学及び大阪大学の安全衛生管理体制の調査を行った結

果と作業ＷＧでの検討状況について報告があった。
議題：
(1)平成 23 年度計画（案）について
「平成 23 年度以降の年次計画の概要」及び「平成 23 年度計画、年度計画の達成内容」について、審議の結果、原案どおり議決した。
※次回開催日　2 月下旬予定

（書面会議）
日時：平成 23 年 2 月 4 日（平成 23 年 2 月 7 日締切）
報告：エネルギー資源管理部門会議の報告について
平成 23 年 1 月 18 日開催の部門会議について、以下のとおりご報告します。
報告：
（1）平成 22 年度省エネルギー（冬季）パトロールの結果について
（2）平成 22 年度エネルギー使用量（4 月～11 月）の推移について
議題：
（1）エネルギー節減活動推進者の推薦について

（第５回）
日時：平成 23 年 3 月 7 日（水） 14 時 00 分～14 時 55 分
場所：本部第三庁舎 2 階 第 5 会議室
報告：
(1) 各部門の報告事項
12 月 22 日に開催した前回の本会議以降に各部門で審議された事項等について、各部門から以下のとおり、報告があった。
①健康衛生管理部門
1 月 19 日及び 2 月 16 日に開催された部門会議において報告、審議した事項について、以下のとおり報告があった。
・平成 21 年度における授業・実験中の事故について
・障害者雇用の状況について
・平成 21 年度長時間労働者の面談実施状況について
・心の健康に関する予防対策の基本方針について
②環境安全管理部門
「排出水の水質管理について（報告）」に基づき、排出水の水質が基準値を超過している部局に通知を行ったこと等について報告があった。
③高圧ガス等安全管理部門
筑紫地区に設置されたボンベ庫の使用開始について報告があった。
④特定分野安全管理事務部門
以下のとおり報告があった。
・平成 22 年度放射性同位元素取扱施設立入検査を 12 カ所実施したが、特に問題はなかった。
・3 月 2 日にＩＡＥＡの立入検査が行われたが、特に問題はなかった。
・実験動物飼養保管施設の調査については、順調に進んでおり、5 月ごろに終了予定である。
⑤エネルギー資源管理部門
平成 22 年度計画については、省エネルギー対策として、エコモニターの整備、省エネパンフレットの作成、省エネパトロールの実施、省エネルギー型機器等の導入・更新を行っており、年度末の自己評定は「達成内容」をすべて達成したとした旨の報告があった。
(2) 喫煙対策検討ワーキング・グループについて
3 月 1 日に開催されたワーキング・グループについて報告があった。
(3) 平成 23 年度計画（原案）の修正について
前回、12 月 22 日開催の本会議で決定した平成 23 年度計画原案について、企画専門委員会・企画課・大学評価情報室より意見があったため、修正して提出した旨の報告があった。
(4) 平成 22 年度安全衛生セミナーⅢ及びⅣについて
2 月 7 日及び 2 月 10 日に開催した安全衛生セミナーについて報告があった。
議題：
(1) 平成 23 年度安全衛生管理年間計画（案）について
平成23年度の安全衛生管理年間計画について説明があった。また、本計画については、福岡東労働基準監督署に報告すること、その後各部局長及び各総括安全衛生管理者に通知することについて説明があった。
なお、修正等意見がある場合は、3 月 11 日（金）までに職場環境室安全衛生係あてに提出いただくこととし、その結果を、構成員に連絡の上、確定することを議決した。
(2) 平成 22 年度計画の自己点検・評価について
年度計画の進捗状況に係る年度末の自己点検・評価の実施について説明があり、審議の結果、これを議決した。
(3) 九州大学における心の健康の保持増進のための基

本方針（案）について

心の健康の保持増進のための基本方針を策定することについて説明があり、審議の結果、議決した。

なお、このことについては、3 月 15 日開催の部局長会議において報告予定であり、その後各部局長へ通知する旨の説明があった。

(4) エネルギー節減活動推進者の配置について

エネルギー節減活動推進者の配置について説明があり、審議の結果、これを議決した。

(5) 九州大学化学物質管理体制及び化学物質管理規程（仮称）の制定について

化学物質管理体制（案）及び化学物質管理規程（仮称）の制定について説明があり、審議の結果、この管理体制に基づき規程を整備することを議決した。

※次回開催日　4 月下旬予定

（文責: 上園 慶子）

7. 新入生健康支援面接

新入生面接

健康科学センターでは，学生の健康に関するニーズに基づいたサービスを提 供するという「健康支援モデル」に基づいた業務活動を目指しているが，その一環として新入生の潜在的なニーズに対応する目的で，入学後に健康相談を実施してきた。

対象は，1. 自覚的な心身の不調が多く認められる学生，2. 日常生活に支障を来すような障害を有する学生で，封書を送って健康相談室への来談をうながし，内科と精神科の医師，臨床心理カウンセラーによる面談を行っている。伊都センターゾーン分室で 5 月の連休翌週の 10 日から 26 日まで 3 週間にわたって実施した。

平成 18 度以降，新入生向けの「健康支援パッケージ」では高校時代の生活習慣と既往歴について調査し，平成 14 年度から行っている定期健康診断時の自覚症状と生活習慣についての調査「健康生活支援調査」と併せて入学時の健康調査とし，これらをもとに面接の対象を選出した。

1）心理精神健康相談

心理健康相談は，カウンセラー（常勤の福盛と非常勤の井上彩子，中園照美）と精神科医（常勤の一宮と非常勤の川島範子）とで行った。対象は，1.精神疾患ならびにストレス関連疾患の既往がある者，2. 対人コミュニケーションに問題がある可能性がある者とした。

1. 精神疾患ならびにストレス関連疾患の既往がある者とは，「健康支援パッケージ」の「次の病気にかかったり，次の健康問題で悩んだことがありますか」という既往歴に関する質問項目の中の 13. 自律神経失調症，17. 神経衰弱・ノイローゼ，19. 統合失調症・うつ病・心因反応，20. 自殺未遂のいずれかに○をつけている者であった。

2. 対人コミュニケーションに問題がある可能性がある者とは，「健康支援パッケージ」の「高校時代の生活習慣などについて」の質問項目「友達作りがうまくできず，いつも孤独である」にハイ，そして「悩みを相談できる友人がいた」にイイエと回答した者であった。

来談勧奨者は 86 人で，実際の来談者は 83 人であり，来談率は 96.5%であった。

内訳は,神経症水準の問題が 15 名（18.1%），精神病水準の問題を有する者も 1 名（1.2%）いた。また、性格上の問題が 6 名（7.2%），むしろ身体の問題であった者も 5 名（6.0%）であった。 42 名（50.6%）は異常なしであった。これらの学生に対しては,心理相談の紹介を 34 名（41.0%）に，治療の指示も 7 名（8.4%）に対して行い、そのほか性格・行動面についての認識の促進や生活指導を行った。21 名（25.3%）に対しては特に指導の必要性がないと考えられた。

2）一般健康相談

一般健康相談は，主として身体に関する相談で，内科医 3 名（常勤の眞崎と永野，丸山）と精神科医 1 名（常勤の一宮）が行った。対象は，1-C. 「障害者手帳を持っていますか」，1-D. 「心身の病気や障害のために日常に支障をきたしていますか」に○をつけている者であった。ただし、該当する問題について定期健康診断時に検討され指導を受けたり，あるいは診断結果によって問題なしとされた者は対象から除いている。

来談勧奨者は 23 人で，来談者は 23 人で，来談率は 100.0%であった。内訳は，4 名（17.4%）が異常なしであったが，身体疾患が 13 名（56.5%），身体障害は 1 名（4.3%）で， 精神疾患も 1 名（4.3%）いた。これらの学生に対して，健康相談の継続の指導を 8 名（34.8%）に，治療の指示を 3 名（13.0%）に行ったが、そのほか生活指導なども行った。

（文責: 一宮　厚）

8. 感染症対策

今年度は、平成21年度に新型インフルエンザの発生に伴い実施したインフルエンザ患者の聞き取り調査の結果から、電話による聞き取りでは発症してから報告までの時間差が存在することがわかり、感染拡大の端緒を見落とす危険性があることが判明した。その問題点の打開のために、情報基盤センターの藤村教授の協力を仰いで、パンデミック WG を組織して、健康科学センターから上園と眞崎が参加した。パンデミック WG では平成21年度から、携帯電話を利用した WEB 上でのインフルエンザ感染確認システムの構築を模索してきた。

昨年度の 1 月にメールの送達確認を目的として試行を行い、およそ1年をかけてインフルエンザ感染確認システムが完成し、平成 22 年 11 月に学生に向けて、インフルエンザ感染確認システムの本運用のメールを送信した。なお、これに先立ち、全教員への通達と学生系の職員への説明会も開催した。現時点では、システムと電話による聞き取りの二つが同時に進行している状況であるが、学生基本メールが浸透することで、全てをシステムでまかなえるようになることを目指している。

また，新入学生に対する麻疹等感染症の感受性調査票送付と麻疹ワクチンの接種勧奨は今年も実施した。ワクチン接種は，健康科学センターからの呼びかけが摂取同期になっている者が多かった。今後も感受性調査とワクチン接種勧奨を行っていく予定である。

（文責: 眞崎 義憲）

9. 情報発信活動

昨年度末に約 2 ヶ月をかけて実施した健康科学センターの新しいホームページ構築は、昨年度末で完了し、今年度の4月1日から運用を開始した。新しいホームページは、以前には十分ではなかった英語版のホームページも備え、ユーザサイドの視点から情報にアクセスしやすいようなデザインを心がけた。

学生や教職員，一般の方がそれぞれ必要とする情報に容易にたどり着けるような配慮を行った。また、今回のホームページ構築の際に、新着情報の項目を組み入れてもらい、適時適切な情報のアップデートが可能となった。健康診断情報や分室情報などのリアルタイムでの更新が可能となった。

また、全体としてすっきりとしたデザインになり，また情報へのアクセスもよいとなったことで，定期健康診断やインフルエンザの情報などについて学生・教職員がより早く，容易に情報を手に入れられるのではないかと考えている。

（文責: 眞崎 義憲）

10. ＦＤ活動

第 48 回全国大学保健管理研究集会

第 48 回全国大学保健管理研究集会は，共通テーマ「保健管理のスキル向上」のもとに，平成 22 年 10 月 20 日と 21 日の 2 日間，千葉大学が当番校となって千葉市で開催された。370 機関から 838 名が参加した。

特別講演は，斉藤 康氏（千葉大学学長）による「肥満症を考える」，招請講演は小野崎郁史氏（世界保健機関 STOP 結核部メディカルオフィサー）による「海外からみた日本の若者のヘルスリスクー感染症対策の立場から」であった。教育講演としては，石井桂輔氏（東京都立墨東病院）による「テーピング」，輪湖雅彦氏（国立病院機構千葉医療センター）による「大学の保健センターにおける創傷処置－理論と実践－」，飛田 渉氏（東北大学保健管理センター）による「胸部 X 線検査のありかた」，上野光一氏（千葉大学大学院薬学研究院）による「大学生とセルフ・レギュレーションメディケーション」，および川野みどり氏（千葉大学医学部附属病院）による「月経困難症」が行われた。

シンポジウム「学生メンタルヘルス相談のスキルアップ」や一般演題を通じて，各大学が共有する，現在直面する課題について活発な討論が行われた。

本学からは，一宮が「大学生のコミュニケーションの経年変化質問紙調査による新入時と 4 年次の違い」，眞崎が「インフルエンザ流行状況把握による感染拡大阻止の経験と問題点」，上園が「大学職員に対する運動教室の効果－第一報－」，丸山が「成人先天性心疾患をもつ本学学生の生活習慣病の実態調査」，野村が「大学教職員における生活習慣改善プログラムの有効性の検討」，中山が「肥満学生対象の健康支援プログラムの有効性について－2 年間の追跡結果から－」と題した一般研究発表を行い，また，上園が一般研究発表の座長を担当した。

（文責: 永野 純）

第 40 回九州地区大学保健管理研究協議会

第 40 回九州地区大学保健管理研究協議会は，平成 22

年 8 月 18・19・20 日の 3 日間（初日は保健・看護分科会），佐賀大学が当番校とり，「タテとヨコの集団力を育むキャンパス・ライフ」をテーマとして開催された。参加校は国立大学 11 校，公立大学 8 校，公立短期大学 2 校，私立大学 35 校，私立短期大学 7 校，国立高等専門学校 7 校の合計 70 校であった。

初日の保健・看護分科会では，「心の育ちから見た人間理解－“安心感”と自立－」と「こころ通す話し方」という 2 つのセミナーが行われた。二日目は，佛淵孝夫氏（佐賀大学学長）」による「関節研究の最先端」，藤林武史氏（福岡市こども総合相談センター所長）による「ひきこもり支援―大学と地域の連携に向けて―」，内田千代子氏（茨城大学保健管理センター）による「大学生のメンタルヘルス―休退学・留年・自殺調査から―」と題された 3 題の特別講演が行われた。また，江口有一郎氏（佐賀大学医学部総合診療部）による「肝臓の医者からみたメタボリックシンドローム，藤田長太郎氏（大分大学保健管理センター）による「不登校がちな学生へのアウトリーチ型支援」と題された 2 つの教育講演が行われた。三日目は，合計 9 題の一般研究発表（すべて口述発表）があり，それぞれの立場から活発な討論が行われた。

（文責: 永野　純）

平成 22 年度国立大学法人等保健管理施設協議会

平成 22 年度の国立大学法人保健管理施設協議会は、東京医科歯科大学が当番校となり、平成 22 年 10 月 22 日に東京ガーデンパレスで開催された。国立大学法人 88 校から 91 名の施設長が参加した。

午前中には、文部科学省からは昨年に続き欠席者が来ず、議長から事前の質問と要望事項について報告があった。各種委員会、研究班からの報告があった。午後は協議がなされ、海外団体との情報交換、今後の感染症流行に対する危機管理、保健管理センターの予算削減、その他いくつかの事案について話し合われた。今回、一宮が副会長に選出された。

平成 23 年度は、広島大学が当番校で山口県下関市での開催が承認された。

（文責: 一宮　厚）

第 13 回フィジカルヘルス・フォーラム

コーディネーター: 大阪大学保健センター長　守山敏樹先生

日時: 平成 23 年 3 月 17 日（木）～18 日（金）

会場: 大阪大学銀杏会館 阪急電鉄・三和銀行ホール

健セからは一宮，上園が出席した。

以下に，平成 23 年 4 月 12 日付で国立大学法人保健管理施設協議会フィジカルヘルス委員会 副委員長 守山敏樹先生，フィジカルヘルス・フォーラム会長 大塚盛男先生から送られた報告等を抜粋して掲載する。

《ご報告》

第 1 日　3 月 17 日（木）

1. 企画 1　シンポジウム「大学と安全衛生関連法令」

1）講演「国立大学七大学安全衛生担当者会議の対応と今後の法改正への動き」　大阪大学安全衛生管理部　山本仁先生: 国立大学七大学安全衛生担当者会議で議論された内容をまとめた中間報告の概要が報告され，大学における学生・教職員の安全衛生管理や安全衛生に関連する現行法令の問題点と望むべき体制を指摘された。この会議を受けて法改正の動きがあることや韓国における類似の法令についての紹介があり，法令の具現化に向けた大学間の連携の重要性が強調された。

2）講演「大学における安全衛生管理の現状と学校保健安全法の問題点」　筑波大学保健管理センター　大塚盛男: 国立大学法人保健管理施設協議会大学保健安全法に関する調査研究班で調査した国立大学法人における安全衛生管理の現状を基に検討した学校保健安全法の問題点について報告があり，大学間における安全衛生管理の体制や内容に差がかなり認められることや大学における学生の健康管理を学校保健安全法で行うには難しい点が多々認められることが指摘された。

3）講演「大学・研究機関の安全衛生を考える研究会の設立に向けて」　信州大学医学部公衆衛生学　塚原照臣先生: 産業衛生学会内に大学・研究機関の安全衛生を考える研究会を設立することが紹介され，その設立の意義や活動の内容についての報告があった。大学・研究機関の安全衛生管理に対応した法令の制定のためにも重要な方向と考えられ，今後連携が必要であると考えられた。

2. 緊急企画　「保健管理施設の災害対応」

1）「被災時の活動」神戸大学保健管理センター　馬場久光先生: 阪神淡路大震災の際に神戸大学保健管理センターとして行った被災者への医療活動について紹介があった。また，被災学生・職員への PTSD 対策，災害情報提供，食糧確保，出勤訓練など，大災害に備えた日常の注意の

重要性を強調された。

2)「被災地への支援」大阪大学安全衛生管理部　山本　仁先生: 今回の東北関東大震災に被災された大学等に対する大阪大学としての支援取り組み状況及び国立大学間の連携状況について報告があった。

3)「日常の対策」静岡大学保健管理センター　池谷直樹先生: 近い将来発生が危惧されている東海大地震に備えた静岡大学の取り組み（地震・防災関係の授業や新入生対象の防災訓練など）について紹介があった。また，災害時医療のポイントとして，自己トリアージ，避難想定，応急処置などについての教育や災害後の PTSD 対策の重要性を指摘された。

3. 業務連絡　(1) 次期開催校: 次回・第 14 回開催校の東北大学飛田先生は，震災のためご出席できなかったが，予定通り開催のご意向であるとのことから，今後開催日等についてご相談させていただき通知することとなった。また，第 15 回開催校は委員長の立身先生と相談していくこととなった。(2) フィジカルヘルス委員会委員及びフォーラム役員: 関東甲信越地区及び東海北陸地区から新たにフィジカルヘルス委員会委員及びフォーラム役員に就任された東京医科歯科大学三宅先生，北陸先端科学大学院大学林先生からご挨拶があった。(3) フォーラム会則の変更: 会則の一部を変更し，本会への新規加入申込みはフィジカルヘルス委員会委員長に行い，委員長から事務局に加入の連絡をすることで了承された。(4) 自己紹介: 新しく会員になられた先生方の自己紹介があった。参加者数 84 人

第 2 日　3 月 18 日（金）

4. 企画 2　シンポジウム「学生支援の現状と展望」

1)「学生支援におけるリスク管理―キャンパスカルトの予防から―」　大阪大学学生支援ステーション学生生活相談ユニット　太刀掛俊之先生: カルト活動の把握，教職員や家族への情報提供，課外団体の活動状況把握など，大阪大学において実施しているカルト対策について紹介があり，学生がカルトに入る動機とそれに対する大学の対応策が述べられた。

2)「障害や慢性疾患のある学生への修学支援―合理的配慮（reasonable accommodation）の観点から―」　大阪大学学生支援ステーション障害学生支援ユニット　松原　崇先生: 大阪大学における障害学生の状況と障害学生支援ユニットの役割・活動内容について報告があった。大学の支援や個人の努力の範囲は事例・エピソードごとに決める必要があるが，支援の基準は合理的配慮の観点から考えていくことが重要であると強調された。

3)「全国国立大学における障害学生修学支援状況と本学における取り組み」　福岡教育大学保健管理センター　宮田正和先生: 国立大学法人保健管理施設協議会障害学生修学支援に関する特別委員会において平成 21 年度に実施したアンケート調査結果からみられる国立大学における障害学生の現状や支援状況及び福岡教育大学における実態について紹介があり，障害学生支援における大学の責任や障害学生の個人情報提供の在り方が述べられた。

4)「留学生への健康支援について」　静岡大学保健管理センター　池谷直樹先生: 国立大学法人保健管理施設協議会留学生問題特別委員会において平成 21 年度・22 年度に実施したアンケート調査結果の紹介があり，留学生への健康支援として結核対策の重要性が強調された。また，入学時の健康診断書提出や留学生を対象とした健康診断項目の実施の是非について討議があった。

5. 企画 3　特別講演「大学における保護者支援の実際と今後の課題」　甲南大学文学部教授／学生相談専任カウンセラー　高石恭子先生: 大学における教育者ならびに学生相談カウンセラーとしての知見や経験に基づいて，多様化している現代の学生の実態，多様で複雑な保護者の要望，学生・保護者・大学間の関係などについて，今高等教育の現場で起きていること，今日の学生期の親子関係と子どもの育ち，大学における保護者支援の実際，求められる新たな援助の視点という観点から，今後の学生支援および保護者支援にどのように対応したら良いかについて，具体的でわかりやすくご講演をいただいた。

6. 企画 4　「大学における自殺の現状とその予防的対策」

1)「学部学生における自殺の現状と問題点」　茨城大学保健管理センター　内田千代子先生: 国立大学法人保健管理施設協議会で実施している大学における休・退学，留年学生に関する調査結果からみられる学部学生の自殺者の実態についての報告があった。過年度生や 4 年生において自殺率が高いこと，自殺学生が精神疾患として診断されている率や保健管理施設を利用している率が高くなく，診断も治療も受けずに自殺する学生が多いことから，これらの学生を保健管理施設に繋ぐための対策の検討が

必要であると強調された。

2）「大学院学生における自殺の現状と問題点」　東京工業大学保健管理センター　安宅勝弘先生: 国立大学法人保健管理施設協議会で実施している大学における休・退学, 留年学生に関する調査結果からみられる大学院学生の自殺者の実態についての報告があった。大学院学生も学部学生と同様に休学や留年生の割合が高く, 診断も治療も受けずに自殺する学生が多いこと, 大学院生のストレス要因として研究活動やキャリアパスなどの問題が考えられることから, 研究室における一次予防への啓発活動の必要性を述べられた。

3）「自殺の内景: 誰がなぜ死ぬのか。どうやれば防げるのか」　秋田大学保健管理センター　苗村育郎先生: 大学保健管理施設で対応された学生の分析結果について報告され, 希死念慮の強い学生への対応の必要性を強調された。

4）「自殺予防のための具体的な対策」　佐賀大学保健管理センター　佐藤　武先生: 産業医として教職員の自殺予防対策に取り組むにあたり, 労働安全衛生法に基づくメンタルヘルス対策や復職支援対策などについての具体的な方策を述べられた。

《次回のご案内》

第14回フィジカルヘルス・フォーラム

コーディネーター: 東北大学保健管理センター　飛田渉教授

日時: 平成24年3月15（木）～16日（金）

場所: 東北大学マルチメディア教育研究棟　マルチメディアホール（川内北キャンパス）

（文責: 上園 慶子）

第 32 回全国大学メンタルヘルス研究会

全国大学メンタルヘルス研究会は、平成 18 年度から、全国学生相談研究会議との合同で学生支援合同フォーラムとして開催されている。今年度は、フォーラム１が全国大学メンタルヘルス研究会で、関西大学が主催して平成 22 年 1 月 25-26 日に東京国際交流館プラザ平成で開催された。これには九大からは一宮が参加し運営委員会に出席した。また保健師２名が参加した。特別セッションほか、研究班報告、一般演題、症例研究などの発表があった。

（文責: 一宮　厚）

第 44 回全国学生相談研究会議

平成 22 年度第 44 回全国学生相談研究会議は、全国メンタルヘルス研究会と平成22年度学生の心の悩みに関する教職員研修として東京台場にある東京国際交流館 プラザ平成（東京都江東区）で平成 23 年 1 月 26 日（水曜日）～1 月 28 日（金曜日）に行われた。九州大学からは残念ながら今年は参加できなかったが、来年度以降本研修会に参加していきたい。

（文責: 福盛 英明）

平成 22 年度九州地区メンタルヘルス研究協議会

メンタルヘルス研究協議会は, 学生のメンタルヘルス支援の充実を目指して全国の大学と高専の一般教職員を対象として開催される研修会で, 平成 22 年度は九州地区の協議会が那覇市で開催された。

本協議会は文部科学省が主催者のひとつとして平成８年から始まったもので, 平成 17 年度からは独立行政法人日本学生支援機構と国立大学法人保健管理施設協議会が主催し文部科学省が協力する形で運営されることとなった。平成 13 年度からは全国７つのブロックごとに開催され４年に一度全国会を行っている。

平成 22 年度は, 琉球大学が当番校で同大保健管理センターの古川卓教授が実行委員長であった。本センターの一宮は本協議会の九州地区の本部運営委員であり, また当センターの福盛准教授とともに本協議会の実行委員会であるので今年度も企画から携わった。

協議会は 11 月 10 日と 11 日の２日間にわたって那覇市のパシフィックホテル沖縄で行われた。１日目の基調講演は「大学生を対象としたうつ病啓発講演の実際」と題されたもので, 琉球大学大学院医学研究科の近藤毅教授が講演された。その後２日目午前にかけて分科会が５会場で行われたが, 当センターの一宮が「危機対応（自殺予防・過量服薬など)」をテーマとした第３分科会で助言者, 福盛が「修学上問題のある学生への教職員・学内専門家・保護者の連携・協働」をテーマとした第２分科会で助言者として, それぞれ運営に参加した。参加者は九州圏内の大学, 短期大学, 高専 20 校から 73 名の教職員であった。

（文責: 一宮　厚）

三大学協議会

平成 22 年度は活動がなかった。

（文責: 上園　慶子）

学生健康支援会議

第2部門では，産業保健師を含む各分室の看護職員と保健係の事務職員をまじえて，毎月第3水曜日の午後に学生健康支援会議を開催している。平成 22 年度も，本会議において，予算案の作成，春の学生定期健康診断ならびに秋の留学生健康診断の準備・実施・事後措置，各分室の日常診療対応（対応困難なケースの検討，各分室で共通した統一すべき基準の検討など），保健管理専門委員会や学生委員会などの学内への対応，保健管理関連の学会での発表演習など，学生の安全・衛生・健康に関連する様々な業務の企画，立案，実施，問題点などについて協議した。

（文責: 永野　純）

職員健康支援会議

第2部門では，安全衛生推進室所属の産業保健師を含む各分室の看護職員と職場環境室の事務職員をまじえて，毎月第 3 水曜日の午後に本会議を開催している。学生健康支援会議に引き続いて行われるものである。平成 22 年度も，各事業場の毎月の産業保健活動報告や安全衛生推進室会議報告から始まり，定期健康診断，特殊健康診断などの各種健康診断の準備・実施・事後措置，平成 20 年度から開始された特定健診・保健指導，過重労働者面談，対応困難な事例など，産業保健活動に関する様々な業務の企画，立案，実施，問題点などについて協議した。

（文責: 永野　純）

技術職員研修

第2部門では，各分室で日ごろ別々に業務を行っている看護職員（看護師，保健師，産業保健師）に共通して必要な知識やスキルを習得してもらうために，毎月第3水曜日に看護職研修を実施している。平成 22 年度は，下記のような年間計画で定期的なテーマ別相互学習を看護職員同志で行った。

- 5 月　緊急対応について（伊都ウエスト 福盛）
- 6 月　学生定期健康診断における心電図ついて（大橋 山口）
- 7 月　尿検査（筑紫 濱田）
- 9 月　胸部 X 線検査（病院 荒尾）
- 10 月　時間栄養学について（伊都ウエスト 高尾）
- 11 月　睡眠のプライマリケア（病院 野村）
- 1 月　労働災害について（箱崎 井上）
- 2 月　VDT 関連障害ついて（筑紫 濱田）

また，新採用の看護職員や事務員の教育として，健康科学センターの組織や役割，業務などに関するオリエンテーションを年度末に実施している。平成 22 年度のオリエンテーションの概要は以下の通りである。

- 健康科学センターの役割とその法的根拠（一宮）
- 健康科学センタースタッフ構成とそれぞれの基本的役割（上園）
- 感染症の対応（眞崎）
- 日常業務と緊急時の対応（丸山）
- 定期健康診断（永野）
- 学生相談・新入生面接（福盛）
- 精神保健相談（一宮）
- 産業保健（入江）
- 分室紹介（各分室長・看護職）
- 教務課保健係特別講義（教務課 黒岩）
- 職場環境室特別講義（職場環境室 徳吉）
- 業務研究（松園・全員）

その他，毎月第3水曜日午前の第2部門会議の終了後に教員による研究発表会を開催しており，看護職員も全員参加している。学生や教職員を対象とした研究も含まれており，このような発表会に参加することも，看護職員の知識や技能の向上に役立っているものと思われる。開催月日と担当教員は以下の通り。

- 5 月　ハラスメントについて（上園）
- 6 月　発達障害学生に対する全学的な修学支援体勢について（福盛）
- 7 月　病的肥満症例への対応について（丸山）
- 11 月　情報技術を用いたインフルエンザの学内発生状況把握・管理システムの開発について（眞崎）
- 12 月　漢方薬による風邪とめまいへの対応について（永野）
- 2 月　本学における自殺学生についての背景について（一宮）

（文責: 永野　純）

産業保健管理体制

法人化以前は，国立大学設置法施行規則第20条の5の5（「九州大学に，健康科学に関する研究並びに保健及び体

育に関する教育を行なうとともに，職員及び学生の保健管理及び体育指導に関する専門的業務を行なうための施設として，健康科学センターを置く」）に則って，健康科学センターは学生ならびに教職員の健康管理（健康診断後の相談や健康教育など）を実施していた。平成16年度からの大学法人化に際しては，産業医としての役割を含めて産業保健活動に従事することを大学側に提案し，協議を重ねた結果，安全衛生法における産業医の選任基準に基づいて，箱崎地区，馬出地区，九州大学病院（福岡）に専属産業医が，六本松地区，筑紫地区，大橋地区，別府地区には嘱託産業医がそれぞれ配置されることが決まり，平成17年10月から加わった伊都地区も含めて，別府地区を除く7事業所の産業医を健康科学センターの医師が担当することになった。また，教職員の安全衛生管理を担当する組織として，新たに「安全衛生推進室」が設置され，健康科学センター第2部門の全教職員も併任安全衛生推進室員の立場で参画した。安全衛生推進室には，3名の産業保健師（非常勤）が専任衛生管理者として採用になり，専属産業医の担当事業場に配属された。また，平成21年度に六本松地区が伊都地区センターゾーンへと移転になり，伊都地区ウエストゾーンと合わせた職員数が急増したことを踏まえて，もう1名の産業保健師（非常勤）が伊都地区ウエストゾーンに配属となった。

平成22年度は，平成16年から手がけた安全衛生体制をさらに構築，定着させることを目標に，産業保健活動を実施した。具体的には，各事業場において毎月職場巡視を実施し，巡視結果や健康診断結果，その他の健康管理事項について衛生委員会で報告や協議を行い，各種健康診断の円滑かつ効率的な実施を支援するとともに，事後措置を担当した。さらに，人事係の労働時間調査結果に基づいて，長時間労働者に対する面接や助言，指導を行った。このような業務を円滑かつ適切に実施し，さらなる改善をはかるために，健康科学センターのスタッフ，人事系職員，産業保健師からなる教職員健康支援会議を毎月開催し，産業保健活動について協議する場を設けている。また，後述するような，新人から管理職まで及ぶ様々な職員教育を実施した。

（文責: 永野　純）

厚生補導特別企画

第1回メンタルヘルス研修会（全学FD）

平成 22 年9月 10 日(金)「学生の自殺予防とメンタルヘルス対応」というテーマで、健康科学センター・全学 FD 委員会・ 高等教育開発推進センター・学生生活相談連絡協議会 WG が共催して、自殺予防研修会を行った。本プログラムは全学 FD として企画された。

内容は、以下の通りであった。

1）午前の部(伊都地区) 会場:伊都地区センターゾーンセンター1 号館 1302 講義室

「学生の自殺予防~教職員にできること」

講師 高橋祥友先生 (防衛医科大学 校防衛医学研究センター行動科学研究部門・教授)※本講演は多くの参加者の方が参加できるように全学を遠隔システムて?結び、大橋・病院地区・筑紫地区への配信を行った。

2）午後の部(箱崎地区) 会場:50 周年記念講堂大会議室

講演 「学生の自殺予防~教職員にできること」

講師 高橋祥友先生

情報交換・意見交換会

「学生のメンタルヘルス対策・自殺 予防について、現場は何に困っていて身近なところでどんな工夫ができるのか」

午後の意見交換会では、活発に議論が行われた。また高橋先生にも参加していただき、専門家の立場からコメントをいただいた。

本研修会は、全体で 200 名を超える参加者があり、多くの反響があった。

第2回メンタルヘルス研修会

平成 23 年 1 月 21 日（金）午後 2 時 40 分～午後 5 時 00 分、伊都地区センターゾーン 1 号館 1308 教室にて、九州大学教員及び学生系職員を対象にして「自殺とその対策を考える研修会」を行った。プログラムは 1.「九大における学生の自殺の現状」（講演：一宮　厚）、2.「学生の心理的問題の基本的理解について（ミニワークショップ：福盛英明）であった。参加者は少人数であったが、ミニワークショップでは相互に困っている体験などを共有するなど、より具体的な体験や実践に近い内容で研修を行った。

（文責: 福盛 英明）

第2回ＱＵウォーク

昨年好評だったイベントを今年も引き続き行った。平成21年11月3日，箱崎地区創立五十周年記念講堂前を出発して，伊都地区体育館まで歩く第 2 回 QU ウォークを，健康科学センター主催，九州大学百周年事業推進室後援で行った。箱崎地区 50 周年記念講堂を 8 時に，あるい

は大濠公園を9時に出発した222名の参加者(うち102名が本学関係者)は，ももち浜，小戸公園，長垂海浜公園を経由して，29km(大濠公園から22km)先のゴールを目指した。早い者で13時前には，2名の棄権者を除く全員が16時までに完歩した。完歩者には記念のFinisherタオルや協賛企業(エグチスポーツ，エムジーファーマ(株)大塚製薬(株)，城島印刷(株),サントリーフーズ(株)，トーヨーフィジカル，日本製粉(株)，(株)マルタイ，マルホ(株))からの記念品が配布された。本年度は誘導係としてワンダーフォーゲル部員の協力も得た。アンケートでは，距離が長かったが達成感があったとの意見が多く，9割以上の方がまた参加したいとのことで，大変好評であった。このイベントは，百周年記念のイベントとして開催された。厚生補導特別経費の援助を頂いた。なお，本イベントはQUウォーク実行委員会(委員長: 林准教授，副委員長: 眞崎准教授)を主体に企画・実行された。

(文責: 林　直亨)

筑紫地区トレーニング室

運動を通して健康の維持・増進を図るため，筑紫地区唯一の屋内運動施設であるフィットネスルームを平日16時～20時に開放した。厚生補導特別経費の援助を頂き，大学院生に監督を任せている。1日当り20名以上の来室者で混むことも多かった。 毎月当りの利用者延べ人数は以下の通りである。

4月179名，5月284名，6月408名，7月429名，8月325名，9月308名，10月359名，11月358名，12月241名，1月235名，2月189名，3月221名，合計3,536名。

(文責: 林　直亨)

11. その他の活動

職員健康研修

平成22年度も例年通り，総務部人事課や職場環境室の年間計画により，教職員を対象とした健康に関する研修会で，講師派遣の要請があった。これに対して第2部門教員および看護職員が適宜分担して講師を担当した。詳細は以下の通りである。

平成22年 7月 7日: 九州大学新任係長・専門職員研修
　職場におけるメンタルヘルス（入江）
平成22年10月 6日: 九州大学労働衛生週間講演会
　乳がん自己検診（病院地区）（豊田）
平成22年10月 7日: 九州大学労働衛生週間講演会
　乳がん自己検診（筑紫）（福盛）
平成23年 3月 3日: 九州大学教室系技術職員研修
　職場におけるメンタルヘルス（入江）

(文責: 永野　純)

入学試験や全学行事等における急患対応

平成22年度も，第2部門教員および看護職員は入学試験や全学行事等における急患対応に従事した。主な項目，派遣先地区，派遣医師・看護職員のべ人数は次の通り。

・九州大学入学式（平成22年4月）
　福岡国際センター。医師1名。
・九州大学オープンキャンパス（平成22年8月）
　箱崎，伊都センター，伊都ウエスト，病院，大橋の各地区。医師のべ6名，看護職員のべ6名。
・九州大学大学院入試（平成22年8月）
　大橋，筑紫，伊都ウエストの各地区。医師のべ14名，看護職員のべ10名。
・九州大学AO入試（平成22年11月）
　箱崎地区。医師のべ2名，看護職員のべ2名。
・九州大学ホームカミングデー2010（平成22年11月）
　箱崎，伊都地区。看護職員のべ2名。
・大学入試センター試験，九州大学入学試験（平成22年1月，2月，3月）
　箱崎，病院，伊都センター，伊都ウエスト，大橋の各地区。医師のべ21名，看護職員のべ19名。

(文責: 永野　純)

健康白書 2010（学生の健康白書特別委員会）

（第1回）
日時: 2010年10月20日（水）12:00～13:00
場所: 幕張メッセ国際会議場1階　101号室B
議事内容:
1. データ回収の状況
　31校からデータ送付あり（10／20現在）
2. データクリーニングの際に目に付く問題点
・総学生数のワードファイルが送付されない場合が多い。
・睡眠時間において，「9時間」と「未受診＝9」とを混同する場合がある。
・健診受検者数が総学生数を上回る学年がある。
・胸部X線検査異常の有無が「1=異常なし」の場合，指導区分は「1=放置可」で良いか？

→それでよい。

・胸部 X 線検査の「疑われる疾患」は健診時の所見か？最終診断か？

→健診時の所見を報告。

・胸部 X 線検査所見で，「肺尖硬化像」，「胸膜癒着」など，肺結核後遺症を示唆する所見は，結核と扱っていいのか？

→肺結核後遺症を示唆する所見は「結核」のカテゴリーとして報告。ただし，報告書としてまとめる際にその旨含みを持たせる。

・胸部 X 線検査所見において，軽度の側彎などの所見も「その他」に入れるべきか？

→所見に取っている大学と取ってない大学があるが，取っている大学においては「その他」に入れざるを得ない。

3. 解析･執筆担当者

①調査の概要→川村，後藤（京都大）

②身体計測→鈴木（新潟大）

③胸部 X 線検査→飛田（東北大），長尾（千葉大）

④血圧→上園（九州大）

⑤生活習慣: 喫煙，アルコール，運動，睡眠，朝食摂取→武蔵（北海道大）

⑥その他: 体脂肪，腹囲（体脂肪: 26 校中 4 校報告，腹囲: 26 校中 2 校報告）→石黒（名古屋大）

※データを取っている大学が少ないため参考資料にとどめる

⑦クロス集計: 生活習慣と各種検査値の関連

・血圧→守山（大阪大）

・身体計測→佐伯（愛媛大）

4. 今後の予定

締め切り: 平成 22 年 12 月末日

督促（確認）: 平成 22 年 12 月

督促（締め切り）: 平成 23 年 7 月

出版は平成 24 年度中（先回は，平成 20 年 3 月 10 日）

※国立大学法人保健管理施設協議会 HP に掲載を依頼中

※頻回にＥメールにてリマインダーを送る

（その際，見出しが目に付きやすいようにする）

5. その他

宇都宮大 吉野先生から，メンタルヘルスに関する委員の補充あるいは交代の要請があった。

【備考】

10 月 22 日の国立大学法人保健管理施設協議会総会において，高梨信吾（弘前大学，呼吸器），後藤雅史（京都大学，事務局）の委員就任が報告された。

（文責: 上園 慶子）

CAMPUS HEALTH の発行

キャンパスヘルスを年 2 回発刊した。記事は健康に関する啓発などで，第一，第二部門教員，保健師，学生が寄稿した。なお学生にも気軽に手に取ってもらい親しみやすいように、4 コマまんがなどもとりいれるなど、カジュアルな記事も増加した。

第 34 号（2010 年 10 月）

・「うんち（運動音痴）」は遺伝か？

・ QU ウォーク 2010 参加者募集

・ 健康情報の活用

・ 発達障害と大学生活（2）

・ そろそろインフルエンザの季節です

・ ケンセンジャー・初仕事

・ くすりの豆知識

・ 編集後記

第 35 号（2011 年 3 月）

・ 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築「EQUSITE STUDY」のご紹介

・ 第 3 回創立百周年記念 QU ウォークのお知らせ

・ 新入生のための恋愛講座

・ 九州大学ハラスメント相談室のご案内

・ ケンセンジャー「メタボで大ピンチの巻」

・ けんこう豆知識「病院・クリニックへの受診について」

（文責: 福盛 英明）

研　究　活　動

概況 …… 51
個人研究活動 …… 52
研究業績 …… 59
研究助成金 …… 71
ＦＤ …… 82
国際学術交流活動 …… 82
学会・研究会での役職 …… 83
その他 …… 84

研 究 活 動

概 況

平成 22 年度における健康科学センターの研究活動を,「個人研究活動」「研究業績」「研究助成金」「国際学術交流活動」「学会・研究会での役職」および「その他」の順で示す。

「個人研究活動」に関して当センターでは第一部門が運動生理・生化学, 運動疫学, スポーツ心理・社会学, 第二部門が内科学, 心身医学, 精神医学, 心理学分野を中心に研究活動を行っている。しかし当センター教員の「個人研究活動」は, その枠に収まらない部分が多く見受けられる。このことは当センターの多様性や多能性を示すと同時に,「健康科学」そのものの学際性を示すものでもある。

「研究業績」は, 著書・翻訳, 原著論文, 総説, 資料・報告, 学会・研究発表, 講演・ワークショップ・シンポジスト・コメンティター等, 論文査読, その他に区分した。

昨年度との比較では著書・翻訳の編数は 11 編から 7 編, 原著論文は学会・機関誌等論文で 17 編から 22 編, 紀要等論文では 14 編から 20 編へと増減がみられた。総説は 11 編から 7 編, 資料・報告書は 20 編から 16 編へといずれも減少した（筆頭著者とそれ以外を含む)。学会・研究会での発表件数は, 昨年度の 73 編から 78 編となり, 微増した。今後の論文業績の増大を期待したい。

論文査読の件数は今年第一部門 45 件（昨年 49 件）, 第二部門 19 件（昨年 22 件）で昨年度と大きくは変わらなかった。英文雑誌の査読件数は, 国内英文誌の増加傾向はあるにせよ, 当センター教員の国際的評価の一つの指標でもあり, 積極的な増加が望まれる。

「研究助成金」に関しては, 政府官公庁や学会・財団による研究費以外に地方自治体・企業による受託研究や本学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト研究などさまざまな研究費がある。平成 22 年度は総計 28 件であり, 昨年度の 24 件より増加した。採択件数の増加の背景には地道な申請件数の増加もある点は考慮すべきであろう。独立行政法人化以降, 大学からの研究費が削減されている現状を考えると, 今後の研究発展のためには大型の研究費獲得へのさらなる努力が必要と思われる。

「国際学術交流活動」は 14 件で昨年度の 11 件に比べてやや増加した。

「学会・研究会での役職」は総計 52 と, 昨年度の 58 よりやや減少した。これらの役職数は学会・研究会への貢献度の指標のひとつとみなすことができる。学会や研究会も最近は法人化しつつあり, 当センターと同様に社会貢献が問われている。この点を考慮すれば学会や研究会で役職を担うことは, 学会・研究会を当センターで開催したり, 学会・研究会を通したパブリックコメントを発信したり, 科学研究費の申請書を査読したりすることで対外的にも意義は大きい。「その他」にマスコミ（新聞・雑誌・テレビなど）での活動などを示した。これらも社会活動や地域活動に相当するものがあり, 全学的にも要望されている分野である。

研究 FD は, 例年通り各部門における教員研究発表と, 年間 2 回のセンター全体での研究交流会議を行った。研究交流会議は 2 回を教員の個人研究発表に当てた。教員の個人研究発表は教員相互の共同研究を促進させるだけでなく大学院生にもオープンにすることで, 大学院生がセンター内研究の全体像を理解する上でも不可欠と考えられる。

当センターでは従来の研究分野を発展的に継続する一方で, 全学構成員や地域・社会から求められるオリジナルな研究を創出していく努力も必要である。生活習慣病の蔓延と社会的な健康意識の高まり, 学校教育における体育・食育・メンタルヘルスの重要性の再認識, さまざまなスポーツの倫理性が問われる昨今の風潮を追い風に, 当センターが取り組むべき研究課題は多いと言えよう。これらの追い風を好機に, 創立 30 年を経た当センターの今後 10 年後 20 年後を見据えた研究面における新機軸を打ち出す必要がある。

（文責: 山本 教人）

1. 個人研究活動

●健康科学第一部門

橋本　公雄

平成22年度は，平成21年度に引き続き個人研究といくつかプロジェクト研究を行った。個人研究では，主に大学体育授業の人間関係促進効果を意図した介入，心理社会的要因を媒介変数とする運動・スポーツに伴うメンタルヘルス向上効果のモデル構築，運動継続化の螺旋モデルの構築等々に関する研究を行い，プロジェクト研究では，科研費基盤研究（B）（研究代表: 橋本公雄）の「行動科学に基づく大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラム開発」，科研費基盤研究（C）（研究代表: 橋本公雄）の「スポーツ選手における心理的ウェルビーイング向上の因果モデルの構築」，科研費基盤研究（B）（研究代表: 柳敏晴）の「野外教育によるコミュニケーションスキル獲得に関する研究」，科研費基盤研究（C）（研究代表: 坂下玲子）「リズム体操の感情変化とメカニズムの解明」の研究に従事した。さらには，全国大学体育連合研究助成（研究代表: 橋本公雄）の「体育実技授業における心理社会的要因を媒介変数としたメンタルヘルス改善・向上効果のモデル構築」を行い，　社会連携関係の研究では，筑紫野市の「なかなかよか健康チャレンジ―ウォーキング事業―」に関し，委託研究費を受け入れ，5 年目の事業を推進するとともに，ウォーキング運動継続化に関する介入効果の研究を行った。さらに，国際的なプロジェクト研究としては大学生の運動・スポーツ行動の意識に関し,アメリカ，カナダ，中国，韓国，台湾，オーストラリア，マレーシアとの共同研究に着手した。

大柿　哲朗

平成 22 年度も，共同研究者としての科学研究費（C）による調査研究，うきは市からの受託研究費による食育プロジェクト事業を中心とした研究活動であった。

科学研究費による調査研究は，ネパールの山岳地と都市（首都: カトマンズ）の小中学校を対象に，形態や身体組成，身体活動量等の測定を行った。未開発地域の山岳地の子どもたちの歩数計による調査は極めて興味深い結果であった。

うきは市の食育プロジェクト研究は 5 年計画の最終年度にあたり，平成 22 年度の健康度調査（健診，形態・体力測定，栄養素等摂取量調査等）のデータを加え，5 年間のまとめを行った。また，平成 18 年度に引き続き，うきは市住民の 5%を目度に「健康と食習慣，生活習慣に関するアンケート調査」を実施し，1,300 名以上の回答を分析し，報告書としてまとめた。

学会活動としては，第 15 回東アジア運動・スポーツ科学会，日本運動生理学会，日本健康支援学会，九州体育・スポーツ学会等に参加した。東アジア運動・スポーツ学会は，中国の蘇州大学で開催され，日本側の代表者としての挨拶，企画運営に参画するとともに，ポスター発表を行った。運動生理学会では，シンポジウムのコーディネーターおよび座長を務めた。又日本健康支援学会では理事として,学会運営に努めた。またヘルスサイエンスセミナーの司会も務めた。

西村　秀樹

平成 22 年度は,「戦前の大相撲はおおらかだった － 角界モラル考 － 」の出版にむけての資料蒐集と執筆にすべてを費やした。23 年度中に出版の予定。以下は，本講の構成である。

第Ⅰ章では，取組技術（わざ）以外の，土俵上でのパフォーマンスについての考察である。感情表出，礼儀，物言いに関するモラルの緩やかさを見る。「愛嬌」ある力士が好まれること，物言いにおける力士の発言力の強さなどを明らかにしている。

第Ⅱ章では，土俵上の取組技術（わざ）におけるモラルについて考察する。「立ち合い」「取り口」「八百長」に関してとりあげ，その規制力の曖昧さ・不明瞭さによる「おおらかさ」を見る。それは，近代スポーツとは異質の大相撲の特徴を提示することになる。

第Ⅲ章では，勝手な休場，脱走，飲酒運転ならぬ飲酒取組などに緩やかな職業倫理を見て取るとともに，「芸人気質」と芸妓との艶聞に一般世界からかけ離れた生活倫理を窺っている。これらは，力士の「芸人性」に関わる部分である。

第Ⅳ章では，観客が織りなす紊乱の世界を描写する。国技館を祝祭空間としてとらえている。

第Ⅴ章は，競技性（競技ルール）を鮮明にしていく「スポーツ化」と，礼儀作法の厳格性・不可侵性が強められていく「神聖化」の同時進行を，大相撲の厳格化として把握する。天皇制ファシズムが推進力となって，現在のモラルの縛りの強い大相撲の原型をつくりあげた経緯を考察している。

資料は，『東京朝日新聞』（昭和 14 年から『朝日新聞』），『読売新聞』，『東京日日新聞』，『報知新聞』，『中央新聞』，『時事新報』，『萬朝報』，『国民新聞』の八つの新聞と，雑誌『野球界』（野球界社）『相撲と野球』（同）『相撲界』（博文館）を中心としている。新聞に関しては，主に対象としたのは，明治 30 年（1897）から昭和 19 年（1944）である。取組の結果以外に，力士の行動や場内の出来事などが描写され始めるのが，概ねこの明治 30 年頃である。

熊谷　秋三

研究助成金の取得としては，文部科学省科学研究費補助金の基盤研究 A と萌芽研究に研究代表者として新規に採択された。研究課題は，基盤研究 A（研究期間 5 年間）は「多点観察による身体活動・運動量，体力と健康事象に関する運動疫学研究」，挑戦的萌芽研究（研究期間 3 年間）は「うつ・代謝障害のバイオマーカーとしての血清脳由来神経栄養因子に関する運動疫学研究」であった。さらに，九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成（P&P）プロジェクト（研究期間 2 年間）が採択された。研究課題は，「疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築」であった。研究分担者としても基盤研究Cに新規に1採択され，さらに基盤研究Cの2件が終了した。厚生労働省科学研究補助金（循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業）は研究代表として 2 年目が終了した（研究期間は 3 年間）。研究課題は，「大規模コホートを用いた生活習慣病の一次予防のための運動量策定に関する運動疫学研究」であったが，既に平成 23 年 2 月にヒアリングを終えることができた.また，医学研究院の清原教授が研究代表者である厚生労働省健康科学研究補助金（認知症対策総合研究事業）の研究が 3 年目を終了した（研究期間 5 年）。研究課題は，「アルツハイマー病の危険因子の解明と予防に関する大規模ゲノム疫学研究」であった。さらに，佐賀大学の山津講師が申請された厚生労働省健康科学研究補助金（糖尿病戦略 研究事業）も 2 年目が終了した（研究期間 3 年）。研究課題は，「印刷教材と携帯電話フィードバッグシステムをも用いた食生活の改善及び運動指導プログラムの開発に関する研究」であった。また，受託研究 2 件，共同研究 1 件，民間の研究助成金にも 2 件採択された。研究業績としては 4 編の論文が国際誌に掲載された。論文の査読件数は，9 件であった。研究室の出来事としては，2 名が修士課程を修了された。松尾さんは九州大学に技術補佐員として採用され，斎藤氏は職場復帰された。第 12 回日本健康支援学会年次学術集会の会長を務めた。また，学会のプレカンファレンスとして，厚生労働科学研究費の研究成果に関する一般向けの講演会を開催した。さらに，代表を務めるリサーチコアに関しては，外国人講師を招聘して講演会を開催した。

斉藤　篤司

ネパール研究も新たな展開（子供研究）が始まり 2 年経過した。大きいけれども元気がない日本人の子どもを何とかすべく，小さいけれども元気なネパールの山村の子ども達の身体形態や体力を調査している。山村での刺激のない？生活の毎日の子ども達にとって，調査は興味津々。学校の先生の協力も大きい。何しろ 10 人以上いる先生の半分も出てきていない？！おかげで，子供はほったらかし。我々は体の良い子守と遊び相手の代わりに測定。しかし，毎年同じことやっても飽きられる（大人はすでに寄りつきもしない）。その上，日本の方法で体力を測っても，ネパールの子ども達の驚異的な身体能力を知るすべがない。遊具は何もないが，木の根っこで段差がでいていると，それを足場に，前方・後方・側方宙返り，雨で浸食されてできた3m以上の崖を駆け上がり，飛び降りて鬼ごっこ…。その原動力を知るべく足に注目している。今回は新たに足底筋力計を用いた足底筋力の測定と，即席で作った「足底撮影機」で足裏を撮影。「足底撮影機」は外枠を合板で組み立て式に作成。ネパールではまず手に入らないであろう 10mm のアクリル板だけは高くついたが，某 O 先生が業者に作らせた額の 20 分の 1 で作成。しかし，現場では新たな問題が。山の子ども達は靴なんか履かない。もちろん靴下も。足裏真っ黒。先ずは第 1 バケツで汚れ落とし（3 人で水は泥水に），タオルで拭いて，

インピーダンスで体組成測定。次に第 2 バケツできれいにクリーニングし，足裏撮影。透明な台の上に上がることなど，生まれて初めての子ども達，こわごわ。そのまま，椅子の上を移動させ，足底筋力測定。手も汚れず，大正解。しかし，水くみも水場まで 100m。初めのうちはよろこんで汲んできてくれた子供も飽きてきて，何とかキャンディーでつる。日本人の子ども達の土踏まずが消えかけて久しいが，ネパールの子ども達には 2 つの土踏まずでできる，きれいなハート“♡”がくっきり。歩かなくなった日本の子ども達の足は“♡”がないだけでなく変形し始めている（外反母趾は靴のせいだけではない）。足の“♡”を取り戻すとこころの“♡”も豊かになるのでは？

また，本業の自己選択ペースランニングと感情・心拍ヒストグラム。これまではコントローラーを持って走らせていたが，走行面のセンサーがランナーのペース変化で前後するのに対し，スピードを変化させる。このようなトレッドミルで自己ペース走を行わせるとスピードも心拍数も自己ペースの割にはばらついている。おそらく実走場面でもこんな風に環境や体調に合わせて，スピードを変化させ，気分や感情をコントロールしているのであろう。ここでのキーワードは「アソシエーション」。これに対し，自己ペースのコントロールに良いのか悪いのか，音楽や他者との併走を実験室で行うというちょっと他ではまねのできないことを行っている。「ディソシエーション」が次のキーワード。

勤労者山岳連盟との良好な？関係も継続中。フィールド研究で，しかも対象は高齢者がほとんど。なかなか統制が難しい。登山という長時間にもかかわらず，補給する水分は自ら運ばなければならないという自虐的？スポーツのために試みているのが「pre-hyperhydration」。何のことはない前の日から余計に水分を摂っておこうというもの。しかし，これが結構役に立ちそう。他のスポーツへの導入も画策中。

山本　教人

これまで一貫して「メディアの中のスポーツ」，つまりメディアによってスポーツがどのように描かれているのかに関心を抱き研究を進めてきた。具体的には，主に新聞報道を対象に内容分析という手法を用いて，「駅伝」，「オリンピックのメダリスト」，「オリンピックメダル」などに関するメディアイメージの研究を行ってきた。このような関心の延長として，平成 22 年度には，かつては「持久走」と呼ばれていた鍛錬的色彩の濃い走運動の一形態が，美容や健康づくりを目的とした走運動化（ジョギング化，健康走化）する過程で，メディアがジョギングという新たなスポーツ文化をどのように言説化し関わってきたのかを検討する作業に着手した。この研究に対しては，平成 22 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））の交付を受けることができた。

このほか，8 月に行われた「九州体育・スポーツ学会第 59 回第一専門分科会シンポジウム」において，「スポーツ界のパラドックスがもたらすトップアスリートの不品行問題 ―社会学における逸脱研究を手がかりに―」という報告を行った。スポーツ選手の不品行は，しばしばメディアに大きく取り上げられ，あたかもスポーツと選手の不品行とが本質的に強く結びついているかのような報道がなされている。スポーツ選手の不品行は，スポーツそのものの品位を著しく傷つけ，社会におけるその役割を過小に評価させてしまうという意味で，スポーツの人文・社会科学に携わる研究者が真剣に取り組まなければならない問題である。心理学分野でシンポジウムに登壇した杉山佳生氏（九州大学），歴史分野の榊原浩晃氏（福岡教育大学）の報告は，共に非常に刺激的で得るものが多かった。私は，社会学分野で報告を担当したのだが，スポーツ選手の不品行が，社会化の失敗によるものではなく，「ゲームのための自己犠牲」，「卓越のための努力」，「リスクの受け入れ」，「可能性の無限の追求」といったスポーツ文化のコアを形成するスポーツ倫理を無批判に受け入れる結果であるとの結論を導き出せたことはひとつの成果であった。シンポジウムの内容は，学会誌「九州体育・スポーツ学研究」に掲載される予定である。

杉山　佳生

平成 22 年度は，日本学術振興会科学研究費補助金を受けた研究「体育授業におけるノンバーバルスキル獲得・向上・発達プロセスの解明」（基盤研究（C）：研究代表者）にかかる調査に重点を置いた。具体的には，体育授業場面を含む様々な状況で利用しうるノンバーバルスキル尺度を作成し，その信頼性および妥当性（構成概念妥当性，基準関連妥当性）の検証を行った。そして，この尺度による評価と，体育授業やその他の運動行動に関連する様々な変数との関係を検討することで，ノンバーバルスキル

の発達を規定している要因を探った。その結果，体育授業に対する態度やノンバーバル行動に対する認知が，ノンバーバルスキルの獲得や向上を促している可能性が示唆された。これらの研究成果は，平成 23 年度以降に，公表する予定である。

また，同じく科学研究費補助金を受けた研究「行動科学に基づく大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラム開発」（基盤研究（B）：研究分担者）の一環として，体育授業における社会的スキルの獲得に関する調査を継続した。

さらに，これまでに行ってきたライフスキルに関する研究の成果を還元するために，九州体育・スポーツ学会のシンポジウム「スポーツ界のパラドックスがもたらすトップアスリートの不品行問題」に演者として参加し，ライフスキルに代表される心理社会的スキルを教育することの重要性について論じた。

林　直亨

論文の受理に時間がかかった年となった。第 1 著者，責任著者として合わせて 3 編が受理され，質量ともに十分ではあったが，どれも初投稿から 1 年以上が経過しての受理となった。とはいえ,瞳孔径および眼底血流に関する論文は，本年度から順調に受理されるようになったので，今後はこれらをベースに他グループが行っていない研究を先んじて進め，受理スピードを上げたい。

本年度は，運動時の眼底血流調節と，味覚などの刺激に対する顔面の皮膚血流応答について研究を進めた。

視覚の維持には，眼底血流（網膜循環および脈絡膜循環）が関与している。運動時にも眼底血流が維持される必要性があると考えられるが，その応答は明らかではない。本年度行った研究より，静的掌握運動および 100～170 拍/分程度の自転車エルゴメータ運動中には，昇圧に伴って脈絡膜血流は増加する一方，網膜血流は比較的一定を保つことが明らかになった。運動中には，脈絡膜血流は昇圧の影響を受けて増加し，網膜血流は自動能によって保たれることが示唆された。これらの結果は，本年受理された論文の中心となっている。さらに，高強度運動中などの厳しい条件での眼底血流応答についての実験を終えた。

一方，昨年度にやずや食と健康研究所研究助成金を頂いたお陰で，基本味投与時の顔面の皮膚血流応答に関する研究を進めることができた（内容は助成金欄）。さらに，温度感覚（辛さも含む）に対する顔面の皮膚血流応答についても実験を完了し，投稿準備中である。

また，本研究結果から，情動と顔面の皮膚血流との関連があると予想した。このアイディアは上原記念生命科学財団から助成金を得ることとなった。来年度に検討する大きな課題に対して予算的な裏づけができ，喜ばしいことである。

8 月 29 日から 9 月 25 日にかけて，フィリピンのアテネオデマニラ大学へ英語による教授能力養成プログラムを受講した。この時期は学会シーズンであるため，今年度の学会活動は低調になった。とはいえ，英文執筆能力をブラッシュアップする良い機会となった。今後の研究論文執筆が多少はスムーズになることを期待したい。

高柳　茂美

ボディワークの体験により変性意識状態を経験したり，内的な変化が起こることについて質的な側面から検討し，「催眠とボディワーク」をテーマにブリーフサイコセラピー学会でワークショップを行った。さらに，「ボディートーク」の技法のひとつである「心身一如のからだほぐし」が感情や免疫に及ぼす影響について生理的・心理的指標を用いて量的に分析した。

また，九州大学 P&P EQUSITE Study で得られたデータから学生のメンタルヘルスと生活習慣の関連について分析した。

育児期にある女性を対象に運動・スポーツ実施の程度，身体活動量，精神的健康，首尾一貫感覚，育児不安について調査し，それらの間にどのような関連があるかを検討するためデータ収集を行っている。

●健康科学第二部門

上園　慶子

平成 22 年度は従前の研究を継続した 1）九大在学生のライフスタイルについての調査， 2）血圧変動に関する研究と，平成 20 年度に始めた 3）職員を対象にした運動が身体に及ぼす効果についての研究を進めた。

1）今年度は新たな調査は行わず，平成 21 年度までに入力したデータベースの確認と整備作業を行った。

2）若年者（大学生）の血圧変動については，高年次教養科目「応用健康学」の受講者 38 名の男女学生に対して立位負荷試験を行ない，性格特性や特性不安，ストレス

度を調査し，データベースに追加入力した。

3）平成 20〜21 年度九州大学 P&P に採択された「大学における効果的なヘルスプロモーションの展開とその評価」は生体諸変数・血液・尿変数の測定結果を分析し全国集会等での報告を開始した。全体として，活動量（一日歩行数）の増加に応じて糖代謝や脂質代謝の改善する傾向を認めた。年齢や性別など個人の属性や生活パターンの影響について分析を続けており，順次結果を報告する予定である。また, 1 日につき 10 分間現状より多く歩くことで有意の代謝改善効果が得られることが判明したため, 健康診断後の事後指導では，筑紫地区に設けているフィットネスルームの開室などを勧めることにより，身体活動量の増加を図っている。

山本　和彦

ホームページ参照のこと。

一宮　厚

平成22年度の研究的な活動は，10年ほど前から行ってきた学生のコミュニケーションに関するアンケート調査のデータを解析したことであった。コミュニケーションに関する質問紙は，我々が健康科学センターにおいて10年ほど前に作成したものであるが，近年他大学でこの質問紙を用いた調査研究が行われるようになった。そこで，汎用に足りる信頼性と妥当性を明らかにするための解析を開始することとした。

まず今回は25の質問項目からコミュニケーションの因子を改めて求め直した。質問票はハイ・イイエのどちらかで回答する2値データであるので，距離変量として新たに tetrachoric 相関係数を使いて因子分析を実施し，コミュニケーション因子をもとめ直した。データは2004年の在校生のデータを用いた。因子は4つ得られ，それぞれ「傷つきの恐れと回避」，「親しい人との円満な関係」，「知らない人への働きかけ」，「人付き合いへの消極性」と解釈できた。

因子が得られたので，大学入学の時点から4年生の初めまでの4年間に，対人コミュニケーションのありようがどのように変化するか検討した。2001年に入学した学生を対象として入学直後の回答と2004年の4年次の回答の因子得点を比較した。男女で差が見られたので別々に解析した。

大学3年間に，男子では「親しい人との円満な関係」，「知らない人への働きかけ」は増強したが，「人付き合いへの消極性」も強まった。「傷つきの恐れと回避」には改善傾向がみられた。女子では「知らない人への働きかけ」に増強が見られたものの「人付き合いへの消極性」も強まっていた。しかし，「傷つきの恐れと回避」，「親しい人との円満な関係」には変化がなかった。

以上の事から，大学生活の中で，男女ともに付き合いを限定してソーシャルスキルとしての人との遣り取りを行うようになっていく様子が伺われる結果であった。そして男子は親しい人との関係も強めていくようである。しかし，傷つくことを恐れて人間関係を回避するということは，男子では軽くなる傾向を認めたものの，女子には変化が見られなかった。

以上の変化については22年度の全国大学保健管理研究集会で報告した。

丸山　徹

平成 22 年度は i. 学生健康診断における健康関連情報の集約と解析，ii. 総合理工学府のうちの量子プロセス理工学専攻の坂口英継准教授との共同研究，iii. 産学連携センターの間瀬淳特任教授との共同研究を進めた。学生健康診断の健康関連情報のうち心電図はある程度電子化が進んでいる検査領域であり，以前から過体重学生の心電図所見を集約してきた。今年度は学生で時に認める漏斗胸の心電図所見を解析して，医学部のベッドサイド実習中の学生にテーマとして取り組んでもらい，その結果を第 27 回日本心電学会（大分）の学生セッションで発表してもらったところ優秀賞を獲得した。総合理工学府の量子プロセス理工学専攻の坂口英継準教授との不整脈シミュレーションに関する共同研究の結果は今年度二つの総説にまとめた。産学連携センターの間瀬淳特任教授との共同研究は平成 22 年度福岡県 IST 産学官事業「無意識ストレス計測機器の製品化に向けた評価技術の開発」の研究分担者として運転中の心電図の非拘束的モニタリングを中心に行っている。今後の研究活動の問題点として教員としての業務負荷が最も大きい産業衛生分野が研究活動にほとんど結びついていない点が挙げられる。来年度以降，事例報告や少数例での解析から開始したい。

入江　正洋

健康科学や健康管理に関する研究を，身体，心理，社会，環境などの様々な領域を包括した学際的な観点（Bio-psycho-socio ecological model）から，疫学，生理学，免疫学，分子生物学などの手法を用いて行っている。これまでの主な研究テーマは，（1）健康管理，メンタルヘルス，及び健康増進に関する研究，（2）ストレスマネジメントに関する研究，(3）心理的ストレス，ライフスタイルと酸化的 DNA 損傷に関する研究，（4）職業性ストレスと免疫機能に関する研究，（5）アレルギー反応に及ぼす心理社会的要因に関する研究,などである。

平成 22 年度は，(2）の研究テーマに関して，平成 21 年度に引き続いて大学生と一般企業社員を対象とした，唾液アミラーゼ活性を指標とした調査研究を行った。大学生に関する研究では，内田・クレペリン負荷による精神作業ではアミラーゼ活性に有意な変化はみられなかったものの，自律訓練法によるリラクセーションでは，アミラーゼ活性が低下する傾向を認めた。事務系企業社員を対象とした研究では，新入社員のアミラーゼ活性が入社後に低下するとの結果を得た。また，アミラーゼ活性の個人内変動に関して，管理職の社員 1 名（男性，非喫煙者）を対象として 1 年以上観察したところ，アミラーゼは冬や春の多忙となる時期に高くなり，自覚的ストレス度とアミラーゼとの間に弱い正の相関を認めた。

その他，（4）の研究テーマに関して，米国国立労働安全衛生研究所（National Institute for Occupational Safety and Health: NIOSH）の Nakata らと共同で，職業性ストレスや生活習慣と免疫機能や疾病に関する研究を行っており，職務満足感が NK 細胞活性，感冒，欠勤との関連を有することや，喫煙がストレスや細胞性免疫とかかわりがあることなど，興味深い結果を得ている。

永野　純

生活習慣と疾病についての疫学研究:（1）財）放射線影響研究所（広島，長崎）における研究プロジェクトに参加している。22 年度は，被爆者コホートにおける郵便調査（本格調査）の遂行に関与した。また，予備調査および試験調査についての報告書をまとめた（共著)。(2）九大予防医学と老年医学を中心に推進されている生活習慣病予防に関するコホート研究では，追跡開始時点でのデータの一部を用いた解析（パーソナリティと生活の質との関連など）に関与した。(3）「福岡大腸がん研究」（九大予防医学ほか）では，喫煙や食物繊維摂取との関連について成果発表に関与した（共著)。(4）プロバイオティクス学（東海大学・古賀教授が主導）：脳卒中予防として用いられる低容量アスピリン療法による胃粘膜障害が，ヨーグルト定期摂取により抑制されることを検証する病院ベースの研究に参加した。(5）生活習慣病の予防を目指した介入研究に参加し，結果を雑誌に報告した（共著，主任研究者: 九大医療経営管理学・馬場園教授)。

ストレスと健康についての研究:（1）慢性関節リウマチ患者の障害やQOL とストレスとの関連についての多施設共同研究: パーソナリティ・ストレスと重症度との関連についてのデータや資料の整理を行った（研究助成金による研究を参照)。(2）母親のストレスと小児喘息患者の予後との関連についての前向き研究（九大心身医学・国立病院機構福岡病院）についてデータ解析を行い興味深い知見を得た。論文を雑誌に発表した。(3）ウィルス性慢性肝炎の進展とストレスおよび生活習慣との関連についての研究（九大心身医学ほか）に関与した。(4）ハイデルベルク研究への参加: 観察研究および介入研究データの一部を得て，その解析に着手した。このうち，喫煙に関する解析，ならびに介入方法についての資料翻訳作業を，助成金を受けて進めた（研究助成金による研究を参照)。(5）森林浴による心身への影響に関する研究（名大予防医学ほか）に関与した。(6）睡眠時無呼吸症候群患者のアドヒアランス決定要因に関する研究（九大心身医学ほか）に関与した。

福盛　英明

平成 22 年度は，科研費 2009 年度～2011 年度,基盤研究(C)「大学の学生相談充実における「発展段階モデル」の臨床心理学的研究（課題番号 21530692）研究チーム: 福盛英明（研究代表者），吉武清實・池田忠義（東北大学），高野明（東京大学），山中淑江（立教大学），内野悌司（広島大学），大島啓利（広島修道大学），峰松　修（九州産業大学）」の 2 年目である。平成 21 年度の研究成果を踏まえ，学生相談機関充実の発展段階モデルを開発したものを「学生相談機関発展段階表」としてまとめ，日本学生相談学会第28回大会（岩手大学）で学会発表を行った。現在，学会誌に投稿中である。コメンテーターとして金子玲子氏（専修大学）を加え，共同研究者にが一同に集まり検討会を行った。「学生相談機関発展段階表」に改良を加え，国立大学と私立大学を包含

できる，よりシンプルなバージョンを完成させている段階である。ただし，平成22年3月11日の東日本大震災により，平成23 年度以降の大学のあり方，学生相談機関のあり方が再考される可能性がある。また研究で全国調査を行う予定であったが，研究計画に大幅な変更を加えなければならなくなっている。臨機応変に対応してゆきたい。

眞﨑　義憲

平成22年度は，平成21年度に実施した新型インフルエンザの感染拡大阻止対策の有効性に関する研究の成果発表と委託研究を中心に研究を行った。

（1）新型インフルエンザの感染拡大阻止に関する研究は，新型インフルエンザ発生以前から，どのように学生や教職員に情報を発信し理解させるのか，そして，罹患者をどのようにして迅速に把握するのが最も効率が良いのかということについて検討してきた。新型インフルエンザ発生時には，検討中の段階ではあったが，聞き取り調査を実施し，それを元に九州大学オリジナルのWEB での感染確認システムを構築した。それらに基づいて平成 21 年度に行った九州大学の感染拡大阻止対策の効果等について検討した研究成果について学会発表を行い，論文投稿を行った。

(2) 禁煙への行動変容の契機に関する研究は，九州大学の喫煙対策を受けて，禁煙を希望する学生・教職員への禁煙支援を実施する卒煙プロジェクト（卒煙 Q）をスタートさせた。1 年目である平成 22 年度は，学生で約 4 割，教職員では約 7 割が禁煙に成功した。一般的な禁煙外来では，1 年後には 3 割程度にまで成功率が低下する。3〜6 ヶ月経過時点のデータであるが，今後引き続き評価を行い，効率的かつ有効な禁煙支援のあり方について検討していく。

(3) 大学生の健康支援に関わる研究として，九州大学における新型インフルエンザ感染拡大阻止対策とその問題点に関する報告と学生および教職員の生活習慣改善プログラムの成果に関する報告を全国大学保健管理研究集会で行った。本学の新型インフルエンザ対策に関しては，本学のシステムについて多数の質問が寄せられた。また，生活習慣改善プログラムの報告は保健師が実施したが，他大学からも先進的な取り組みとして高く評価された。

（4）うきは市の食育プロジェクトの受託研究に従事した。平成22年度は5カ年計画の最終年度にあたり，平成18 年に実施した住民アンケートの事業後評価にあたるアンケートを計画した。7 月には最終年度報告に関する内容検討および助言を行った。また，また 8 月に 2 回，モデル地区に対する健康調査の結果説明会を実施した。9月にアンケートを実施し，3月にアンケート報告書および5カ年にわたるうきは市食育事業報告所を刊行した。

（5）防衛医科大学校における間欠型一酸化炭素中毒の研究は，昨年度，日本高気圧酸素・潜水医学会雑誌への論文投稿で一旦終了となった。防衛医科大学校在職時の教授が異動となったため，平成22年度は，防衛医科大学校での研究は実施できていない。後任の教授との調整で，平成 23 年度以降非常勤講師の委嘱の可能性があることを伝えられており，今後も防衛医科大学校での研究を継続することになると思われる。

2. 研 究 業 績

●健康科学第一部門

1. **著書・翻訳**

（1）First author

橋本公雄: 第 3 章 2 節 心理社会的見地. 財団法人日本体育協会（監修）, 竹中晃二（編）, アクティブ・チャイルド 60min.-子どもの身体活動ガイドライライン , 2010, pp .84-112.

林 直亨: 運動と視覚. 宮村實晴編集, 運動生理学のニューエビデンス. 真興交易出版, 2010, pp 50-56.

（2）Co-author

遠藤洋志, 熊谷秋三: 運動と内分泌. 浅野勝己編著, 運動生理学入門（改訂版）, 杏林書院, 2011.

2. **原著**

A. **学会機関誌等論文**

（1）First author

Hayashi N, Someya N: Muscle metaboreflex activation by static exercise dilates pupil in humans. Eur J Appl Physiol 111:1217-1221, 2011.

（2）Co-author

Wang W, Gao J, Xu Y, Hashimoto K, Fu Jian Wei: The relationship between work stress and mental health of enterprise management. Chinease Journal of Health Psychology. 19(10), 45-48, 2011

Gao J, Wang X, Hashimoto K, Zhao J, Ji Meng, Wang H: The impact on the mental health and life quality of the elderly people through practicing calligraphy and painting, China Journal of Health Psychology, 18(3): 291-293, 2010.

堀田 亮, 藤原大樹, 橋本公雄: 高齢者の認知機能は日常生活での活動と関連するのか？. スポーツ心理学研究, 38(1): 1-12, 2010.

Nagano M, Sasaki H, and Kumagai S: The association between cardiovascular fitness and nonalcohol fatty liver in newly diagnosed Japanese patients with glucose intolerance. J. Sports Sci. Med., 9:405-410, 2010.

Suwa M, Yamamoto K, Nakano H, Sasaki H, Radak Z, and Kumagai S: Brain-derived neurotrophic factor treatment increases the skeletal muscle glucose transporter 4 protein expression in mice. Physiol. Res., 59:619-623, 2010.

Marton O, Koltai E, Nyakas C, Bakonyi T, Zenteno-Savin T, Kumagai S, Goto S, and Radak Z: Aging and exercise affect the level of protein acetylation and SIRT1 activity in cerebellum of male rats. Biogerontrology, 11:679-686, 2010.

Suwa M, Nakano H, Radak Z, and Kumagai S: Short-term adenosine monophosphate–activated protein kinase activator 5-aminoimidazole-4-carboxamide-1-β-D-ribofuranoside treatment increases the sirtuin 1 protein expression in skeletal muscle. Metabolism, 60:394-403, 2011.

中尾武平, 斉藤篤司, 大柿哲朗, 小宮秀一: 身長と体重の相対発育係数別にみた女児（2-5 歳）の発育・発達特性. 日本生理人類学会誌, 16: 9-16, 2011.

中尾武平, 寺本圭輔, 村松梨奈, 斉藤篤司, 大柿哲朗, 小宮秀一: 身長と除脂肪量の相対発育からみた幼児（2-5 歳）の運動能力の性差, 愛知教育大学紀要, 2011

染矢菜美, 林 直亨, 丸山 徹: 脈波コロトコフ音記録計による非観血的な心拍出量の測定. 臨床と研究 87: 443-446, 2010.

B. 紀要等論文

（1）First author

橋本公雄, 村上雅彦: 運動に伴う改訂版ポジティブ感情尺度（MCL-2.）の信頼性と妥当性. 健康科学, 33: 21-26, 2011.

熊谷秋三, 一宮　厚: 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築: 課題と展望　九州大学 P&P 研究　EQUISITE Study. 健康科学, 33: 97-100, 2011.

（2）Co-author

中尾武平, 斉藤篤司, 大柿哲朗, 小宮秀一: Allowmetry による男児（2−5 歳）の運動能力の発達評価. 健康科学, 33: 53-61, 2011.

Nakao T, Komiya S, Nabetani T, Saito A, Ogaki T: Estimate of the Body Fat in Nepalese Children by Their Body Mass Index. J. Health Sci., 33: 63-68, 2011.

尾原遼平, 斉藤篤司, 小清水孝子: 競技レベル別にみた大学生アスリートの食事に対する意識, 健康科学, 33: 47-51, 2011.

野津亜季, 林　直亨, 熊谷秋三: 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築: 研究デザインと研究方法　九州大学 P&P 研究　EQUSITE Study. 健康科学, 33: 75-77, 2011.

野藤　悠, 山下幸子, 林　直亨, 熊谷秋三: 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けた システム構築: 身体活動量, 食物摂取量九州大学 P&P 研究　EQUISITE Study.健康科学, 33:79-81, 2011.

高柳茂美, 福盛英明, 一宮　厚, 熊谷秋三: 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築: うつ症状 九州大学 P&P 研究 EQUSITE Study. 健康科学, 33:83-86, 2011.

高柳茂美, 福盛英明, 一宮　厚, 熊谷秋三: 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築: SOC　九州大学 P&P 研究　EQUSITE Study. 健康科学, 33: 87-90, 2011.

福盛英明, 一宮　厚, 高柳茂美, 熊谷秋三: 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築: QOL　九州大学 P&P 研究　EQUSITE Study. 健康科学, 33: 91-95, 2011.

西田　保, 伊藤豊彦, 佐々木万丈, 磯貝浩久, 杉山佳生, 渋倉崇行: 生きる力に影響する要因: 体育における学習意欲, ストレス適応, 心理社会的スキルの視点から. 総合保健体育科学, 33(1): 23-29, 2010.

王　雪蓮, 杉山佳生: 中国大学体育の現状と課題. 健康科学, 33: 13-19, 2011.

佐々木万丈, 西田　保, 伊藤豊彦, 磯貝浩久, 杉山佳生, 渋倉崇行: 体育授業適応モデルの小学生に対する適合度の検討. 日本女子体育大学スポーツトレーニングセンター紀要, 14: 13-20, 2011.

渋倉崇行, 杉山佳生, 西田　保, 伊藤豊彦, 佐々木万丈, 磯貝浩久: ニュージーランドの保健体育カリキュラムとライフスキル教育―日本におけるライフスキル教育の推進に向けて―. 人間生活学研究, 2: 59-69, 2011.

3. 総説

（1）First author

熊谷秋三, 野藤　悠: 運動と遺伝子. 特集: 運動と骨 II. BONE, 24:43-48, 2010.

熊谷秋三, 岸本裕代: アンチエイジングの運動疫学. 特集: アンチエイジングのためのエクササイズ・サイエンス. アンチエイジングの医学, 7:18-24, 2011.

熊谷秋三, 征矢英明: 特集にあたって. 特集: アンチエイジングのためのエクササイズ・サイエンス. アンチエイジングの医学, 7:17, 2011.

4. 資料･報告書

（1）First author

橋本公雄: これからの大学体育と体育学会. 財団法人日本体育学会, 日本体育学会 60 周年記念誌. 2010, pp. 227-228.

橋本公雄, 堀田　亮, 谷本英彰, 木村　彩, 阪田俊輔: 平成 22 年度筑紫野市民のウォーキングの実態調査報告書. 筑紫野市健康づくり推進協議, Pp. 35, 2011. 1.

橋本公雄: 平成 22 年度 筑紫野市「なかなかよか健康チャレンジ－ウォーキングによる健康なまちづくり－」報告書. 筑紫野市健康づくり推進協議会, Pp.92, 2011.3.

橋本公雄, 小松智子, 堀田　亮: 地域健康づくりにおけるボランティア実践の意義. 筑紫野市健康づくり推進協議会, Pp. 38, 2011. 3.

橋本公雄: 21 世紀の高等教育と保健体育・スポーツ・体育系学術団体からの提言 2010. 全国大学体育連合, Pp. 32-37, 2010.10, 全国大学体育連合, 大学体育, The University Physical Education and Sport, 96:141-160, 2010,12.

熊谷秋三: 大規模コホートを用いた生活習慣病の一次予防のための運動量策定に関する運動疫学研究. 平成 22 年度 厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患, 糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）総括研究報告書, 2011. 3.

熊谷秋三: 一般住民の握力が死亡および死因別死亡に及ぼす影響: 久山町研究. 平成 22 年度 厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患, 糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）分担研究報告書. 大規模コホートを用いた生活習慣病の一次予防のための運動量策定に関する運動疫学研究（研究代表者: 熊谷秋三）2011. 3.

熊谷秋三: 地域住民における運動習慣と認知症発症との関係: 久山町研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（認知症対策総合研究事業）研究報告書. アルツハイマー病の危険因子の解明と予防に関する大規模ゲノム疫学研究（研究代表者: 清原　裕）, 2011. 3.

熊谷秋三: 携帯端末機器を活用した生活習慣改善プログラムに関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（ 糖尿病戦略 研究事業）分担研究報告書. 印刷教材と携帯電話フィードバックシステムを用いた食生活の改善及び運動指導プログラムの開発に関する研究. 2011. 3.

熊谷秋三: 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構 EQUSITE Study. 平成 22 年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト研究成果報告書. 2011. 3.

山本教人: 生涯スポーツ社会における大学体育とスポーツ. 体育・スポーツ教育研究. 11(1): 43-47, 2011.

林　直亨, 熊谷秋三: 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築: 研究の概要　九州大学 P&P 研究 EQUSITE Study 1. 健康科学 33: 69-73, 2011.

（2）Co-author

眞﨑義憲, 大柿哲朗, 上園慶子, 丸山　徹: うきは市食育プロジェクト 健康と食習慣, 生活習慣に関するアンケート調査報告書（総頁 67）, 2011. 3.

眞﨑義憲, 丸山　徹, 大柿哲朗, 上園慶子, 濱田綾子: うきは市食育プロジェクト 食育モデル地区事業報告書（平成 18 年度～22 年度）（総頁 119）, 2011. 3.

正野知基, 橋本公雄, 根上　優, 飯干　明, 長岡良治, 西田順一, 内田若希, 角南良幸, 柿山哲治, 磯谷浩久, 杉山佳生, 山本教人: 大学初年次生の生活習慣の実態および健康状態. 体育・スポーツ教育研究. 11(1): 28-38, 2011.

5. 学会・研究発表

（1）First author

橋本公雄: 運動・スポーツに伴うメンタルヘルス向上効果のモデル構築. 九州体育・スポーツ学会第 59 回大会, 鹿児島市, 2010. 8. 27-29.

Ogaki T, Nakao T, Saito A, Nabetani T: Physical activity levels during daily life in adolescents living in a hilly village of Nepal. The 15th EASESS, Jiangsu, China, 2010. 8. 8.

斉藤篤司, 本多芙美子, 橋本公雄: 自己選択ペースでのランニング中の感情の変化, 九州スポーツ心理学会, 長崎市,

2011.3. 6.

斉藤篤司, 本多芙美子: 長時間ランニング時の走ペースを規定する要因, 九州体育・スポーツ学会, 鹿児島市, 2010.8.29

斉藤篤司, 中尾武平, 濵田綾子, 染矢菜美, 堀田　亮, 西田順一, 鍋谷　照: 中高年登山者の体力, 日本登山医学会, 群馬県みなかみ町, 2010. 5. 8

Yamamoto N: Discourse on Olympic medals and medalists. The 15th Annual Conference of East Asian Sport and Exercise Science Society. Suzhou China, 2010. 8. 8.

山本教人: オリンピックメダルとメダリストのメディア言説. 九州体育・スポーツ学会, 鹿児島市, 2010. 8. 28.

杉山佳生:「就業力」に向けて「健康・スポーツ科学演習」で教えるべきこと. 第 59 回九州地区大学一般教育研究協議会, 福岡市, 2010. 9.10-11.

Hayashi N, Someya N, Ikemura T: Effects of hyper- and hypocapnea on choroidal and retinal blood flows and the visual acuity. Experimental Biology 2010. Anaheim 2010. 4. 25- 28.

高柳茂美, 野津亜季, 福盛英明, 杉山佳生, 眞﨑義憲, 一宮　厚, 熊谷秋三: 九州大学学生の首尾一貫感覚(SOC)とメンタルヘルスおよび生活習慣との関連性に関する研究: EQUSITE Study. 第 12 回日本健康支援学会学術集会, 福岡市, 2011. 2.19.

（2）Co-author

武部幸世, 橋本公雄: 女子学生の食行動改善に対するセルフ・エフィカシー尺度の作成と食行動変容ステージとの関係. 日本栄養・食糧学会第 64 回大会, 徳島市, 2010. 5.21-23.

内田若希, 橋本公雄: 障害者スポーツ実習における社会的スキルの変化―ソーシャル・サポートの互恵性に着目して―. 日本体育学会第 61 回大会; 豊田市, 2010. 9. 8-10.

堀田　亮, 橋本公雄: 高齢者の運動継続と認知機能の関連について－TTM の変容ステージを用いて－. 九州体育・スポーツ学会第 59 回大会, 鹿児島市, 2010. 8. 27-29.

堀田　亮, 橋本公雄: 高齢者の生活習慣と認知機能の関係について. 日本体育学会第 61 回大会, 豊田市, 2010. 9. 8-10.

堀田　亮, 橋本公雄: 高齢者の生活習慣と認知機能の関係. 九州スポーツ心理学会第 24 回大会, 長崎市, 2011. 3. 5-6.

本多芙美子, 橋本公雄: 運動に伴う感情変化の規定要因が感情変化に与える影響―女子大学生の体育実技実習の対象―. 第 8 回スポーツ動機づけ研究会, 名古屋市, 2010. 5. 29-30.

本多芙美子, 橋本公雄: 様々な言語を用いたウォーキングの運動強度と感情変化の関係. 第 14 回日本ウォーキング学会大会, 東京都, 2010. 6. 26-27.

本多芙美子, 橋本公雄: ウォーキングに伴う感情変化の規定要因の検討. 九州体育・スポーツ学会第 59 回大会, 鹿児島市, 2010.8.27-29.

Anan Y, Hashimoto K, Nakagaichi M: Comparison of the influence between the amount of dramatic experience and the year of experience on psychological competitive ability of athletes. 15th annual Cogress of the European College of Sport Science, Antalya, Turkey, 2010. 6. 25

阿南祐也, 中垣内真樹, 橋本公雄: スポーツ選手の心理的競技能力およびメンタルヘルスに影響を及ぼす要因の検討―ドラマチック体験量と競技水準の比較―. 日本体育学会第 61 回大会, 豊田市, 2010. 9. 8-10.

木村　彩, 橋本公雄, 藤原大樹: 高校女子バレーボール選手に対するメンタルトレーニングの事例報告, 九州体育・スポーツ学会第 59 会大会, 鹿児島市, 2010. 8. 27-29.

木村　彩, 橋本公雄, 河津慶太: ステイルネス尺度開発に関する研究, 日本体育学会第 61 回大会, 豊田市, 2010. 9. 8-10.

木村　彩, 橋本公雄: ステイルネス概念に基づいたスポーツ選手のメンタルヘルスパターン分類の試み, 九州スポーツ心理学会第 24 回大会, 長崎市, 2011. 3. 5- 6.

谷本英彰, 橋本公雄: 児童版運動継続化の螺旋モデルの構築に関する試験的試み, 九州体育・スポーツ学会第 59 回大会,

鹿児島市, 2010. 8. 27-29.

谷本英彰, 橋本公雄: 児童版運動継続化の螺旋モデルの構築, 九州スポーツ心理学会, 長崎市, 2011. 3. 5-6.

小松智子, 橋本公雄: ボランティア活動が精神的健康に及ぼす影響, 九州体育・スポーツ学会第 59 回大会, 鹿児島市, 2010. 8. 27-29.

荒井久仁子, 橋本公雄: 高齢者運動教室のメンタルヘルスの変化と規定要因の検討－特定高齢者介護予防事業参加者を事例として－. 九州体育・スポーツ学会第 59 回大会, 鹿児島市, 2010. 8. 27-29.

荒井久仁子, 橋本公雄: 特定高齢者の運動習慣と身体的・心理的要因との関係－運動頻度の違いとメンタルヘルスの関係を中心に－. 九州スポーツ心理学会第 24 回大会, 長崎市, 2011. 3. 5- 6.

Nakao T, Saito A, Ogaki T (Keynote Lecture): The Growth and Development of Morphorogy, Physical Fitness and Motor Abikity in Japanese Children. The 15th EASESS, Jiangsu, China, 2010. 8. 8.

Nofuji Y, Kishimoto H, Ohshima H, Kiyohara Y, and Kumagai S: Impact of physical activity and physical inactivity on the expression of obesity in a general Japanese population: the Hisayama Study. The 16th International Congress on Obesity, Stockholm, Sweden, 11-15, July, 2010.

Matsuo E, Nofuji Y, Moriyama Y, Nagano M, and Kumagai S: The relationship of physical inactivity and appearance of obesity in Japanese community dwelling elderly. The 16th International Congress on Obesity, Stockholm, Sweden, 11-15, July, 2010.

野藤　悠, 森山義彦, 松尾恵理, 一宮　厚, 清原　裕, 熊谷秋三: 認知症における運動介入の可能性. 福岡認知症研究会, 福岡市, 2010. 9. 7.

宅間真佐代, 山下幸子, 岸本裕代, 野藤　悠, 西地令子, 熊谷秋三: 勤労者における食物摂取状況と抑うつ傾向との関連. 第 65 回日本体力医学会大会, 市川市, 2010. 9. 16-18.

長野真弓, 松尾恵理, 森山善彦, 井出幸二郎, 野藤　悠, 熊谷秋三: 地域在住高齢者における認知機能低下・うつ・閉じこもりの重複と身体活動量との関連性. 第 65 回日本体力医学会大会, 市川市, 2010. 9.16-18.

中野裕史, 諏訪雅貴, 熊谷秋三: 乳児期の甲状腺ホルモン撹乱による行動特性の変化と脳由来神経栄養因子の関係. 第 65 回日本体力医学会大会, 市川市, 2010. 9. 16-18.

Németh H, KaiY, KishimotoH, Sasaki H, and Kumagai S: Contribution of oxygen uptake at double product break point on metabolic syndrome in male patients with newly diagnosed type 2 diabetes mellitus. 第 65 回日本体力医学会大会, 市川市, 2010. 9. 16-18.

松尾恵理, 森山善彦, 長野真弓, 熊谷秋三: 地域在住高齢者の身体活動量と抑うつとの関連性. 第 69 回日本公衆衛生学会総会, 東京都, 2010.10.27-29.

西地令子, 鷲尾昌一, 熊谷秋三: 勤労者における睡眠障害とメタボリックシンドロームとの関連性について. 第 69 回日本公衆衛生学会総会, 東京都, 2010.10.27-29.

岸本裕代, 秦　淳, 二宮利治, 野藤　悠, 土井康文, 福原正代, 熊谷秋三, 清原 裕: 地域一般住民における余暇時の身体活動量と死亡の関係: 久山町研究.第 21 回日本疫学会学術総会, 札幌市, 2011. 1. 21-22.

野藤　悠, 山下幸子, 岸本裕代, 松尾恵理, 西地令子, 熊谷秋三: 勤労者における身体活動量とうつ症状との関連性. 第 21 回日本疫学会学術総会, 札幌市, 2011. 1. 21-22.

山下幸子, 野藤　悠, 岸本裕代, 熊谷秋三: 勤労者におけるうつ症状と肥満の関連性. 第 21 回日本疫学会学術総会, 札幌市, 2011. 1. 21-22.

松尾恵理, 野藤　悠, 森山善彦, 長野真弓, 大島秀武, 一宮　厚, 熊谷秋三: 高齢者における身体活動量とうつ症状との関連性. 第 21 回日本疫学会学術総会, 札幌市, 2011. 1. 21-22.

齊藤貴文, 森山善彦, 松尾恵理, 野藤　悠, 崎田正博, 長野真弓, 熊谷秋三: 高齢者における膝痛の強度と罹患側の違いがメンタルヘルスに及ぼす影響: 太宰府研究. 第 12 回日本健康支援学会年次学術集会, 福岡市, 2011. 2. 18-20.

宅間真佐代, 森山善彦, 山下幸子, 岸本裕代, 野藤　悠, 熊谷秋三: 勤労者のうつ状態と栄養素等摂取状況との関連. 第12回日本健康支援学会年次学術集会, 福岡市, 2011. 2. 18-20.

末永昭人, 森山善彦, 熊谷秋三: 定期的運動実践高齢者の身体活動量. 第 12 回日本健康支援学会年次学術集会, 福岡市, 2011. 2. 18-20.

森山善彦, 松尾恵理, 野藤　悠, 山津幸司, 井出幸二郎, 長野真弓, 一宮　厚, 熊谷秋三: 地域在住高齢者の認知機能の実態および運動習慣の影響に関する比較研究. 第12回日本健康支援学会年次学術集会, 福岡市, 2011. 2. 18-20.

野津亜季, 高柳茂美, 福盛英明, 杉山佳生, 眞崎義憲, 一宮　厚, 熊谷秋三: 疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築に関する研究の概要とうつ症状の実態: EQUISITE Study. 第12回日本健康支援学会年次学術集会, 福岡市, 2011. 2. 18-20.

佐藤広徳, 熊谷秋三: 中高年者における下肢筋量の加齢変化について. 第 12 回日本健康支援学会年次学術集会, 福岡市, 2011. 2. 18-20.

小清水孝子, 斉藤篤司: 福岡県タレント発掘プログラムに参加している子どもと保護者の食生活に関する調査, 日本栄養改善学会, 埼玉県坂戸市, 2010. 9.

尾原遼平, 斉藤篤司, 小清水孝子: 競技別にみた大学生アスリートの食事に対する意識, 九州体育・スポーツ学会, 鹿児島市, 2010. 8.29.

河津慶太, 杉山佳生, 中須賀巧: （研究推進委員会企画セッション）スポーツチームにおけるチームパフォーマンス予測モデルの研究—モデルに含まれる 3 つの概念の因子構造の検討—. 九州体育・スポーツ学会第 59 回大会, 鹿児島市, 2010. 8. 27-29.

河津慶太, 杉山佳生, 中須賀巧: スポーツチームにおけるチームワーク測定尺度の開発. 日本体育学会第61回大会, 豊田市, 2010. 9. 8-10.

中須賀巧, 杉山佳生: 意識･行動類型別にみた体育授業における動機づけ雰囲気及び学習意欲の比較. 日本体育学会第61回大会, 豊田市, 2010. 9. 8-10.

中澤　史, 杉山佳生, 山﨑将幸: 自我状態が心理的競技能力に及ぼす影響. 日本スポーツ心理学会第 37 回大会, 福山市, 2010.11.19-21.

児玉光雄, 杉山佳生, 高橋仁大: テニス用タイミング予測トレーナーのトレーニング効果について. 第 22 回テニス学会, 東京都, 2010.12. 3- 5.

児玉光雄, 杉山佳生, 高橋仁大, 池田翔太: テニス用タイミング予測トレーナーによるボレーテスト. 九州スポーツ心理学会第24回大会, 長崎市, 2011. 3. 5- 6.

Shimizu M, Someya N, and Hayashi N: Regional blood flow responses of facial skin to cycling exercise. Experimental Biology 2010. Anaheim 2010. 4.25-28.

Ikemura T, Someya N, Hayashi N: Retinal and choroidal blood flow responses to dynamic and static exercise in humans. Experimental Biology 2010. Anaheim 2010. 4.25-28.

池村　司, 染矢菜美, 林　直亨: 寒冷昇圧試験およびレジスタンス運動に対する眼底の血流応答. 第65回日本体力医学会, 千葉, 2010. 9.

Ikemura T, Hayashi N: Ocular circulation response to exhaustive exercise in humans. Experimental Biology 2011. Washington DC 2011. 4. 10-13.

Kashima H, Hayashi N: Facial skin blood flow response to peasant and unpleasant taste stimulation. Experimental Biology 2011. Washington DC 2011. 4. 10-13.

Ikemura T, Hayashi N: Effects of exhaustive exercise on ocular circulation in normothermia and hyperthermia in humans. 第88回生理学会大会　震災のため紙上開催 2011. 3. 28-30.

Kashima H, Hayashi N: Facial skin blood flow response to peasant and unpleasant taste stimulation. 第88回生理学会大会. 震災

のため紙上開催, 2011. 3. 28-30.

6. 講演・ワークショップ・シンポジウム・コメンテーター等

橋本公雄（企画）: 身体活動の新しい魅力づくり-心理学からの貢献-. 日本スポーツ心理学会, 岡山平成大学, 岡山市, 2010. 11.

橋本公雄（シンポジスト）: 大学体育授業の効果. 平成 22 年度全国大学体育連合シンポジウム, 早稲田大学リーガルホテル, 東京都, 2010. 10. 2.

橋本公雄（シンポジウム, 司会）: 現代社会におけるスポーツ体験の意味を考える. 平成22年度 春季 体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議, 九州地区大学体育連合, 熊本市, 2011. 3. 14.

橋本公雄（招待講演, 司会）: A cross-cultural comparison of attitudes and influences on physical activity participation （Dr. Rafer Lutz, Baylor University）, 平成22年度 体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議, 九州地区大学体育連合, 熊本市, 2011. 3. 14.

大柿哲朗（オーガナイザー・座長）: シンポジウム「高齢者の環境適応能」. 第 18 回日本運動生理学会大会. 鹿児島市. 2010. 7.31.

大柿哲朗（座長）: ワークショップ（ヘルスサイエンスセミナー）「元気な高齢社会を目指して: パート 2」. 第 12 回日本健康支援学会学術集会, 福岡市. 2011. 2.20.

西村秀樹: 福岡市生涯スポーツ講座「スポーツを科学する」, 「地域社会におけるスポーツの役割」福岡市, 2011. 2. 9.

熊谷秋三（シンポジスト）: 高齢者の運動疫学研究の成果からみた健康支援. シンポジウムテーマ: これからのエイジマネジメント～60 歳からの労働, その産業衛生課題と対策～.第 83 回日本産業衛生学会総会, 福井市, 2010. 5. 26-27.

熊谷秋三（招待講演）: メンタルヘルスに関する運動疫学研究の紹介とその課題. 第 83 回日本産業衛生学会, 労働者体力問題研究会. 福井市, 2010. 5. 26-27.

熊谷秋三（イブニングセミナー: ワークショップ）: わが国における身体活動に関するコホート研究の成果と今後の展望. 第 65 回日本体力医学会大会, 市川市, 2010. 9. 16-18.

熊谷秋三（招待講演）: 運動アプローチ（ミトコンドリアと血糖値）. 第 10 回抗加齢医学の実際, 東京都, 2010. 9. 19-20.

熊谷秋三（企画・講演）: 身体運動の科学を通しての社会貢献: 最近の運動疫学研究の知見から. 第 2 回九州大学リサーチコア公開研究発表会. 春日市, 2010. 12. 7.

熊谷秋三（企画・座長）: 招待講演「運動とカゼ」永富良一, 第 2 回九州大学リサーチコア公開研究発表会. 春日市, 2010. 12. 7.

熊谷秋三（企画・座長）: 招待講演「Posttranslational modification of DNA repair proteins in aging: impact of exercise」Zsolt Radak, 第 2 回九州大学リサーチコア公開研究発表会. 春日市, 2010. 12. 7.

熊谷秋三（企画・座長・講演）: 生活習慣病を予防する！～運動の効果～. 厚生科学研究費（「大規模コホートを用いた生活習慣病の一次予防のための運動量策定に関する運動疫学研究」研究代表者: 熊谷秋三）一般向け研究発表会, 春日市, 2011. 2.18.

熊谷秋三（会長講演）: 身体運動の科学的証拠に基づく一次予防の展開. 第 12 回日本健康支援学会年次学術集会, 福岡市, 2011. 2. 19-20.

熊谷秋三（座長）: 特別講演「生活習慣病予防と運動: 分子生物学からの提言」藤井宣晴, 第 12 回日本健康支援学会年次学術集会, 福岡市, 2011. 2. 19-20.

熊谷秋三（企画）: 第 12 回日本健康支援学会年次学術集会, 福岡市, 2011. 2. 19-20.

山本教人: スポーツ界のパラドックスがもたらすトップアスリートの不品行問題 ―社会学における逸脱研究を手がかりに―. 九州体育・スポーツ学会第 59 回第一専門分科会シンポジウム, 鹿児島市, 2010. 8.29.

杉山佳生（シンポジスト）：第一専門分科会シンポジウム スポーツ界のパラドックスがもたらすトップアスリートの不品行問題. 九州体育・スポーツ学会第 59 回大会, 鹿児島市, 2010. 8. 27-29.

杉山佳生（企画・司会）：会員企画フォーラム ユニークな研究をするために. 九州スポーツ心理学会第 24 回大会, 長崎市, 2011. 3. 5- 6.

高柳茂美（演者）：ワークショップ: 催眠とボディーワーク. 日本ブリーフサイコセラピー学会長崎大会, 長崎市, 2010. 8.26.

7. 論文査読

氏　名	雑　誌　名　な　ど	編　数
橋本　公雄	体育学研究	2
	スポーツ心理学研究	3
	生理人類学研究	1
	健康心理学研究	1
	体育・スポーツ教育研究	2
大柿　哲朗	J. Physiol Anthrop & Appl Human Sci	2
	健康支援	3
	九州体育・スポーツ学研究	2
西村　秀樹	スポーツ社会学研究	2
熊谷　秋三	J. Appl. Physiol.	1
	Diabetes Care	1
	体力科学	4
	研究論文集 ―教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集―	1
	健康支援	1
山本　教人	スポーツ社会学研究	1
	体育・スポーツ教育研究	1
杉山　佳生	日本教育工学会論文誌	1
	健康支援	3
	スポーツ心理学研究	2
	体育学研究	2
	九州地区国立大学間連携教育系・文系論文集	1
	体育測定評価研究	1
	スポーツ産業学研究	1
	九州大学出版会	1
林　直亨	European Journal of Applied Physiology	1
	Journal of Physiological Science	1
	Medicine and Science in Sports and Exercise	1
	Hypertension Research	1
	Vascular Health and Risk Management	1

8. その他（民間商業雑誌投稿, 新聞等）

橋本公雄（監修）：特集徹底研究！子どもたちの心. SPORT JUST201, 1.47: 59-17, 2011. 2.

大柿哲朗: 元気で, 長生きのために―運動・食・ストレス―, 西日本新聞. 2010. 6.20.

山本教人: 「うんち（運動音痴）」は遺伝か？CAMPUS HEALTH, 34: 2-3, 2010.

杉山佳生: 空間行動とタッチング. 体育の科学, 60(9): 609-612, 2010.

杉山佳生: スポーツ選手の自己効力感を高める方法. 児童心理, 64(16): 109-114, 2010.

9. 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員

橋本公雄: 平成 22 年度学術振興会特別研究員等審査会専門委員

●健康科学第二部門

1. 著書・翻訳

（1）First author

丸山　徹, 能登裕子: 不整脈とメンタルとそのケア. ハートナーシング 秋季増刊「循環器ナースのための不整脈治療とケア」（赤石誠監修）, 313-321, メディカ出版, 大阪, 2010.

丸山　徹: 第 22 章: 内分泌系. 生理人類士入門 （生理人類士認定委員会編）, pp121-124, 国際文化印刷, 東京, 2010.

（2）Co-author

2. 原著

A. 学会機関誌等論文

（1）First author

Nagano J, Kakuta C, Motomura C, Odajima H, Sudo N, Nishima S, Kubo C: The parenting attitudes and the stress of mothers predict the asthmatic severity of their children: a prospective study. Biopsychosoc Med 4:12, 2010.

眞﨑義憲, 藤村直美, 中山博子, 戸田美紀子, 松園美貴, 田中朋子, 福盛文恵, 山口祥子, 一宮　厚, 丸山　徹, 永野　純, 入江正洋, 上園慶子: インフルエンザ流行状況確認体制の構築と運用による学内インフルエンザ感染拡大阻止の経験と今後の展望, 全国大学保健管理協会機関誌 CAMPUS HEALTH, 48(2), pp121-126, 2011. 3.

（2）Co-author

Ariyoshi K, Maruyama T, Odashiro K, Akashi K, Fujino T, Uyesaka N: Impaired erythrocyte filterability of spontaneously hypertensive rats. Circ J 74: 129-136, 2010.

Nakaji G, Fujihara M, Fukata M, Yasuda S, Odashiro K, Maruyama T, Akashi K: Open-loop, clockwise QT-RR hysteresis immediately before the onset of torsades de pointes in type 2 long QT syndrome. J Electrocardiol 43: 261-263, 2010.

Yasuda S, Hiramatsu S, Odashiro K, Maruyama T, Tsuji K, Horie M: Letters: A family of hereditary long QT syndrome caused by Q738X HERG mutation. Int J Cardiol 144: 69-72, 2010.

中司　元, 藤原昌彦, 深田光敬, 安田潮人, 小田代敬太, 丸山　徹, 赤司浩一, 馬場園明: 不整脈疾患におけるホルター心電図に対するイベントレコーダーの費用対効果分析. 心電図 30: 216-224, 2010.

Nakata A, Takahashi M, Irie M, Ray T, Swanson NG: Job Satisfaction, Common Cold, and Sickness Absence among White-collar Employees: A Cross-sectional Survey. Ind Health. 49:116-121, 2011.

Nakata A, Takahashi M, Irie M, Swanson NG: Job satisfaction is associated with elevated natural killer cell immunity among healthy white-collar employees. Brain Behav Immun. 24:1268-1275, 2011.

Nisa H, Kono S, Yin G, Toyomura K, Nagano J, Mibu R, Tanaka M, Kakeji Y, Maehara Y, Okamura T, Ikejiri K, Futami K,

Maekawa T, Yasunami Y, Takenaka K, Ichimiya H, Terasaka R: Cigarette smoking, genetic polymorphisms and colorectal cancer risk: the Fukuoka Colorectal Cancer Study. BMC Cancer 10:274, 2010.

Uchida K, Kono S, Yin G, Toyomura K, Nagano J, Mizoue T, Mibu R, Tanaka M, Kakeji Y, Maehara Y, Okamura T, Ikejiri K, Futami K, Maekawa T, Yasunami Y, Takenaka K, Ichimiya H, Terasaka R: Dietary fiber, source foods and colorectal cancer risk: the Fukuoka Colorectal Cancer Study. Scand J Gastroenterol. 45:1223-31, 2010.

Babazono A, Kuwabara K, Hagiihara A, Nagano J, Ishihara R: Do Interventions to Prevent Lifestyle-Related Diseases Reduce Healthcare Expenditures? A Randomized Controlled Clinical Trial. J Epidemiol 21: 75-80, 2011.

B. 紀要等論文

（1）First author

入江正洋, 福盛英明: 大学生を対象としたストレス負荷とリラクセーション誘導による唾液アミラーゼ活性の変化. 健康科学, 33: 27-32, 2011.

入江正洋, 小島　恵, 森　恭子: 事務系企業集団を対象とした職業性ストレス関連事項, 生活習慣と唾液アミラーゼ活性に関する検討. 健康科学, 33: 33-38, 2011.

入江正洋, 小島　恵, 森　恭子: 唾液アミラーゼ活性の長期的個人内変動と主観的ストレスとの関係. 健康科学, 33: 39-45, 2011.

（2）Co-author

深田光敬, 藤原昌彦, 中司　元, 安田潮人, 小田代敬太, 丸山　徹, 赤司浩一: さまざまな致死的合併症を認めた高度肥満者の一例. 健康科学 32: 109-114, 2010.

Fujimura N, Masaki Y, Masuoka K: Experience with individual receipt confirmation system and the university primary mail service, SIGUCCS '10 Proceedings of the 38th annual fall conference on SIGUCCS, pp66-70. 2010.12.

3. 総説

（1）First Author

入江正洋: 急性ストレスと心血管障害～自律神経系を中心としたストレス反応と生理学的指標を含めて～. 健康科学, 33: 1-12, 2011.

丸山　徹, 安田潮人: メタボリックシンドロームとの関わりでみた非弁膜症性心房細動. 健康科学 32: 1-10, 2010

丸山　徹, 坂口英継: コンピューターシミュレーションと不整脈. 循環器内科 67: 688-694, 2010.

丸山　徹: スパイラルカオスからみた細動および除細動. 心電図 30: 306-310, 2010.

4. 資料・報告書

（1）First Author

上園慶子, 眞﨑義憲, 大柿哲朗, 熊谷秋三, 齊藤篤司, 成水貴代: 大学職員に対する運動教室の効果 －第一報－. CAMPAS HEALTH 48(1):158-159, 2011. 2.

上園慶子: 4.職域の成人志願者に対する運動療法の効果. 厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患･糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業 大規模コホートを用いた生活習慣病の一次予防のための運動量策定に関する運動疫学研究 平成 22 年度 総括･分担報告書, 福岡市, 2011. 3. pp.35-38.

眞﨑義憲, 大柿哲朗, 上園慶子, 丸山　徹:うきは市食育プロジェクト　健康と食習慣, 生活習慣に関するアンケート調査報告書, 2011. 3.

眞﨑義憲, 大柿哲朗, 上園慶子, 丸山　徹, 濱田綾子:うきは市 食育報告書, 2011. 3.

5. 学会・研究会発表

（1）First Author

上園慶子, 眞﨑義憲, 大柿哲朗, 熊谷秋三, 齊藤篤司, 成水貴代: 大学職員に対する運動教室の効果 －第一報－. 第 48 回全国大学保健管理研究集会, 千葉市, 2010.10.21.

一宮　厚, 福盛英明: 大学生のコミュニケーションの経年変化質問紙調査による新入時と4年生の違い. 第48回全国大学保健管理研究集会, 千葉市, 2010.10.20-21.

Maruyama T, Odashiro K, Akashi K, Fujino T, Uyesaka N: Impaired erythrocyte filterability in spontaneously hypertensive rats. 5th Pacific Rim Conference on Rheology August 1-6, 2010, Sapporo.

入江正洋: 労働環境の変化と職場のメンタルヘルス. 第51回日本心身医学会総会, 仙台市, 2011. 6.26-27.

入江正洋, 小島　恵, 石川百合枝, 森　恭子: 新入社員の入社後の唾液中アミラーゼ濃度の変化. 第20回日本産業衛生学会産業医・産業看護全国協議会, 札幌市, 2011.10.13-16.

福盛英明, 吉武清實, 山中淑江, 大島啓利, 苫米地憲昭, 齋藤憲司, 池田忠義, 高野　明, 内野悌司, 峰松　修: 学生相談体制充実のための「学生相談機関発展段階表」の開発, 日本学生相談学会第 27 回大会（岩手大学）, 2010. 5. 9.

眞﨑義憲, 藤村直美, 中山博子, 戸田美紀子, 松園美貴, 田中朋子, 福盛文恵, 山口祥子, 一宮　厚, 丸山　徹, 永野　純, 入江正洋, 上園慶子: インフルエンザ流行状況確認体制の構築と運用による学内インフルエンザ感染拡大阻止の経験と今後の展望, 第 48 回全国大学保健管理研究集会, 千葉市, 2010.10.21.

（2）Co-author

村谷博美, 笹栗俊之, 土橋卓也, 上園慶子: 夜勤業務従事者にみられる高血圧の特徴. 第 33 回日本高血圧学会総会, 福岡, 2010.10.15.

Nishi N, Nagano J, Grant EJ, Sugiyama H, Sakata R, Hsu WL, Kasagi F, Suyama A, Ozasa K, Kodama K: Successful completion of a two-phase pilot study for a mail survey in the Life Span Study cohort: Phase 1 for validity and reliability and Phase 2 for feasibility. Technical Report for MS 12-10, Radiation Effects Research Foundation, 2011.

野村桃子, 眞﨑義憲, 井上美緒, 高尾祐果, 豊田千寿子, 中山博子, 戸田美紀子, 松園美貴, 田中朋子, 一宮　厚, 丸山　徹, 入江正洋, 永野　純, 上園慶子: 大学教職員における生活習慣改善プログラムの有効性の検討, 第 48 回全国大学保健管理研究集会, 千葉市, 2010.10.21.

中山博子, 眞﨑義憲, 戸田美紀子, 松園美貴, 一宮　厚, 丸山　徹, 入江正洋, 永野　純, 福盛英明, 田中朋子, 福盛文恵, 山口祥子, 上園慶子: 肥満学生対象の健康支援プログラムの有効性について－2 年間の追跡結果から－, 第 48 回全国大学保健管理研究集会, 千葉市, 2010.10. 21.

Fujimura N, Masuoka K, Masaki Y: Experience with the University Primary Mail Service and Individual Receipt Confirmation System, SIGUCCS '10, The 38th annual fall conference on SIGUCCS, Norfolk, USA, 2010.10.25.

6. 講演・ワークショップ・シンポジスト・コメンテーター等

上園慶子（座長）: セッション III「ABPM」(一般発表,8~10). 第 12 回時間循環血圧研究会, 東京都, 2010.7.10.

上園慶子（座長）: 「健康支援 3」(一般発表 B-3-1~B-3-7). 第 48 回全国大学保健管理研究集会, 千葉市, 2010.10.17.

上園慶子（座長）: 講演 1「生活習慣病と体力」澤田 亨. 第 12 回日本健康支援学会学術集会プレカンファランス, 福岡市, 2011. 2.18.

上園慶子（座長）: 教育講演 1「認知症の実態とその予防 : 久山町研究」清原 裕. 第 12 回日本健康支援学会学術集会, 福岡市, 2011. 2.20.

一宮　厚（座長）: 第 25 回日本老年精神医学会, 熊本市, 2010. 6. 24-25.

一宮　厚（座長）: 第 32 回全国大学メンタルヘルス研究会, 東京都, 2011. 1. 25-26.

一宮　厚（座長）: 第 12 回日本健康支援学会, 福岡市, 2011. 2. 19-20.

丸山　徹（ワークショップ）: インスリン抵抗性心筋症: 拡張型心筋症との関連において. 第 55 回 日本透析医学会 ワークショップ 7「透析患者の心不全を考える」 June 18-20, 2010, 神戸.

丸山　徹（講演）: 健康に関する諸問題: 免疫力を高めるには. 平成 21 年度大川市民大学講座 Feb 13, 2010, 大川.

丸山　徹（司会）: 心室性不整脈の非薬物的治療とその後の管理 第 242 回福岡心臓疾患治療談話会 Feb 19, 2010, 福岡.

丸山　徹（講演）: インスリン抵抗性心筋症 −新たな概念？ 独立疾患？ 随伴病態？− 第 8 回南東京腎と糖尿病研究会 April 8, 2010, 東京.

丸山　徹（講演）: ICD の近未来 NPO 日本 ICD の会設立 10 周年記念講演会 Nov 7, 2010, 福岡.

永野　純（シンポジスト）: 母親のストレス, 養育態度と子供の喘息の経過との関連について. 第 26 回日本ストレス学会, 福岡市, 2010.11. 5.

入江正洋（シンポジスト）: 労働環境の変化と職場のメンタルヘルス. 第51回日本心身医学会総会, 仙台市, 2011.6.26-27.

福盛英明（助言者）: 九州地区メンタルヘルス研究協議会, 分科会, 沖縄, 2010.11.11-12.

福盛英明（座長）: 日本学生相談学会第 27 回大会, 一般演題口述発表, 岩手大学, 盛岡, 2010. 5. 8 -10.

福盛英明（座長）: 日本人間性心理学会第 29 回大会, 一般演題口述発表, 熊本大学, 熊本, 2010. 9. 24-26.

福盛英明（司会）: 日本心理臨床学会第 29 回（秋季）大会, 一般演題口述発表, 東北大学, 仙台, 2010. 9. 3- 5.

眞﨑義憲（演者）: 豊かな長寿社会をめざす講演会, 食の安全・安心推進室, 糸島市, あごら, 2011. 3.13.

眞﨑義憲（ファシリテーター）: 福岡県教育委員会, 学校活性化人材育成事業 スーパーセミナー合宿, 2010. 8. 18-20.

7. 論文査読

氏　名	雑　誌　名　な　ど	編　数
上園　慶子	Clinical & Experimental Hypertention	1
	CAMPUS HEALTH	2
一宮　厚	九州精神神経学	1
丸山　徹	Circulation Journal	2
	J Exp Clin Cardiol	3
	膜	1
入江　正洋	RESPIRATION	1
	産業ストレス	1
	健康支援	2
永野　純	Biopsychosocial Medicine	2
	健康支援	2
	Journal of Epidemiology	1
福盛　英明	日本学生相談学会	1
	日本感情心理学会	1
眞﨑　義憲	日本健康支援学会雑誌	2

8. その他（民間商業雑誌, 新聞等）

丸山　徹: 健康情報の活用. キャンパスヘルス 34: 4, 2010.

丸山　徹: 上坂伸宏先生を悼む. 日本バイオレオロジー学会誌 24: e26-27, 2010.

3. 研 究 助 成 金

●政府官公庁研究助成金

研究テーマ: 行動科学に基づく大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラム開発

研究代表者: 橋本公雄

共同研究者: 根上　優, 飯干　明, 長岡良治, 山本教人, 杉山佳生, 西田順一, 磯貝浩久, 正野知基, 柿山哲治, 内田若希, 角南良幸

補 助 金 名: 文部科学省研究補助金基盤研究（B）

課 題 番 号: 21300222

研　究　費: 572 万円（直接経費 440 万円, 間接経費 132 万円）（3 年継続, 2 年目）

内　容:

本研究は九州の多領域にまたがる研究者で大学体育授業改善を意図した研究プロジェクトを立ち上げ, 第二期の大型科研費（B）の採択に基づくものである。平成 22 年度は各自が新しい授業研究に取り組み, 行動変容技法を取り込んだ研究を進めた。研究成果は報告書としてまとめた。また, これまでの研究成果を書籍として発刊するための準備に着手し, 九州大学から P&P 研究助成金（学術図書刊行助成）の補助金 100 万円を受けた。

研究テーマ: 野外教育によるコミュニケーションスキルの獲得—プログラム開発と因果モデルの構築—

研究代表者: 柳　敏晴

共同研究者: 橋本公雄, 西田順一, 中島俊介, 堤　俊彦, 藤永　博, 渡壁史子, 榮樂洋光, 松本裕史

補 助 金 名: 文部科学省研究補助金基盤研究（B）

課 題 番 号: 19300212

研　究　費: 550 万円（直接経費 420 万円, 間接経費 370 万円）（3 年継続, 1 年目）

分　担　金: 32.5 万円（直接経費 25 万円, 間接経費 7.5 万円）

内　容:

本研究は, 青少年の非社会的行動の増加を予防することを意図し, コミュニケーションスキルの獲得に焦点を当てた効果性の高い野外教育プログラムを開発するとともに, 野外プログラムにおける複数の関連要因から効果の媒介変数を特定し, 因果モデルの構築を行うことも目的としている。本年度検討した研究内容は, 平成 21 年度に引き続き心理・社会的要因を媒介変数とする運動に伴うメンタルヘルス効果モデルの検証であり, 子どもの組織キャンプを通して, コミュニケーションスキルを高めるため, ソーシャルサポートを用いた介入モデルの検討を行った。

研究テーマ: スポーツ選手における心理的ウェルビーイング向上の因果モデルの構築

研究代表者: 橋本公雄

共同研究者: 西田順一, 内田若希, 根上　優

補 助 金 名: 文部科学省研究助成金基盤研究（挑戦的萌芽研究）

課 題 番 号: 22650147

研　究　費: 100 万円（3 年継続, 1 年目）

内　容:

本研究はスポーツドラマチック体験によるポジティブ特性を介した心理的ウェルビーイング向上の因果モデルを構築することを目的として行われるものである。平成 22 年度は心理的ウェルビーイング変数（QOL, 自己概念, 自尊感情, メンタルヘルスなど）をどのように捉えるかを議論するするとるとともに, これらを調査するための調査票の骨子を検討した。研究成果は中間報告書としてまとめた。

研究テーマ: リズム体操の動きの習熟に伴うポジティブ感情の変化とそのメカニズム

研究代表者: 坂下玲子

共同研究者: 橋本公雄

補 助 金 名: 文部科学省研究助成金基盤研究（C）

課 題 番 号: 22500547

研　究　費: 104 万円（直接経費 90 万円, 間接経費 24 万円, 3 年間の初年度）

分　担　金: 13 万円（直接経費 10 万円, 間接経費 3 万円, 3 年間の初年度）

内　容:

本研究は特に心理学的仮説に着目し，リズム体操の動きの習熟も学習意欲や運動継続に関係すると推察されることから，「リズム体操」における動きの習熟に伴うポジティブ感情の変化とそのメカニズムを明らかにすることを目的としている。これまで用いられている身体運動特有の感情尺度（MCL-3, MCL-S.1, MCL-S.2）をもとに，快感情，リラックス感，満足感，不安感等の項目に加え，喜び（joy），興味（interest），誇り（pride），愛（love）など（Fredrickson, 1998），長期的な活動に対応するポジティブ感情の項目を検討し，ポジティブ感情尺度作成に向けた研究を進めた。

研究テーマ：多点観察による身体活動・運動量，体力と健康事象に関する運動疫学研究

研究代表者: 熊谷秋三

共同研究者: 清原　裕，上園慶子，内藤義彦，長野真弓，山津幸司，畑山知子

補 助 金 名: 文部科学省科学研究補助金基盤研究（A）（平成 22-26 年度）

課 題 番 号: 22240073

研　究　費: 1,534 万円（直接経費 1,180 万円，間接経費 354 万円）（5 年継続, 1 年目）

内　容:

わが国の生活習慣病予防研究のみならず介護予防研究領域においても，運動疫学研究に基づく証拠は不足している。欧米では，生活習慣病の罹患率および死亡率，さらにうつ，認知症や認知機能低下への身体活動・運動の影響に関するメタ分析などにより，運動の有効性が実証されつつある。しかしながら，多くの疫学研究では，運動などの暴露指標の測定はベースライン調査での 1 回の測定成績に基づいてのみ解析されている場合が殆どであり，暴露指標の経時的変化（多点観察）を独立変数とした疫学研究は，その多大な労力のために世界的にも殆ど報告されていない。本研究は，各種のヘルアウトカム（うつ状態，認知機能低下，メタボリックシンドロームなど）の発現に及ぼす多点観察された身体活動・運動の関連性について前向き研究手法を用い検討する大規模運動疫学研究である。平成 22 年度は，3 つのコホート研究の構築を行った。久山研究は 40 歳以上の全町民約 3500 人）を対象とした 50 年に及ぶ生活習慣病の罹患および認知症発現をアウトカムとした世界的な前向きコホート研究である。ここでは，身体活動・運動量の調査を実施した。大宰府研究は，65 歳以上の地域在住高齢者を対象とした前向きコホート研究である。アウトカムは，メンタルヘルス（うつ，閉じこもり，認知機能）である。身体活動・運動量は，三軸加速度計を用いて調査している。現在までに約 800 名の調査が終了した。職域研究では，2 つの会社を対象としたコホートの設定を継続している。メインアウトカムは，メタボリックシンドロームとうつ症状である。既に，700 名以上の調査が終了している。コホート設定が終了している場合は，繰り返し測定を継続すると共にアウトカム評価指標の継続的な収集を行っている。全てのコホート設定はスムーズに進んでおり，当初の研究計画以上の成果が上がっており，極めて良好であると自己評価している。

研究テーマ：うつ・代謝障害のバイオマーカーとしての血清脳由来神経栄養因子に関する運動疫学研究

研究代表者: 熊谷秋三

共同研究者: 一宮　厚，諏訪雅貴

補 助 金 名: 文部科学省科学研究補助金挑戦的萌芽研究（平成 22-24 年度）

課 題 番 号: 22650164

研　究　費: 100 万円（直接経費 100 万円，間接経費 0 円）（3 年継続, 1 年目）

内　容:

神経栄養因子は神経細胞や標的細胞で発現し，神経の成長やネットワークの形成，修復，その他の細胞の成長などに働く自己分泌・傍分泌物質であるが，特に脳由来神経栄養因子（BDNF;Brain derived neurotrophic factor）は，脳の可塑性に影響する神経栄養因子である以外に，節食抑制やインスリン感受性調節機能を有する。この BDNF は血液脳関門を通過することに加え，末梢でも産生されることから，運動によるうつ症状および糖代謝能改善のバイオマーカーとなりうる可能性がある。申請者は，文部科学省科学研究費（平成 20・21 年度）の補助を受けて「脳由来神経栄養因子の運動生理学的意義に関する研究」を遂行し，運動の影響を含めメンタルヘルスおよび糖・脂質代謝能のバイオマーカーとしての意義を明らかにした。

しかし，一般集団を対象とした前向き調査は行っていないことから，その因果関係は不明のままであった。そこで，本研究では，血清 BDNF とうつ傾向や糖･脂質代謝能のバイオマーカーとしての意義に関して，身体活動や運動の影響を含め，運動疫学研究の観点から前向き研究デザインを用い検討を加えるものである。平成 22 年度は，成人男性の血清 BDNF とうつ状態およびメタボリックシンドローム発現の関連性に関する前向き疫学研究を実施するためのコホート作成を行った。具体的には，約 700 名の男女勤労者を対象とした調査を修了した。この数値は，当初の計画の約 2 倍の対象者数である。また，身体活動・運動量は全対象に関して三軸の加速度計を用い評価している。全てのコホート設定はスムーズに進んでおり，当初の研究計画以上の成果が上がっており，極めて良好であると自己評価している。

研究テーマ: 大規模コホートを用いた生活習慣病の一次予防のための運動量策定に関する運動疫学研究

研究代表者: 熊谷秋三

共同研究者: 上園慶子，眞﨑義憲，長野真弓，山津幸司，内藤義彦，清原　裕

補 助 金 名: 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業）（平成 21-23 年度）

課 題 番 号: H21-循環器等（生習）- 一般-008

研　究　費: 1,100 万円（直接経費 1,000 万円，間接経費 100 万円）（3 年継続の 2 年目）

内　容:

1989 年に厚生省によって「健康づくりのための運動所要量」が策定された当時，所要量の策定には危険因子と運動の関係を調査した横断的調査による研究成績が用いられた。その後 2006 年に作成された「新しい健康づくりのための運動基準・指針」では，「健康づくりのための身体活動・運動量の基準値」や「健康づくりのための最大酸素摂取量の基準値」作成に，多くの研究が参考にされたが，その多くは欧米人を対象とした疫学研究であり，日本人に関する論文は数本で参考程度に留まっている。かかる背景を踏まえ，九州大学健康科学センターを中心とする運動疫学研究グループは九州大学医学部が主催する「久山町研究」グループとの共同事業として久山コホート，および他の職域コホートを用いた大規模運動疫学研究を計画するに至った。本研究では，久山町の一般地域住民を対象に，身体活動・運動および体力指標としての握力と総死亡率，疾患別死亡率および罹患率との関連性に関する大規模疫学前向き研究を行うと共に，新たに加速度計によって評価された身体活動・運動量と糖尿病やメタボリックシンドローム(MS)の発現に関する 2 年間の前向き調査に加え，さらに運動による介入研究を施行し，生活習慣病の一次予防に向けた実践研究を展開する。最新の久山町研究の成績で，糖尿病はアルツハイマー病，がん，心疾患の有意な危険因子であることが判明し，糖尿病対策が最も急務であるとことが実証されている。さらに，職域においては，信頼性の高い身体活動量評価法である JALSPAQ（質問紙法）に加え加速度計を用い，生活習慣病やその危険因子との関連性に関する 2 年間の前向き研究の継続と，IT 環境などを駆使した運動を中核とした非対面式生活習慣プログラムによる介入効果を併せて検討する。これらの成績より，生活習慣病の一次予防に関する身体活動・運動量の基準値策定を目指すものである。

研究テーマ: アルツハイマー病の危険因子の解明と予防に関する大規模ゲノム疫学研究

研究代表者: 清原　裕（九州大学医学研究院）

共同研究者: 神庭重信，岩城　徹，中別府雄作，久保充明，城田知子，熊谷秋三

補 助 金 名: 厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）（平成 20-24 年度）

課 題 番 号: H20-認知症-一般-004

研　究　費: 5,415 万円（直接経費 4,845 万円，間接経費 570 万円）（5 年継続の 3 年目）

内　容:

わが国では，高齢人口が急速に増加し，高齢者の精神疾患として最も頻度の高い認知症が大きな医療・社会問題となっている。認知症の予防対策を講じるには，地域住民中の認知症の実態を把握し，その危険因子を明らかにする必要がある。しかし，現在にところ，AD の危険因子はほとんど明らかにされていない。福岡県久山町では，1985 年から 65 歳以上の高齢住民を対象に，世界で最も精度の高い認知症の疫学調査が進行中である。また，同町では

2002 年より生活習慣病のゲノム疫学研究が開始され，その基盤が整備されている。本研究では，老年期認知症の疫学調査において，AD をはじめ認知症の有病率・発症率の時代的変化を明らかにし，危険因子・防御因子を包括的な健診成績の中より明らかにする。そしてゲノムワイド研究およびマイクロアレイ解析によって AD の遺伝的危険因子を特定する。さらに，以上の結果を踏まえ，食事・運動の面からの介入試験を行い，その予防手段の確立を図る。本研究によって，地域住民における AD をはじめとする認知症の有病率・発症率の時代的推移と現状，および高齢者全体における日常生活動作（ADL）および生活の質（QOL）に及ぼす認知症の影響が明らかとなる。また運動，食事性因子，高血圧・糖尿病などの症候因子を含む包括的な健診を基盤とした追跡調査とわが国のトップレベルのゲノム解析によって，認知症の危険因子が解明されると考えられる。その成果は，認知症の予防手段の確立を通して，国民の保健・医療・福祉の向上をもたらし，とくに高齢者医療費の削減につながると期待される。

研究テーマ: 印刷教材と携帯電話フィードバッグシステムをも用いた食生活の改善及び運動指導プログラムの開発に関する研究

研究代表者: 山津幸司（佐賀大学文化教育学部）

共同研究者: 熊谷秋三，佐藤　武，小西史子

補 助 金 名: 厚生労働科学研究費補助金（ 糖尿病戦略研究事業）（平成 21-23 年度）

課 題 番 号: H21-糖尿病等-若手-006

研　究　費: 450 万円（直接経費 450 万円，間接経費 0 円）（3 年継続の 2 年目）

内　容:

近年，2 型糖尿病やメタボリックシンドロームなどの生活習慣病保有者の増加が国家的な問題となっている。その対策のひとつを提案することを目指し，本研究の目的は，後述する先行研究で確立した非体面行動療法による生活習慣介入の方法論を応用し，2 型糖尿病やメタボリックシンドロームの予防に適用させることである。本研究は，平成 21 年度からの 3 ヵ年で遂行される。初年度（平成 21 年度）は，糖尿病やメタボリックシンドロームの予防に有効とされる生活習慣（特に食と身体活動）のエビデンスをレビューし，その結果を受けて紙媒体（小冊子）の教材を作成する。2 年目の平成 22 年度には，初年度作成の教材を用いた生活習慣への介入を実施するとともに，紙媒体のコンテンツと同時に活用する携帯電話による個別フィードバックシステムを構築する。最終年の平成 23 年度には，個別フィードバックシステムの生活習慣改善プログラムを用い職域や地域の対象者への介入を試み，より完成度の高いプログラムを構築する。初年度（21 年度）には食と身体活動を中心とした生活習慣介入のための印刷教材（小冊子）を作成し，次年度（22 年度）に本教材を用いた生活習慣改善プログラムを開発しその有効性を検討する。同時に，本印刷教材の後に用いる携帯電話による個別フィードバックシステムを開発し，最終年度（23 年度）に地域または職域にて印刷教材と個別フィードバックシステムを用いた生活習慣改善プログラムの有効性を明らかにする。研究代表者の山津は，これまで情報技術（IT）を活用した非対面生活習慣変容プログラムを開発し，肥満，高血圧および高脂血症での有効性を報告してきた（肥満研究, 2005；糖尿病, 2005；行動医学研究, 2006；Behaviour Research and Therapy, 2007）。その独自な点は，問診の解析とそれに基づく個別アドバイスの提供をコンピュータ化による通信指導であった。通信指導とすることで，これまでの対面型指導で対照とするのが難しかった層（有職者など）を拡大でき，またアドバイスの自動化により費用対効果に優れた集団戦略となりうる方法論のひとつを確立した。共同研究者の熊谷らは，九州大学が誇る世界の久山町コホート研究にも参画しており，今後，地域住民の生活習慣改善に向けた取り組みも行うこととなっている。

研究テーマ: 精神的健康度とメタボリックシンドロームとの関連—血清 BNF と身体活動の役割

研究代表者: 西地令子（聖マリア学院大学）

共同研究者: 熊谷秋三

補 助 金 名: 文部科学省科学研究補助金，基盤研究(C)（平成 20-22 年度）

課 題 番 号: 20500638

研　究　費: 78 万円（直接経費 60 万円，間接経費 18 万円）（3 年継続の 3 年目）

内　容:

本研究では，精神的健康度とメタボリックシンドロー

ムの関連性における，血清 BDNF と身体活動の役割を明確にすることによって, BDNF のメカニズムを解明する基盤とするだけでなく，メタボリックシンドロームの進行が精神的健康度によっても影響を明らかにするものである。これらの本研究の知見は，メタボリックシンドロームにおける身体活動の意義を一層明確にするだけでなく，精神的健康への早期アプローチがメタボリックシンドロームの改善に有効であることを実証することによって，その早期改善策をさらに確立する意義をもつと考える。

研究テーマ: 精神機能と生活習慣行動特性およびメタボリックシンドロームとの関連性の検討

研究代表者: 長野真弓（京都文教大学）

共同研究者: 熊谷秋三

補 助 金 名: 文部科学省科学研究補助金，基盤研究 (C)（平成 20-22 年度）

課 題 番 号: 20500598

研　究　費: 104 万円（直接経費 80 万円，間接経費 24 万円）（3 年継続の 3 年目）

内　容:

本研究では，精神機能や感性（刺激に対する心の働き）が，どのような生活習慣行動特性に関与しているか，また，それがメタボリックシンドローム（MS）の出現と関連しているか否かを明らかにすることを主たる目的とする。具体的には，（1）新規に診断された未治療・未介入の糖尿病患者群と年齢をマッチさせた一般健常者群の間で，精神健康度やストレス対処能力など，精神機能及び個人の感性に関わる指標と生活習慣行動との関連性を比較検討すること，（2）個々の対象者群内における精神機能・感性指標と生活習慣行動との関連性を検討すること（3）MS の出現率が著しく高い糖尿病患者群において，精神健康度や感性，生活習慣行動および MS 出現の関連性を検討することを目的とする。最終的には，（1）～（3）の結果を発展させて，各個人の精神状態や感性に配慮した快適性・効果の高い MS の予防・改善プログラムを構築することを視野に入れている。

研究テーマ: 持久走のジョギング（健康走）化に及ぼしたメディア言説の影響に関する研究

研究代表者: 山本教人

補 助 金 名: 文部科学省研究補助金基盤研究（C）

課 題 番 号: 22500580

研　究　費: 65 万円（直接経費 50 万円，間接経費 15 万円）（3 年継続の 1 年目）

内　容:

かつては「持久走」と呼ばれていた鍛錬的色彩の濃い走運動の一形態が，美容や健康づくりを目的とした走運動化（ジョギング化，健康走化）する過程で，メディアがジョギングという新たなスポーツ文化をどのように言説化し関わってきたのかを検討する。

研究テーマ: ネパール人小児の身体活動量および栄養素等摂取量が身体組成の変化に及ぼす影響

研究代表者: 中尾武平

共同研究者: 大柿哲朗，斎藤篤司

補 助 金 名: 文部科学省研究補助金基盤研究（C）

課 題 番 号: 21610026

研　究　費: 130 万円（3 年継続, 2 年目）

内　容:

ネパールの山岳地と都市に居住する小児を対象に，形態計測（身長，体重，皮下脂肪厚，周径囲，生体インピーダンス等），日常生活中の歩数や心拍数の測定，体力測定，栄養素等摂取量に関して，2 年目の調査研究を実施した。平成 22 年度は，従来の測定項目に加えて，足型，足指の筋力などの測定を行った。また，都市部のある小学校では，昨年の測定（平成 21 年 9 月）以降の 1 ヶ月毎の身長と体重の記録を得て，発育発達に関する分析を行っている。

研究テーマ: 大学の学生相談充実における「発展段階モデル」の臨床心理学的研究

研究代表者: 福盛英明

共同研究者: 吉武清實，池田忠義，高野　明，山中淑江，内野悌司，大島啓利，峰松　修

補 助 金 名: 文部科学省研究補助金基盤研究（C）

課 題 番 号: 21530692（平成 21-23 年度）

研　究　費: 130 万円（3 年継続の 2 年目）

内　容:

本研究では、これまでの相談機関の充実の様相と過程について、臨床心理実践を踏まえてコミュニティ心理学の視点から明らかにし、学生相談機関の発展をモデル化し、広く学生相談機関を整備するにあたっての指標や段階を提示することを目的とし、学生相談体制の「学生相談システムの質の保証のための基盤整備」に資する研究と位置づけられる。平成 22 年度は、学生相談機関の発展段階モデルの開発・「学生相談機関発展段階表」の開発を行った。成果として 1) カード化された各取り組みを KJ 法により質的分析をおこなった。その結果、直線的なモデルで説明できるものだけではなく、発展には想定よりもやや複雑なモデルとなることがわかってきた。2) 昨年度に開発した「学生相談機関発展段階表」を改良した。学生相談専門家である研究分担者・研究協力者からなるワーキンググループ・打ち合わせ会でディスカッションを行い、その結果、評価尺度として機能させるより、学生相談機関が自己評価として振り返りシートとして機能させるほうがよい、という結論になり、改良にむけて段階表が作成された。その結果、段階表についてはプロトタイプよりややシンプルな構造となるように工夫された。今年度は「学生相談機関発展段階表」改訂版を用いて、実際にインタビュー調査での使用をおこなう。また、さまざまな学生相談機関の統計指標などのデータと連動させ、考察を行い、本段階表の精度と妥当性を確認する予定である。

研究テーマ: 唾液中アミラーゼを指標としたストレス評価とストレスマネジメントへの応用

研究代表者: 入江正洋

共同研究者: 林　直亨

補 助 金 名: 文部科学省科学研究費補助金, 基盤研究（C）（平成 20-22 年度）

課 題 番 号: 20500599

研　究　費: 91 万円（直接経費 70 万円, 間接経費 21 万円）（3 年継続の 3 年目）

内　容:

大学生に関する研究では, 内田・クレペリン検査を用いた計算ストレス負荷と自律訓練法によるリラクセーション誘導が, 唾液アミラーゼ活性にどのような影響を及ぼすのかを, 対象者数を増やして比較検討した。総計 70 名（男性 46 名, 女性 24 名）の解析では, いずれも有意な変化はみられなかったが, リラクセーションによるストレス低減が唾液アミラーゼ活性の低下に結びつく傾向が認められた。

事務系企業社員に関する研究では, 新入社員 39 名（男性 26 名, 女性 13 名）を対象として, 入社日, その 3 日, 8 日後の 3 回, 唾液アミラーゼ活性を測定するとともに, POMS による情動の変化について検討した。アミラーゼは入社後に有意に低下し, 初回においてアミラーゼと POMS の疲労との間に有意な正の相関がみられた。

また, 唾液アミラーゼ活性の個人内変動に関して, 管理職の社員 1 名（男性, 非喫煙者）を対象として, 1 年 3 ヶ月の長期にわたって, 平日のアミラーゼの縦断的測定（391 回）を行った。同時に, 主観的ストレス度の評価と血圧, 心拍数の測定も実施した。その結果, アミラーゼは冬や春の多忙となる時期に高くなり, 自覚的ストレス度とアミラーゼとの間に弱い正の相関がみられた。

全体の研究を通して, 唾液アミラーゼ活性は鋭敏なストレス指標とは言い難いように解された。しかし, 個人で継続的かつ頻回に測定を繰り返した場合, 唾液アミラーゼ活性は多少なりともストレス評価指標になり得ることが窺われ, その評価では多忙となるような時期や季節なども考慮する必要があるものと思われた。

研究テーマ: 計画的行動理論を用いた運動の継続化における運動強度自己選択の有効性

研究代表者: 斉藤篤司

共同研究者: 橋本公雄

補 助 金 名: 科学研究費補助金挑戦的萌芽研究（平成 21- 23 年度）

課 題 番 号: 21650162

研　究　費: 330 万円

内　容:

健康・体力づくりのための運動には継続が不可欠である。従来の運動処方では効果や効率を重視したため, 運動強度や時間, 頻度といった量的側面での処方がなされ, 継続につながりづらいというデメリットがあった。これに対し, 我々は運動者が自ら選択したペースでの運動により, 「快」や「満足感」などのポジティブな感情を増加させることを示し, このような運動者の欲求や態度を含

めた運動処方の必要性を呈示してきた。しかし，ポジティブな感情がどのように行動に結びつくかというモデルあるいは理論に欠けていた。そこで，計画的行動理論に基づき，自己選択ペースによる走行が「態度」や「コントロール感」にどう影響するかについて検討している。また，実験室内で自己選択ペースをどのようにコントロールするからこれまで課題であったが，スピードシンクロトレッドミルという新たな装置の導入により，より実走に近い形で研究を行うことか可能となった。自己選択強度での運動は，「快」を高めることにより，運動に対する好意的な「態度」を形成・強化し，「快」が高まり，「行動の統制感」が高め，結果として，行動および行動意図を生起する可能性を高める，という仮説のもと，検証してきた。しかし，自己選択ペースの運動では感情の変化はむしろ小さく，運動強度や外的環境に対し，生理的に変化させながら，感情は変化させず，ニュートラルな状態で運動していることが示された。

研究テーマ: 体育授業におけるノンバーバルスキル獲得・向上・発達プロセスの解明

研究代表者: 杉山佳生

補 助 金 名: 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（平成 21-23 年度）

課 題 番 号: 21500564

研　究　費: 78 万円（直接経費 60 万円，間接経費 18 万円）（3 年継続の 2 年目）

内　容:

本研究の目的は，学校体育の授業を通じて，非言語的なコミュニケーションスキル（ノンバーバルスキル）がどのように獲得され，向上するのかを，発達的な視点を取り入れて検討することである。2 年目は，ノンバーバルスキルを測定する尺度を構築するとともに，ノンバーバルスキルの発達を規定する要因を探索した。

尺度の構築に際しては，大学生に対し調査を行い，尺度の信頼性および妥当性を検討した。また，本尺度によって測定されたノンバーバルスキルの獲得の程度と，体育授業に対する態度や授業での経験との関係を分析し，どのような体育関連要因がノンバーバルスキルの発達に影響しているのかを検討した。

研究テーマ: 運動選手が風邪を引きやすい理由の解明

研究代表者: 林　直亨

共同研究者: 永富良一（東北大学）

補 助 金 名: 科学研究費補助金挑戦的萌芽研究（平成 21- 22 年度）

課 題 番 号: 21650180

研　究　費: 50 万円（直接経費 50 万円）（2 年継続の 2 年目）

内　容:

低温環境下での身体運動という環境への暴露の増加が，風邪への感染リスクを高めていると予想される。運動選手に風邪の罹患が多いことが，トレーニング時の上気道の血流量低下と関連するとの仮説を検証するために，運動時および運動後に上気道部の血流が低下するかどうかについて検討した。昨年度は，心拍数 100～140 拍／分相当強度の自転車エルゴメータ運動時には上気道部の血流はほとんど変化しないことを観察したことから，今年度は疲労困憊に至る強度での運動時の上気道部の血流を観察した。健常成人男女 11 名に，自転車エルゴメータ運動を疲労困憊にいたるまで行わせた。運動前および運動終了 5 分, 10 分後の上気道部の血流をレーザースペックルフローグラフィーによって計測した。その結果，上気道部の血流は運動前値と比較して，運動終了後 10 分後まですることはなかった。このことから,本研究では血流減少と上気道感染との関連は明示されなかった。

本研究の限界としては，高強度運動時に上気道部の血流を観察することが極めて困難であるため，運動後の観察にとどまる点，また呼吸に伴う気道部温度の影響も微弱ではあるものの観察された。今後この影響を排除して検討する必要がある。

研究テーマ: 関節リウマチの予後に対するストレス・パーソナリティの影響についての縦断研究

研究代表者: 永野　純

補 助 金 名: 科学研究補助金 基盤研究(C)

課 題 番 号: 21590765

研　究　費: 65 万円（3 年継続の 2 年目）

内　容:

特定の精神的ストレス・パーソナリティが関節リウマチの病状に影響するかどうかを検証する前向き研究であ

る。とくに関心があるのは，リウマチ発症の危険因子としての報告がある，「陰性感情を合理化し，感情的になることを抑圧する」ことを特徴とする「タイプ 5」パーソナリティである。

本年度は，まず，データの電子化，データクリーニングを終えた。ついで，統計解析に着手した。リウマチの病状の総合的指標として，追跡時点における機能障害（class）を目的変数とした重回帰分析を行った。一連のモデルには，すべてベースライン時点における機能障害を説明変数として含めた。まず，ベースライン時点における様々な臨床的要因（性・年齢を含む）について，stepwise 法による変数選択を試みたところ，血清 CRP 値，病期（stage），関節外合併症の数，ステロイド薬使用，抗リウマチ薬使用，および教育歴が有意な変数として選択された。生活習慣要因について同様に検討したところ，明らかな関連はみとめなかった。心理社会的要因では，ストレッサーとして，観察期間中のライフイベントについて検討したが肯定的イベント，否定的イベントのいずれも追跡時点の機能障害と関連していなかった。パーソナリティ要因（ストレス調査票）の中では，唯一タイプ 5 に相当する「葛藤・欲求不満の合理化」のみが追跡時点での機能障害と関連していた。この関連は，上記で有意であった臨床的要因を補正しても変わらなかった。

●研究助成金

研究テーマ: 顔面皮膚血流の変化からおいしい顔を探索する試み

研究代表者: 林　直亨

補 助 金 名: やずや食と健康研究所研究助成金

研　究　費: 100 万円

内　容:

おいしいものを食べると，幸福感を感じるように，摂食は情動に変化をもたらす。幸福感は情動の 1 つであり，この情動は表情として外部へ発露する。このような情動に伴う表情の変化は，文化や人種を超えて共通であると，ダーウィンは指摘している。味覚に対する表情の特異性はヒトの表情変化が，味覚を伝達する道具としての役割を果たしていることを示唆する。と同時に，個人の表情を評価することで，その人が感受している味覚を評価することが可能であることを暗示している。ただし，表情の変化は随意的な支配が可能な随意筋の運動に伴って起こることから，その反応は自己の意思でコントロールすることが可能である。

一方，表情は，顔色が良い，顔色を伺う，のように表現されることがある。これは多くの言語に同様の表現があり，顔色，すなわち皮膚血流が表情と関連することを意味している。したがって，顔の皮膚血流変化から，個人がどのような味覚やおいしさを感じているのかを推定できる可能性がある。

そこで，被験者の口腔内に基本 5 味を投与した際に顔面の皮膚血流が味覚刺激に対して情動特有に変化するのか否かを調査した。快感情が増加するにつれて，瞼部の血流が増加する傾向を示し，苦味刺激時に不快感情を示すと，不快感情が増加するにつれて鼻部の血流が低下する傾向を示した。特に，苦味に対しての鼻の皮膚血流の低下は全ての被験者に共通する顕著な変化であり，味覚に伴う不快感を捉える上で有効的な手段となる可能性が高い。味覚に対する顔面皮膚血流の特徴を抽出すれば，官能試験の新たな手段を開発する基盤となることが期待される。

研究テーマ: 喫煙の健康影響を修飾する心理社会的要因の解明と，心理療法的介入による喫煙の健康影響低減の試み—大規模コホートデータの解析と介入手法の開発—

研究代表者: 永野　純

補 助 金 名: （財）喫煙科学研究財団研究助成金

研　究　費: 200 万円（3 年継続の 1 年目）

内　容:

喫煙は，多部位のがんや心血管病の危険因子として確立している。禁煙がリスクを減らす第一の手段であることは無論であるが，それが必ずしも容易でないことも事実である。本研究は，喫煙の健康影響を修飾する身体的・心理社会的要因を解明し（課題 1），喫煙の健康影響低減のための心理療法介入の本邦における開発を目指す（課題 2）ものである。

課題 1: ハイデルベルク・コホート研究標本より「心血管病死亡群」，「肺がん死亡群」，「高齢健康者群」を抽出し，喫煙の健康影響における「ストレス」や他の身体的要因との交互作用を検討した。ストレス評価には Grossarth-Maticek パーソナリティ類型をもとに構成した

尺度を用いた。さらに，介入手法「オートノミー・トレーニング(AT)」による無作為化比較試験(RCT)の粗解析も試みた。「心血管病死亡／高齢健康」の属性と喫煙習慣との関連は，ストレスおよび他の様々な身体的要因を補正すると顕著に減弱した。また，喫煙－健康関連はストレスの程度によって大きく異なった。肺がんについても同様の結果であった。RCT では，AT によってストレスが低減され，喫煙者の生存率が改善していた。課題 2: 語学専門家の協力を得て，AT の詳細な資料の邦訳に取り組んだ。約 100 頁の資料翻訳を行った。

●学会財団等からの研究助成金

研究テーマ: 体育実技授業における心理社会的要因を媒介変数としたメンタルヘルス改善・向上効果のモデル構築

研究代表者: 橋本公雄

補 助 金 名: 平成 22 年度全国大学体育連合大学体育研究助成

課 題 番 号: 22-05

研　究　費: 10 万円

内　容:

コミュニケーションスキルとメンタルヘルスの間には密接な関係があるが，これらの変数は個々の問題として扱うのではなく，運動に伴うメンタルヘルス効果の研究の中で同時に取り扱うことは可能である。そこで本研究では，他者意識，人間関係，コミュニケーションスキルなどの心理・社会的要因を媒介変数とする体育実技授業におけるメンタルヘルス効果の因果モデルの構築を目的としている。本年度は 1 つは前期の健康・スポーツ科学実習の授業でソーシャルサポート介入群と非介入群を設定し，心理社会的変数とメンタルヘルス変数の相違を調べた。2 つ目にこれらの変数を用いてメンタルヘルス改善・向上のモデルの構築を行った。

研究テーマ: 福岡県タレント発掘事業に参加している子どもの保護者の食生活に関する調査

研究代表者: 斉藤篤司

共同研究者: 小清水孝子

補 助 金 名: 福岡県体育協会調査研究事業（平成 22- 23 年度）

研　究　費: 20 万円

内　容:

福岡県内で選抜されオリンピックやプロレベルを目指して，一貫指導を受けているジュニアスポーツ選手の「食生活」に対する保護者の「食」の実態と意識を把握し，今後のより充実した，スポーツ栄養サポートの方法の手がかりとすることを目的とする。平成 21 年度福岡県タレント発掘事業対象選手とその保護者を対象に，食生活・食意識・サプリメントに関するアンケート調査を実施した。この時期の食事は保護者から提供されるため，子ども達が将来，至適な食の自己管理ができるようにするためにも，保護者への食教育の充実が必要である。その際，選手，保護者ともにわかりやすく，実践可能な食教育が求められる。

研究テーマ: 音楽が自己選択ペースでのランニングに及ぼす生理心理的効果

研究代表者: 斉藤篤司

共同研究者: 橋本公雄，本多芙美子

補 助 金 名: 九州体育・スポーツ学会課題研究（平成 22 年度）

研　究　費: 20 万円

内　容:

音楽と身体活動の関連性が注目されており，音楽のビートは心拍数と関連し，ウォーキングの持続時間を増加させるとされている。本研究では『自己選択ペースでのランニングでは感情の変化はむしろ小さく，運動強度や外的環境に対し，生理的に変化させながら（アソシエーション），感情はニュートラルな状態にある』に対し音楽を聴くという「ディソシエーション」を同時に行うことで，生理心理的な応答がどのように変化するかについて検討している。自己選択ペースでの運動中の音楽使用は音楽なしの運動に比べ，主観的運動強度が変わらないもしくは低いにもかかわらず，走ペースおよび心拍数の上昇と走行中の感情への影響が考えられる。その結果，運動強度の増大による生理的効果とポジティブな感情の増加により，運動継続の強化をもたらすと考えられる。

●受託研究

研究テーマ: 筑紫野市なかなかよか健康チャレンジの推

進

研究代表者: 橋本公雄

補 助 金 名: 筑紫野市受託研究費（5 年継続の 5 年目）

研　究　費: 863,200 円

内　容:

本受託研究は, 平成 18 年度からスタートしたもので, 生活習慣病の一次予防のための事業として, 市民の自主的な健康増進および疾病予防を図り, ひいては市民の QOL の向上を通した将来的な医療費の伸びの抑制を図ることを目的とし,「なかなかよか健康チャレンジちくしのウォーキング」の推進を筑紫野市から委託されたものである。平成 22 年度は, 事業参加者 135 名を対象に実施された。主な内容は, 健康科学センター教員による 6 回の健康講座, ミニ運動チャレンジ, 第 5 回万葉の里ウォーキング・イベントであった。筑紫野市は平成 21 年度に「ウォーキング都市」を宣言したが, 平成 22 年度には 9 月･10 月にウォーキング推進月間を設置した。事業の成果は, プログラム評価, プロセス評価, アウトカム評価の視点から評価され, 筑紫野市平成 22 年度「なかなかよか健康チャレンジ―ウォーキングの継続化と健康づくり―」の報告書としてまとめられた。

研究テーマ: 食育プログラム（食と運動による健康増進）（平成 18 年～22 年）

研究代表者: 眞﨑義憲

共同研究者: 大柿哲朗, 上園慶子, 丸山　徹

補 助 金 名: うきは市食育プロジェクト事業

研　究　費: 3,223,800 円(直接経費: 2,965,800 円, 間接経費: 258,000 円)

内　容:

本研究はうきは市の食育プロジェクトの一環としての受託研究で、平成 22 年度は 5 カ年計画の最終年度であった。うきは市の代表的な農林業を整形とする山村部と市部の中心部の 2 カ所をモデル地区として、健診や測定結果に基づく住民説明会および市が実施している運動指導などへの提言を 5 年間継続して行ってきた。過去 4 年間の調査結果を踏まえ、7 月には市の担当者とともに最終年度報告に関する内容検討を行い助言を行った。また, また 8 月に 2 回, モデル地区に対する健康調査の結果説明会を実施した。

介入結果の解析のために、平成 18 年に実施した住民アンケートの事業後評価にあたるアンケートを 9 月に実施し, 3 月にアンケート報告書および 5 カ年にわたるうきは市食育事業報告所を刊行した。また、市民に対する 3 月に最終報告会を実施した。

研究テーマ: 地域における効果的な介護予防対策に関する調査研究（太宰府研究）

研究代表者: 熊谷秋三

補 助 金 名: 受託研究（大宰府市）（平成 21-23 年度）

研　究　費: 200 万円（直接経費 200 万円, 間接経費なし）（3 年継続, 2 年目）

内　容:

わが国の高齢化率は 19%を超え, 5 人に 1 人が高齢者という超高齢社会となり, 要介護高齢者の増加や介護期間の長期化など介護ニーズが増大している。さらに, 近い将来には, 第 1 次ベビーブーム世代が高齢者となるため, そのニーズはさらに増えることは確実であるが, 増大する社会保障費に歯止めがかかっておらず, 介護保険制度そのものの存続が危ぶまれている。厚生労働省は, 要介護認定軽度者の大幅な増加や, 軽度者のサービス利用が状態改善につながっていないことを問題視し, 予防重視型システムへの転換のため, 2006 年に介護保険制度を全面的に見直した。特に介護予防において強化すべき分野を 5 つ列挙し対策を講じたが, その中で充分なエビデンスが蓄積されていない認知症, うつ, 閉じこもり対策に関しては, 市町村が行う地域支援事業に位置づけられた。これまでの介護予防教室や健康教室は, 要介護状態を個人の生活習慣の結果としてとらえ, 個人の健康行動に焦点を当てる傾向にあったが, 認知機能低下, うつ状態, 閉じこもりは, 個人の要因だけでなく, 社会的・環境的な因子も強く関連することが示されつつある。すなわち, 社会や環境が, 個人の健康行動や心理状態に関与し, その結果個人の健康も多大な影響を受けるわけである。しかし, その詳細な実態やメカニズムには不明な点が多い。本研究の目的は, 太宰府市における介護予防事業の効果的な運営方法とその評価システムに関する基盤の確立を図るため, 認知機能低下, うつ状態, 閉じこもりとそれらに影響する諸因子を前向き研究により検討することである。

研究テーマ：加速度計を用いた身体活動量の評価法および臨床応用に関する共同研究

研究代表者: 熊谷秋三

共同研究者: 大島秀武（オムロンヘルスケアー株式会社新規事業開発センター主査）

補 助 金 名: 共同研究（オムロンヘルスケアー株式会社）

研　究　費: 200 万円（直接経費 200 万円）（1 年継続, 1 年目）

内　容:

加速度計は，身体活動量の評価法として有効な情報をもたらすことが期待されている運動疫学研究における極めて重要な評価ツールである。しかしながら，本機器が，研究用として開発・市販されているために，その機器で得られた測定結果の個人への情報の有効な返却方法・内容に関する検討は全くされていない。また，加速度計によって得られた多くの身体活動量に関する評価指標の検討の遅れに加え，得られた指標が，いかなるヘルスアウトカム（例えば，肥満度，代謝性疾患，うつ・閉じこもり・認知機能低下などのメンタルヘルスなど）と関連するのかに関しても，学術的にも不明のままである。そこで，今回我々は，加速度計を用いた身体活動量の評価法の検討に加え，さらに臨床応用に関する共同研究を実施することで，計測結果の有効なフィードバック方法を検討する。

4. F D

健康科学第一部門研究 FD

部門内の研究交流活動の活発化を目指し，部門会議に合わせて平成 19 年度より実施している。平成 22 年度は下記の担当者，開催日，テーマで 2 名が発表した。

大柿 哲朗（平成 21 年 10 月 13 日）

「How Many Physical Activities are Enough for Children?－from Viewpoint of Pedometer-determined Step Counts－」

西村 秀樹（平成 22 年 2 月 9 日）

戦前の大相撲は「おおらか」だった – 角界モラル考 –

（文責: 林　直亨）

5. 国際学術交流活動

氏　名	目的地	目　的	期　間	種別
林　直亨	アメリカ合衆国	学会参加及び発表（Experimental Biology 2010）	平 22. 4.23～ 4.30	出張
永野　純	ドイツ連邦共和国	部局間研究協定に基づく研究計画の打ち合わせのため	平 22. 7. 9～ 7.15	出張
斉藤　篤司	中華人民共和国	第 15 回東アジア運動･スポーツ科学会参加および上海交通大学との研究打ち合わせ	平 22. 8. 7～ 8. 10	出張
大柿　哲朗	中華人民共和国	第 15 回東アジア運動･スポーツ科学会参加および上海交通大学との研究打ち合わせ	平 22. 8. 7～ 8. 10	出張
山本　教人	中華人民共和国	第 15 回東アジア運動･スポーツ科学会参加および上海交通大学との研究打ち合わせ	平 22. 8. 7～ 8. 10	出張
熊谷　秋三	スウェーデン王国 イギリス	第 11 回国際肥満学会出席と運動疫学研究に関する打ち合わせ	平 22. 7. 9～ 7.19	出張
熊谷　秋三	大韓民国	「身体活動量の実態調査に関する日韓比較」に関する研究の打ち合わせ（東洋大学）	平 22. 8.24～ 8.27	出張
林　直亨	フィリピン	Ateneo de Manira University 英語による教授能力養成プログラム受講	平 22. 8.29～ 9.25	出張
大柿　哲朗	ネパール	科研費（基盤研究 C)「ネパール小児の身体活動量および栄養素等摂取量が身体組成の変化に及ぼす影響」の調査研究	平 22. 9. 9～ 9.23	出張
斉藤　篤司	ネパール	科研費（基盤研究 C)「ネパール小児の身体活動量および栄養素等摂取量が身体組成の変化に及ぼす影響」の調査研究	平 22. 9. 9～ 9.25	出張
橋本　公雄	カナダ	科研費「スポーツ選手における心理的ウエルビーイング向上の因果モデルの構築」に関する研究の資料収集および研究打ち合わせのため	平 22. 9.23～ 9. 29	出張
熊谷　秋三	アメリカ合衆国	アメリカスポーツ医学会主催の運動に関する総合生物学会議（ACSM conference on lutegrative Physioology of Exercise）出席	平 22. 9.21～ 9.27	出張
永野　純	ドイツ連邦共和国	部局間研究協定に基づく研究計画の打ち合わせのため	平 22. 12. 3～12. 8	出張
橋本　公雄	オーストラリア	大学体育における野外教育の資料収集と実態の視察，および国際比較研究の打ち合わせのため，西オーストラリア大学を訪問	平 23. 2.14～ 2.19	出張

6. 学会・研究会での役職

氏名	学会名・役職名	
健康科学第一部門		
橋本　公雄	日本体育学会	代議員
	日本体育学会会員	学会賞選考委員長
	日本体育学会体育心理学専門分科会	理　事
	日本スポーツ心理学会	副会長
	九州体育・スポーツ学会	副会長
	九州スポーツ心理学会	副会長
	九州地区大学体育連合	会　長
	九州大学大学院人間環境学府同窓会	副会長
大柿　哲朗	日本運動生理学会	評議員
	日本生理人類学会	評議員
	日本健康支援学会	常任理事
	東アジア運動・スポーツ科学会	理事長
	九州体育・スポーツ学会	理事長
	日本体育学会	九州支部長
	日本体育学会	論文賞選考委員
西村　秀樹	九州体育・スポーツ学会	理事
熊谷　秋三	運動疫学研究会	編集顧問
	日本健康支援学会	理事長
	日本体力医学会	評議員
	日本肥満学会	評議員
	日本運動生理学会	評議員
	九州・山口スポーツ医・科学研究会	運営委員
	九州体育スポーツ学会	理　事
斉藤　篤司	東アジア運動・スポーツ科学会	理　事
	日本登山医学会	評議員
	九州体育・スポーツ学会	理　事
	福岡県体育協会・スポーツ・医科学委員会	副委員長
山本　教人	九州体育・スポーツ学会	理　事
杉山　佳生	九州スポーツ心理学会	理事長
	International Journal of Sport and Health Science	編集委員
	日本スポーツ心理学会	理　事
	九州体育・スポーツ学会	理　事
	日本健康支援学会	評議員
	スポーツ社会心理学研究会	事務局
林　直亨	日本生理学会	評議員
高柳　茂美	日本健康支援学会	理事

氏名	学会名・役職名	
健康科学第二部門		
上園　慶子	全国大学保健管理協会	評議員
	第45回全国大学保健管理集会	運営委員
	日本時間生物学会	評議員
	日本健康支援学会	理　事
	時間循環血圧研究会	世話人
	九州地区大学保健管理協議会	幹　事
一宮　　厚	日本老年精神医学会	評議員
	九州精神神経学会	評議員
	日本健康支援学会	理　事
	全国大学メンタルヘルス研究会	評議員
丸山　　徹	日本心電学会	評議員
	福岡不整脈同好会	世話人
	日本不整脈学会	評議員
	日本バイオレオロジー学会	理　事
	日本生理学会	評議員
	日本膜学会	理　事
永野　　純	日本心身医学会	代議員
入江　正洋	米国NIOSH（The National Institute for Occupational Safety and Health）/APA(American Psychological Association)	運営委員
	九州心理相談員会	会　長
福盛　英明	西日本芸術療法学会	理　事
	日本学生相談学会	理　事
	西日本心理劇学会	理　事

7. そ の 他

1）健康支援学会

第 12 回日本健康支援学会年次学術集会は，九州大学医学部コラボステーション I において開催された。大会テーマは「健康支援学の過去・現在・未来: 一次予防のアカデミックフレームの構築に向けて」であった。学術集会参加者は, 130 名程度であった。学術集会では，特別講演 1 題，シンポジウム 1 題，および一般発表演題（口頭・ポスター）29 演題が発表され，積極的かつ活発な意見交換が行なわれた。さらに，第 18 回ヘルスサイエンスセミナー（市民公開講演会）では，「元気な高齢社会を目指して: パート 2」をテーマに興味深い内容の講演会が開催された。50 名程度の市民皆様の参加があった。年次学術集会の大会プログラムは以下の通りであった。

なお，平成23年度は筑波大学の田中 喜代次教授を会長として，平成 24 年 2 月頃に，第 13 回日本健康支援学会年次学術集会および第 19 回ヘルスサイエンスセミナーが筑波大学（つくば市）で開催される予定である。

会 長 講 演
テーマ: 身体運動の科学的証拠に基づく一次予防の展開
座　長: 田中喜代次（筑波大学）
演　者: 熊谷 秋三（九州大学健康科学センター）

特 別 講 演
テーマ: 生活習慣病予防と運動: 分子生物学からの提言
座　長: 熊谷 秋三（九州大学健康科学センター）
演　者: 藤井 宣晴（首都大学東京）

教 育 講 演 I
テーマ: 運動と心の健康
座　長: 一宮　厚（九州大学健康科学センター）
演　者: 佐藤　武（佐賀大学保管管理センター）

シ ン ポ ジ ウ ム I
テーマ: 高齢者の健康支援を考える
座　長: 馬場園 明（九州大学）
演　者: 田中喜代次（筑波大学）
「高齢者のための運動による健康支援」
小西 史子（佐賀大学）
「高齢者のための食事による健康支援」
新開 省二（東京都健康長寿医療センター）
「高齢者の社会参加と健康支援」

教 育 講 演 II
テーマ: 認知症の実態とその予防: 久山町研究
座　長: 上園 慶子（九州大学健康科学センター）
演　者: 清原　裕（九州大学大学院医学研究院）

ヘルスサイエンスセミナー
テーマ: 元気な高齢社会を目指して: パート2
座　長: 大柿 哲朗（九州大学健康科学センター）
演　者: 田中 宏暁（福岡大学）
「運動によるアンチエイジングへの挑戦」
高杉紳一郎（九州大学付属病院）
「意欲に満ちた元気高齢者の支援: 心が動けば身体も動く」
*共催: 日本健康倶楽部福岡統括支部

（文責: 熊谷秋三）

2）健康科学センターで行われている研究会

運動・スポーツ心理学研究会

本研究会は，センター教員，大学院生，修了生および学外の研究者で構成され，研究会には，毎回十数名が参加している。平成 22 年度は，前期は木曜日，後期は火曜日の 18 時 30 分～20 時 30 分に毎週開催され，論文講読と個人の研究データ発表を行った。論文講読では，参加者が各自の研究に関連する論文を紹介し，研究データ発表では，実際に収集したデータおよびそれらを分析した結果について報告した。いずれのセッションにおいても，報告後，活発な討議が行われた。

（文責: 杉山 佳生）

行動科学研究会

本研究会は開始して 6 年目を迎え，昨年同様の研究活動を行った。健康運動心理学をベースにおき，身体活動・運動の促進や健康づくりのための介入に関する研究を中

心に研鑽していくため，基本的に毎週 1 回のペースで開催した。参加者は，人間環境学府の大学院生であり，筑紫野市の「なかなかよか健康チャレンジウォーキング事業」の運営・サポートに関する内容を題材に研究会を行った。

（文責: 橋本 公雄）

木曜研究会

本研究会は健康科学センターおよび他大学の教員，学生による運動・スポーツ生理学，生化学，栄養学関連の研究会である。月 1 回，第 2 木曜日に健康科学センターで開催され，各月 2 名の担当者が発表を行う他，会員による著書の執筆，英文作成補助資料の作成，体力測定結果データベースソフトの作成等も行っている。

著書: ヘルス＆フィットネス（ナカニシヤ出版），現代人のエクササイズとからだ（ナカニシヤ出版）

（文責: 斉藤 篤司）

九州心理相談員会

近年，勤労者のメンタルヘルス問題が重要視されているが，厚生労働省は初めてのメンタルヘルスに対する行政措置として，昭和 63 年に「心とからだの健康づくり（Total Health Promotion Plan, THP）」を提唱した。THP では，保健指導，栄養指導，運動指導と並んで，心理相談が勤労者の健康増進のための重要な柱として位置づけられ，今日まで心理相談員制度の普及が図られてきた。

心理相談員の制度化に伴い，心理相談員の資格の継続および技能向上を目的として心理相談員会が設立され，北海道・東北，関東，中部，関西，中・四国，九州の 6 地域に支部が設置された。心理相談員会九州支部は，平成 4 年の設立以来，本センターに多大な貢献をされた峰松修先生（九州大学名誉教授）が支部長を務められてきたが，前任地で中部支部副支部長をしていた関係から，平成 15 年 5 月に入江が支部長を引き継いだ(平成 16 年 4 月からは九州心理相談員会に名称を変更し会長職となった)。それに伴い，九州心理相談員会の事務局も，九州大学健康科学センター内に設置した。活動の詳細は九州心理相談員会のホームページ（http://www18.ocn.ne.jp/~k-shinri/）に掲載している。

平成 22 年度は，以下のような研修を福岡市（第 3 回は熊本市）で開催し，心理相談員の技能の向上を図った。

平成 22 年度第 1 回研修会（平成 22 年 6 月 5 日）

午前: 事例検討会 スーパーバイザー 有村達之氏
（九州大学大学院医学研究院心身医学助教）

午後: 研修会「企業におけるメンタルヘルス対策の仕組み作り－よりよい心理相談体制構築のために－」
堀野研二氏（西部ガス株式会社産業医）

平成 22 年度第 2 回研修会（平成 22 年 7 月 31 日）

午前: 事例検討会 スーパーバイザー 有村達之氏
（九州大学大学院医学研究院心身医学助教）

午後: 研修会「メンタルヘルスケア～セルフケアについて～」
中尾由美氏（中尾労働衛生コンサルタント事務所所長）

平成 22 年度第 3 回研修会（平成 22 年 10 月 2 日）

午前: 事例検討会 スーパーバイザー 有村達之氏
（九州大学大学院医学研究院心身医学助教）

午後: 研修会「認知行動療法の基本変化をもたらす可能性～効果的なかかわり方」
松下弘子氏（カウンセリングオフィスＫＭＪメンタルアシスト代表）

平成 22 年度第 4 回研修会（平成 22 年 12 月 11 日）

午前: 事例検討会 スーパーバイザー 有村達之氏
（九州大学大学院医学研究院心身医学助教）

午後: 研修会「神経言語プログラミング（ＮＬＰ）のテクニックで体験する気づきのプロセス」
中島志保氏（ニューコードＮＬＰトレーナー）

平成 22 年度第 5 回研修会（平成 22 年 3 月 5, 6 日）

集中研修会「交流分析を活用したメンタルヘルス研修 基礎編 応用編」
綱島康高氏（倉敷紡績株式会社人材開発部教育コンサルタント・インストラクター）

（文責: 入江 正洋）

ESSENS（Expert Society of Sport and Exercise Nutrition Science）

本研究会は運動・スポーツ栄養学に興味のある研究者と学生による研究会である。月 1 回，第 4 土曜日，15 時-18

時に健康科学センターで開催されている。主な内容は各自の研究発表や論文の紹介である。特に ergogenic をキーワードに, 様々な栄養素やサプリメントが ergogenic なのかどうかを発表された論文を基に検証している。また, 授業中に学生自身が自分の摂取エネルギー量を計算できる簡便な栄養計算表を作成している（現在 ver.1.2）。

発表内容は http://www.geocities.jp/essens7854/に。

（文責: 斉藤 篤司）

社 会 的 活 動

教員の学外活動 …… 87
公開講座 …… 91
個人の社会的活動 …… 92
社会連携活動 …… 93
その他 …… 94

社 会 的 活 動

1. 教員の学外およびセンター外活動

応嘱非常勤講師等

氏　名	応　嘱　先	応　嘱　内　容
健康科学第一部門		
橋　本　公　雄	熊本大学教育学部	体育心理学，スポーツ心理学Ⅱ
	熊本学園大学	スポーツ心理学
西　村　秀　樹	長崎大学教育学部	体育社会学
	九州工業大学情報工学部	運動科学Ⅰ，健康･スポーツ科学論演習
	福岡教育大学教育学研究科	スポーツ社会学特論、体育社会学
斉　藤　篤　司	久留米大学	スポーツ実技
		健康・スポーツ科学実習
		健康科学概論
	東九州短期大学	運動生理学
山　本　教　人	久留米大学	スポーツ社会学，地域スポーツ行政論
		スポーツ実技，スポーツ科学実習
	中村学園大学	生涯スポーツ実習 A
	佐賀大学	スポーツ行政
杉　山　佳　生	中村学園大学	生涯スポーツ実習 A
健康科学第二部門		
上　園　慶　子	九州大学留学生センター	留学生の健康管理
	九州大学病院	腎・高血圧・脳内科
一　宮　　厚	九州大学医学部	老年精神医学
丸　山　　徹	九州大学医学部保健学科	病態生理学
	九州大学医学部医学科	心臓病学，循環生理学
	熊本保健科学大学	循環病態学
福　盛　英　明	九州大学人間環境学府	健康支援学特論
	学校法人　産業医科大学	健康管理センター学生相談室　相談員
	九州大学歯学部	臨床心理学

応嘱委員

氏名	委員会	委嘱機関名
健康科学第一部門		
橋本公雄	スポーツ医事・健康体力相談事業に係わるスポーツアドバイザー	（財）福岡県スポーツ振興公社
	筑紫野市健康づくり推進協議会委員	筑紫野市
	健康運動指導士養成講習会講師	（財）健康・体力づくり事業財団
	スポーツ医・科学委員会委員	〈財〉福岡県体育協会
	九州大学学生後援会理事・運営委員会委員長	九州大学学生後援会
大柿哲朗	福岡市健康づくり財団　理事	（財）福岡市健康・体力づくり事業財団
	健康運動指導士養成講習会　講師	（財）健康・体力づくり事業財団
	日本体育協会スポーツ指導者養成　講師	（財）日本体育協会
	九州大学学生後援会　顧問	九州大学学生後援会
西村秀樹	福岡市スポーツ振興審議会委員	福岡市教育委員会
熊谷秋三	高齢者体力つくり支援士（ドクターコース）養成講習会講師	（財）体力つくり指導協会
	健康運動実践指導士講習会講師	（財）日本エアロビックフィットネス協会
	科学研究費委員会専門委員	文部科学省
	VIP クラブ西日本幹事	International VIP Club
斉藤篤司	スポーツ医事・健康体力相談事業に係わるスポーツアドバイザー	（財）福岡県スポーツ振興公社
	スポーツ医・科学委員会委員	〈財〉福岡県体育協会
	太宰府市健康づくり推進委員	太宰府市
山本教人	普及開発委員会委員	（財）福岡県体育協会
	ビジョン推進委員会委員	（財）福岡県体育協会
林　直亨	春日市健康づくり推進協議会委員	春日市
	スポーツ医科学委員会委員	（財）福岡県体育協会
高柳茂美	春日市スポーツ振興審議会委員	春日市教育委員会
健康科学第二部門		
上園慶子	福岡県 70 歳現役社会づくり研究会委員	福岡県
	臨床試験審査委員会委員	医療法人相生会臨床薬理センター
一宮　厚	平成 20 年度メンタルヘルス研究協議会本部運営委員会委員ならびに九州地区実行委員会委員	独立行政法人日本学生支援機構
丸山　徹	福岡市医師会学校心臓検診部会会員	福岡市
	福岡市東区保健福祉センター ヘルスアップスクール講師	福岡市東区
	NPO 日本 ICD の会顧問	NPO 日本 ICD・CRT-D の会
永野　純	健康づくり推進協議会委員	大野城市
入江正洋	独立法人労働者健康福祉機構福岡産業保健推進センター基幹相談員	独立法人労働者健康福祉機構福岡産業保健推進センター
	独立法人労働者健康福祉機構メンタルヘルス支援センター相談員	独立法人労働者健康福祉機構メンタルヘルス支援センター
	中央労働災害防止協会「事業場の心の健康づくりアドバイス事業」アドバイザー	中央労働災害防止協会
	厚生労働省「心とからだの健康づくり（THP）」九州心理相談員会会長	中央労働災害防止協会
眞﨑義憲	糸島市高齢者保健・福祉事業協議会委員（会長）	糸島市

講演・指導等の発令

氏　名	テ　ー　マ	場　所	期　間
丸山　徹	「インスリン抵抗性心筋症―新たな概念？独立疾患？随伴疾患？」第9回南東京腎と糖尿病研究会	東京都目黒区	平22.4.8
熊谷　秋三	「リラクゼーションが肥満を解消する！気持ちよく寝ることで痩せていく驚きの痩身法！」ビューティーワールドジャパン2010出展者プレゼンテーション	福岡市	平22.5.17
山本　教人	平成22年度（財）福岡県体育協会第1回普及開発委員会	福岡市	平22.5.18
熊谷　秋三	「第83回日本産業衛生学会における労働者体力問題研究会」	福井市	平22.5.27
大柿　哲朗	平成22年第3回理事会（財団法人福岡市健康づくり財団）	福岡市	平22.5.28
入江　正洋	「職場におけるハラスメント対策～基礎編～」平成22年度前期労務・人事担当者のための労働衛生管理研修会（福岡産業保健推進センター主催）	福岡市	平22.5.28
熊谷　秋三	「運動プログラムの管理」 平成22年度健康運動指導士養成講習会	福岡市	平22.5.29
丸山　徹	「運動負荷試験マスターダブルツーステップ」平成22年度健康運動指導士養成講習会	福岡市	平22.5.30
橋本　公雄	「健康行動の開始・継続を促すための行動変容の洞察及び手法」健康運動指導士登録更新講習会（財団法人健康･体力づくり事業財団主催）	福岡市	平22.5.30
丸山　徹	「心電図」熊本保健科学大学リハビリテーション学科1年次カリキュラム「生理学実習」	熊本市	平22.5.31
入江　正洋	職場におけるハラスメント対策～応用編～」平成22年度前期労務・人事担当者のための労働衛生管理研修会（福岡産業保健推進センター主催）	福岡市	平22.6.11
大柿　哲朗	「健康づくり運動の理論　トレーニング概論」財団法人 健康・体力づくり事業財団平成22年度健康運動指導士養成講習会	福岡市	平22.6.20
林　直亨	「健康づくり運動の理論　トレーニング条件と反応・トレーニング強度」平成22年度健康運動指導士養成講習会	福岡市	平22.6.20
眞﨑　義憲	平成22年度学校活性化人材育成事業スーパーセミナー合宿第1回実施協議会	福岡市	平22.7.7
林　直亨	平成22年度学校活性化人材育成事業スーパーセミナー合宿第1回実施協議会	福岡市	平22.7.7
入江　正洋	「管理者が学ぶメンタルヘルス」平成22年度九州大学新任係長・専門職員研修（九州大学主催）	福岡市	平22.7.7
福盛　英明	「フォーカシング」平成22年度「フォーカシング」研修会	神奈川県	平22.7.10-11
大柿　哲朗	「健康づくり運動の実際」ストレッチングと柔軟体操の実際 実習」平成22年度健康運動指導士養成講習会	福岡市	平22.7.14
高柳　茂美	「健康教育」平成22年度社会教育主事講習（九州大学主催）	福岡市	平21.7.21
入江　正洋	「事業場におけるパワーおよびセクシャル・ハラスメント対策」平成22年度日本医師会認定産業医研修（社団法人日本医師会主催）	福岡市	平22.7.22
入江　正洋	「職場のメンタルヘルス」平成22年度産業カウンセラー養成研修（社団法人日本産業カウンセラー協会主催）	福岡市	平22.7.25
橋本　公雄	「ストレスと健康」筑紫野市シルバー人材センター安全就業講習会	筑紫野市	平22.7.29
熊谷　秋三	「健康づくり施策概論 生活習慣病と運動疫学」平成22年度健康運動指導士養成講習会	福岡市	平22.8.2
熊谷　秋三	「健康・育児・シルバーライフ シーズ発表会」	福岡市	平22.8.3
山本　和彦	「第2回エイズ･感染症特別委員会」平成22年度第2回エイズ・感染症特別委員会	東京都港区	平22.8.4
眞﨑　義憲	平成22年度学校活性化人材育成事業スーパーセミナー合宿	大分県玖珠郡	平22.8.18-20

林　直亨	平成 22 年度学校活性化人材育成事業スーパーセミナー合宿	大分県玖珠郡	平 22. 8.18-20
入江　正洋	「職場のコミュニケーションとメンタルヘルス」平成 22 年度管理職研修（キリンビール福岡工場主催）	朝倉市	平 22. 8.20
入江　正洋	「心の健康問題」平成 22 年度職場管理研修（国土交通省九州地方整備局主催）	久留米市	平 22. 8.25
入江　正洋	「職場のコミュニケーションとメンタルヘルス」平成 22 年度管理職研修（キリンビール福岡工場主催）	朝倉市	平 22. 8.26
杉山　佳生	「コミュニケーションスキルを育てる」平成 22 年度県立学校等初任者研修会	糟屋郡	平 22. 8.27
入江　正洋	「職場のメンタルヘルス」平成 22 年度産業カウンセラー養成研修（社団法人日本産業カウンセラー協会 九州支部主催）	北九州市	平22. 8.29
入江　正洋	「職場のメンタルヘルス」平成 22 年度産業カウンセラー養成研修（社団法人日本産業カウンセラー協会主催）	長崎市	平 22. 9.5
入江　正洋	「最近の情勢を踏まえた職場のメンタルヘルスの理解と対策について」平成 22 年度労働衛生週間講演(福岡労働局主催)	福岡市	平 22. 9. 7
入江　正洋	「リラックスセミナー～簡単にできるセルフケア～」平成 22 年度福岡県職員研修（地方職員共済組合主催）	福岡市	平 22. 9. 8
入江　正洋	「積極的傾聴法」平成 22 年度メンタルヘルスセミナー－職場の風通しをよくするために－(中央労働災害防止協会九州安全衛生サービスセンター主催)	福岡市	平 22. 9.14
福盛　英明	「メンタルヘルス・マネジメント」人事院九州事務局第 35 回課長補佐研修	福岡市	平 22. 9.15
福盛　英明	「メンタルヘルス・マネジメント」人事院九州事務局第 36 回係長研修	福岡市	平 22.12.17
杉山　佳生	「教職員に求められる人間関係づくり」平成 22 年度県立学校等 10 年経験者研修会	糟屋郡篠栗町	平 22. 9.22
入江　正洋	「職場のメンタルヘルスと対策～ハラスメント問題を中心に～」平成 22 年度セミナー（財団法人産業雇用安定センター主催）	福岡市	平 22.10.6
入江　正洋	「職場のハラスメントと対策～事例を中心に～」平成 22 年度後期労務・人事担当者のための労働衛生管理研修会（福岡産業保健推進センター主催）	福岡市	平 22.10.22
杉山　佳生	「公認 B 級コーチ養成講習会 共通科目 スポーツ心理学 講義」平成 22 年度公認 B 級コーチ養成講習会	静岡県	平 22.10.24
大柿　哲朗	「トレーニング論Ⅱ」平成 22 年度（財）日本体育協会公認コーチ等養成講習会共通科目集合講習会	福岡市	平 22.11. 2
入江　正洋	「職場のメンタルヘルスと対策～ハラスメントを中心に～」平成 22 年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催）	熊本市	平 22.11. 8
入江　正洋	「職場のメンタルヘルスと対策～ハラスメントを中心に～」平成 22 年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催）	筑紫野市	平 22.11. 17
入江　正洋	「職場におけるハラスメントとその対策について」平成 22 年度社員研修（西部電気工業株式会社主催）	福岡市	平 22.11.19
入江　正洋	「からだの健康の常識・非常識」平成 22 年度九州大学公開講座（九州大学健康科学センター主催）	福岡市	平 22.11.21
入江　正洋	「こころの健康の常識・非常識」平成 22 年度九州大学公開講座（九州大学健康科学センター主催）	福岡市	平 22.11.21
入江　正洋	「職場のメンタルヘルスと対策～ハラスメントを中心に～」平成 22 年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催）	筑紫野市	平 22.11. 24
橋本　公雄	「ストレスと健康―ストレスをパワーにつなげよう」平成 22 年度生きがい活動支援員 現任研修Ⅱ	北九州市	平 22.11.25
福盛　英明	「第 48 回全国学生相談研修会」	東京都千代田区	平 22.11.28-30
橋本　公雄	「ストレスと健康―ストレスをパワーにつなげよう」平成 22 年度生きがい活動支援員 現任研修Ⅱ	北九州市	平 22.11.30
入江　正洋	「職場のメンタルヘルスと対策～ハラスメントを中心に～」平成 22 年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催）	合志市	平 22.12. 1

入江　正洋	「職場のメンタルヘルスと対策～ハラスメントを中心に～」平成22年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催）	筑紫野市	平 22.12. 2
入江　正洋	「メンタルヘルスケア技法（交流分析・リラクセーション技法）」平成22年度「心とからだの健康づくり（THP）」指導者養成専門研修（中央労働災害防止協会主催）	福岡市	平22.12.9
入江　正洋	「職場のメンタルヘルスと対策～ハラスメントを中心に～」平成22年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催）	福岡市	平 22.12. 13
斉藤　篤司	「平成22年度（財）福岡県体育協会第4回スポーツ医・科学委員会」	福岡市	平 22.12.16
入江　正洋	「管理職のためのメンタルヘルス研修」平成22年度管理職研修（福岡市医師会主催）	福岡市	平22.12.17
杉山　佳生	「九州大学の体育実技・講義の現状と今後」岡山大学学内 COE講演会	岡山市	平 22.12.18
杉山　佳生	「双方向スポーツ教育活動の教育効果―コミュニケーション能力に着目して―」科学研究費補助金シンポジウム講演	岡山市	平 22.12.18
入江　正洋	「職場のメンタルヘルスと自殺防止について」医系学部等メンタルヘルス研修会（九州大学医学部等事務部主催）	福岡市	平22. 12.20
眞﨑　義憲	「情報収集や問題解決手法および生命論理を踏まえ、看護師として社会に出る前に身に付けて欲しい心構え」学校法人純真学園純真高等学校	福岡市	平 22.12.24
入江　正洋	「職場のメンタルヘルス」平成 22 年度産業カウンセラーシニア研修（社団法人日本産業カウンセラー協会主催）	熊本市	平 23. 1.9
丸山　徹	「第64回福岡不整脈同好会」	福岡市	平23. 1.22
入江　正洋	「職場のメンタルヘルスと対策～ハラスメントを中心に～」平成22年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催）	那覇市	平 23.1. 25
丸山　徹	「第2回循環器専門医のための糖尿病塾」MSD株式会社主催	福岡市	平23. 1.26
入江　正洋	「職場のメンタルヘルスと対策～ハラスメント問題を中心に～」平成22年度セミナー（財団法人産業雇用安定センター主催）	北九州市	平23. 2. 2
入江　正洋	「職場のメンタルヘルス」平成22年度産業カウンセラーシニア研修（社団法人日本産業カウンセラー協会主催）	宮崎市	平 23. 2.6
入江　正洋	「一般職のためのメンタルヘルス研修」平成22年度一般職研修（福岡市医師会主催）	福岡市	平23.2.18
入江　正洋	「職場のメンタルヘルスと対策～ハラスメントを中心に～」平成22年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催）	鹿児島市	平 23.2. 22
入江　正洋	「ストレスマネジメントと喫煙」いとしまサイエンスキャラバン２０１０講演（糸島市主催）	糸島市	平23. 2.24
入江　正洋	「職場におけるメンタルヘルス」平成22年度九州大学教室系技術職員研修（九州大学主催）	福岡市	平23. 3.3
丸山　徹	「第2回 Fukuoka Intervention Academy」（MSD株式会社主催）	福岡市	平23. 3. 4
入江　正洋	「コミュニケーションの基本」平成22年度心配ごと相談所研修（福岡市社会福祉協議会主催）	福岡市	平23. 3.10
山本　教人	「平成22年度九州地区大学体育協議会総務委員会」九州地区大学体育協議会	福岡市	平23. 3.18

2. 公開講座

平成22年度の健康科学センター主催の公開講座は，近年における参加者の減少傾向を考慮して，前年までの博多南地域交流センター「さざんぴあ博多」と前原市健康福祉センター「あごら」の二会場から，前者のみの開催に変更した。また，複数日にわたっていたプログラムも，一日に集約することにした。受講料は2,000円である。参加者は14名で，平成21年度と比べてわずかに増加がみられた。次年度はテーマや場所などを見直して，さらに魅力ある公開講座にしたいと考えている。

「こころとからだの健康の常識・非常識」

（博多南地域交流センター・さざんぴあ博多）

11 月 21 日（日）

からだの健康の常識・非常識（入江）

こころの健康の常識・非常識（入江）

運動の常識・非常識～理論編～（林）

運動の常識・非常識～実践編～（斉藤）

日本人の健康の常識・非常識（大柿）

（文責: 入江正洋）

3. 個人の社会的活動

入江正洋

九州大学では，教育，研究，国際貢献と並んで，社会貢献も教員が果たすべき４つの大きな柱の１つとして位置付けられている。そうした方針に準じて，全ての事業場で取り組むべき２大テーマである過重労働対策とメンタルヘルス対策の両方にこれまで深く係わってきた経験を活かして，種々の重要な社会貢献活動に従事している。

過重労働に関しては，平成 13 年に示された脳・心臓疾患（いわゆる過労死を含む）の労災認定基準の作成を前任地で分担した。この労災認定基準で明示した時間外労働の多寡等によって過重性が評価され，労災認定の判断がなされているのは周知の通りである。

健康科学センターに赴任した平成 15 年からは，厚生労働省が昭和 63 年に「心とからだの健康づくり（Total Health Promotion Plan, THP)」で取り入れた心理相談担当者の技能向上の役割を担う九州心理相談員会の会長（九州大学赴任前は中部心理相談員会の副会長）と，独立行政法人労働者健康福祉機構福岡産業保健推進センターの基幹相談員（メンタルヘルスとカウンセリング担当）の役割を担っている。

さらに，平成 21 年度からは，新たに創設された独立行政法人労働者健康福祉機構メンタルヘルス対策支援センターの相談員や中央労働災害防止協会の「事業場の心の健康づくりアドバイス事業」アドバイザーにも就任した。

その他，米国の NIOSH (The National Institute for Occupational Safety and Health) / APA (American Psychological Association)の Scientific Committee や, Journal of Psychosomatic Research，Medical Science Monitor，The European Journal of Psychiatry の reviewer も担当している。詳細な活動については，九州大学健康科学センターのホームページ（http://www.ihs.kyushu-u.ac.jp/）の研究者情報欄を参照されたい。

そのような活動が認知･評価されて，学外からの講演（研修）依頼が相次いでいる。九州大学赴任後に講演（研修）を実施した主な機関や組織は，人事院九州事務局，総務省九州管区行政評価局，国土交通省九州地方整備局，中央労働災害防止協会，福岡高等裁判所，福岡労働局，労働基準監督署，労働基準協会，福岡産業保健推進センター，医師会，病院，自治体，教育委員会，財団法人産業雇用安定センターや社団法人日本産業カウンセラー協会などの各種法人，一般企業など多岐にわたる。

こうした学外講演（研修）は，平成 18 年度が 23 回，平成 19 年度が 22 回，平成 20 年度が 26 回，平成 21 年度が 22 回であったが，平成 22 年度は 34 回実施した。以下に示すように，最近はハラスメント関連の講演依頼が増えている。

5 月 28 日 :「職場におけるハラスメント対策～基礎編～」平成 22 年度労務・人事担当者のための労働衛生管理研修（独立法人労働者健康福祉機構　福岡産業保健推進センター主催），福岡市

6 月 11 日 :「職場におけるハラスメント対策～応用編～」平成 22 年度労務・人事担当者のための労働衛生管理研修（独立法人労働者健康福祉機構　福岡産業保健推進センター主催），福岡市

7 月 22 日 :「事業場におけるパワーおよびセクシャル・ハラスメント対策」平成 22 年度日本医師会認定産業医研修（社団法人　日本医師会主催），福岡市

7 月 25 日 :「職場のメンタルヘルス」平成 22 年度産業カウンセラー養成研修（社団法人　日本産業カウンセラー協会主催），福岡市

8 月 20 日，26 日 :「職場のコミュニケーションとメンタルヘルス」平成 22 年度管理職研修（キリンビール福岡工場主催），朝倉市

8 月 25 日 :「心の健康問題」平成 22 年度職場管理研修（国土交通省九州地方整備局主催），久留米市

8 月 29 日 :「職場のメンタルヘルス」平成 22 年度産業カウンセラー養成研修（社団法人　日本産業カウンセラー協会主催），北九州市

9 月 5 日 :「職場のメンタルヘルス」平成 22 年度産業カウンセラー養成研修（社団法人　日本産業カウンセラー協会主催），長崎市

9 月 7 日 :「最近の情勢を踏まえた職場のメンタルヘルスの理解と対策について」平成 22 年度労働衛生週間講演(福岡労働局主催), 福岡市
9 月 8 日 :「リラックスセミナー〜簡単にできるセルフケア〜」平成 22 年度福岡県職員研修（地方職員共済組合主催), 福岡市
9 月 14 日 :「積極的傾聴法」平成 22 年度メンタルヘルスセミナー（中央労働災害防止協会九州安全衛生サービスセンター主催), 福岡市
10 月 6 日 :「職場のメンタルヘルスと対策〜ハラスメント問題を中心に〜」平成 22 年度セミナー（財団法人　産業雇用安定センター主催), 福岡市
10 月 22 日 :「職場のハラスメントと対策〜事例を中心に〜」平成 22 年度労務・人事担当者のための労働衛生管理研修（独立法人労働者健康福祉機構　福岡産業保健推進センター主催), 福岡市
11 月 8 日 :「職場のメンタルヘルスと対策〜ハラスメントを中心に〜」平成 22 年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催), 熊本市
11 月 17 日 :「職場のメンタルヘルスと対策〜ハラスメントを中心に〜」平成 22 年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催), 筑紫野市
11 月 19 日 :「職場におけるハラスメントとその対策について」平成 22 年度社員研修(西部電気工業株式会社主催), 福岡市
11 月 21 日 :「からだの健康の常識・非常識」平成 22 年度九州大学公開講座（九州大学健康科学センター主催), 福岡市
11 月 21 日 :「こころの健康の常識・非常識」平成 22 年度九州大学公開講座（九州大学健康科学センター主催), 福岡市
11 月 24 日 :「職場のメンタルヘルスと対策〜ハラスメントを中心に〜」平成 22 年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催), 筑紫野市
12 月 1 日 :「職場のメンタルヘルスと対策〜ハラスメントを中心に〜」平成 22 年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催), 熊本県合志市
12 月 2 日 :「職場のメンタルヘルスと対策〜ハラスメントを中心に〜」平成 22 年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催), 筑紫野市
12 月 9 日 :「リラクセーション」,「交流分析」平成 22 年度「心とからだの健康づくり（THP)」指導者養成専門研修（中央労働災害防止協会九州安全衛生サービスセンター主催), 福岡市
12 月 13 日 :「職場のメンタルヘルスと対策〜ハラスメントを中心に〜」平成 22 年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催), 福岡市
12 月 17 日 :「管理職のためのメンタルヘルス研修」平成 22 年度管理職研修（福岡市医師会主催), 福岡市
1 月 9 日 :「職場のメンタルヘルス」平成 22 年度産業カウンセラーシニア研修（社団法人　日本産業カウンセラー協会主催), 熊本市
1 月 25 日 :「職場のメンタルヘルスと対策〜ハラスメントを中心に〜」平成 22 年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催), 那覇市
2 月 2 日 :「職場のメンタルヘルスと対策〜ハラスメント問題を中心に〜」平成 22 年度セミナー（財団法人　産業雇用安定センター主催), 北九州市
2 月 6 日 :「職場のメンタルヘルス」平成 22 年度産業カウンセラーシニア研修（社団法人　日本産業カウンセラー協会主催), 宮崎市
2 月 18 日 :「一般職のためのメンタルヘルス研修」平成 22 年度一般職研修（福岡市医師会主催), 福岡市
2 月 22 日 :「職場のメンタルヘルスと対策〜ハラスメントを中心に〜」平成 22 年度管理職研修（日本たばこ産業株式会社主催), 鹿児島市
2 月 24 日 :「ストレスマネジメントと喫煙」いとしまサイエンスキャラバン２０１０（糸島市主催), 糸島市
3 月 10 日 :「コミュニケーションの基本」平成 22 年度心配ごと相談所研修（福岡市社会福祉協議会主催), 福岡市

（文責: 入江正洋）

4. 社会連携活動

筑紫野市の「なかなかよか健康チャレンジ―ウォーキング事業―」に携わって 9 年目。平成 22 年度はこの事業に対し委託研究費を受け入れ, 九大の社会連携経費と合わせて, 事業参加者のウォーキングの継続化と一般市民を対象とした普及に努めた。主な事業プログラムは, 九大の講師陣による健康講話, ウォーキングイベント開催, 健康情報誌の発行等であり, ボランティアの方々と協働で運営に当たった。本事業では同時に, ウォーキングを通

しての健康なまちづくりの担い手となるボランティア育成を事業の中で行っている。今後は各コミュニティ単位でウォーキング事業を推進していく計画であるが，1 地区でこのシステムが平成 22 年度から動き始めた。

（文責: 橋本 公雄）

5. その他

筑紫地区学内開放

平成 22 年 5 月 15 日（土）午前 10 時～午後 5 時に，筑紫地区の学内開放（オープンキャンパス）が行われた。この学内開放は，社会交流や地域交流を目的とした，小中高校生を含む一般の方々に日ごろの研究内容を分かりやすく体験してもらうための企画であると同時に，近隣大学の学部生に対する大学院進学相談の意味合いも有している。健康科学センターでは，「からだの健康」，「たばこと健康」，「マラソンの世界記録ペースを体験」，「こころの健康」，「見ることの不思議」の 5 つのコーナーを設け，人間環境学府行動システム専攻健康行動学コースの大学院生の協力のもと，実演や体験を重視した企画を行った。また，健康科学センター協力企画として，プロのテニス選手による実演・指導が，テニスコートで行われた。健康科学センターへは 188 名の来訪者があり，アンケート調査では，いずれの企画も，非常に高い評価を得ていた。

（文責: 杉山 佳生）

健セの共催・後援等

1. 筑紫野市ウォーキング事業

「第 5 回万葉の里ちくしのウォーキング」は 9 月と 10 月のウォーキング推進月間を通して 11 月に開催された。当初このイベントは 5 ヶ年計画で、100 名ずつ増やし、5 年目には 500 名規模の「史跡と湯のまちちくしの」として全国展開を図る予定であった。しかし、筑紫野市健康づくり推進協議会主催であることやコースのキャパシティの問題もあって、市民中心のイベントにすることにし 400 名弱の規模で開催された。イベント自体は盛会に行われ、除々に筑紫野市の一大イベントとして成長してきたといえる。

（文責: 橋本　公雄）

委 員 会 活 動

マスタープラン …… 95
研究交流 …… 95
人事 …… 95
総務 …… 95
倫理 …… 96
健康教育社会交流 …… 98

委　員　会　活　動

マスタープラン（MP）委員会

平成 22 年度のマスタープラン委員会は，センター長大柿教授を委員長として，副センター長一宮教授，第一部門長西村教授，第二部門長上園教授，総務委員会委員長斎藤准教授，自己点検評価委員会委員長丸山教授，研究交流委員会委員長山本准教授で組織した。

平成 22 年度は、「5 年目評価, 10 年以内組織見直し制度」への対応に追われ、MP 委員会より教員の全体会議を優先したため、MP 委員会そのものは 2 回のみの会議しか開催しなかった。この案件も、「5 年目評価, 10 年以内組織見直し制度」への対応についてであった。

（文責: 大柿 哲朗）

研究交流委員会

平成 22 年度の研究交流会議は 2 回開催された。研究交流会議では教員間の研究面での情報交換や協力体制の強化を図る会議と，科研費採択率の向上を目指すなどの FD 的な会議を行っている。以下に今年度の研究交流会議の内容を示す（発表順）。開催場所はいずれも本センター2 階ラウンジで，研究発表はいずれも発表時間 20 分，質疑応答 10 分であった。いずれもほとんどの教員が毎回出席しており，オープン参加で人間環境学府の大学院生も広く参加した。

第 1 回研究交流会議（平成 22 年 9 月 29 日）

杉山 佳生 准教授

丸山 徹 准教授

山本和彦 教授

第 2 回研究交流会議（平成 23 年 2 月 23 日）

橋本 公雄 教授

上園 慶子 教授

山本 教人 准教授

（文責:山本 教人）

人事委員会

平成 22 年度の人事委員は大柿センター長・西村・杉山・永野・上園であった。

・今年度は同 17 年度から欠員となっていた旧第二部門の教員・臨床心理士(カウンセラー)の補充人事の凍結が解除された。そのため人事委員会を平成 23 年 1 月に開催し，選考委員会を立ち上げた。

・看護職の人事として，同 22 年 4 月に荒川令保健師が 8 時間、濱田百合保健師が 6 時間の健セ非常勤職員として新規に雇用された。また，安全衛生推進室所属の専任衛生管理者である産業保健師として，豊田千寿子保健師が 8 時間の非常勤職員として新規に雇用された。平成 21 年 10 月に採用された荒尾真由美保健師が企業の常勤職に採用されて同 22 年 9 月末に退職し 10 月から 12 月まで副島愛保健師が勤め，翌年 1 月に上田真衣保健師が新規に採用された。年度末には本学と合併前の九州芸術工科大学保健管理センター時代から長年保健指導に奉職された中山博子看護師が定年により，伊都 C 分室の福盛文恵保健師が異動のため，さらに箱崎地区担当の井上美緒保健師(産業)が結婚のため退職した。

今年度も任期を迎えることなく退職する有期雇用看護職のために採用人事が発生した。有期職員は身分が不安定であり，向上心が強く能力も高い人々が短期で辞めていくという残念な状況が続いている。更に年度途中の突然の退職による欠員補充は十分な選考を行えず，必ずしも適任者を採用出来ないため，業務の継続に支障を来している。

（文責:上園 慶子）

総務委員会・情報公開委員会

平成 22 年度の委員は,大柿教授，一宮教授 斉藤准教授，福盛准教授，林准教授，眞﨑准教授，山本がつとめた。

（文責:山本 教人）

1. 経理・施設関係

（1）経理関係

平成 22 年度の健康科学センターへの配分額は，56,121,000 円であった。これは前年度費 5.53％の増額であった（昨年年報の記述は 50,497,529 円の誤りである）。

予算の内訳は，筑紫地区共通経費 5,389,999 円（前年度決算 5,530,608 円），図書館筑紫分館経費 756,000 円（同 1,005,000 円），光熱水料費 3,498,000 円（同 3,095,678 円），電話料 325,000 円（同 324,664 円），センター共通経費

6,498,000 円（同 7,616,412 円），非常勤職員経費 25,741,144 円（同 25,584,775 円），ジャーナル刊行費 720,000 円（同 677,250 円），および特別事業費 923,000 円（同 836,966 円）であった。

以上の残額 6,983,857 円（同 11,920,904 円）を教員研究費の予算額とした。前年からの大幅減となってしまった。部門内科研費制度や前年度実績を考慮することで，傾斜配分を行っている。

（文責: 林　直亨）

（2）施設関係

共通経費により，センター1 階の生理系実験室の空調補修工事，箱崎地区屋上漏水補修工事を行った。また，サーバを 2 台新たな機種へ更新した。単独で 10 万円を超える支出は以上であったが，ウェブサイトを外注したことに伴い，ウェブサイト更新及び保守管理作業が月々31,500 円となった。

（文責: 林　直亨，一宮　厚）

2. 出版関係

年報」第 32 巻と、研究紀要「健康科学」第 33 巻を出版した。「年報」の内容については、例年どおり、教育活動、業務活動、研究活動、社会的活動、委員会活動、資料と、各教員の活動が掲載された。紀要の「健康科学」第 33 巻には、総説 2 編、原著論文 7 編、研究資料 7 編の合計 16 編が掲載され、健康科学センターで実施された九州大学 P&P 研究　EQUISITE Study の特集が組まれた。紀要に関しては様式の統一のため、共通フォーマットを開発することになった。

（文責: 斉藤 篤司，福盛 英明）

3. 情報関係

平成 21 年度末に，業者に委託して健康科学センターのホームページを抜本的に作り直した。今年度は、新しいホームページで可能となった新着情報のシステムを用いて、健康診断情報や分室情報、FD の実施情報などの随時更新を実施した、新しいホームページは、ユーザーからみて情報にたどり着きやすい構造とした。今後も内容の改善に取り組んでいく予定である。

（文責: 山本 教人，眞﨑 義憲）

倫理委員会

平成 22 年度は倫理委員会が 10 回開催された。審査の申請件数は計 22 件であった。倫理委員会のメンバーは，大柿教授，一宮教授，丸山准教授，高柳講師，委員長は山本，外部委員は医学研究院医療経営・管理学講座教授の馬場園が担当した。下記に倫理委員会開催日，申請者，課題番号，課題名および判定を示す。

第 1 回倫理委員会（平成 22 年 4 月 1 日）

1) 申 請 者：眞崎　義憲
課題番号：IHS-2010-01
課 題 名：教職員における喫煙者への禁煙支援のための調査と介入
判　　定：条件付き承認

第 2 回倫理委員会（平成 22 年 5 月 12 日）

1) 申 請 者：上園　慶子
課題番号：IHS-2010-02
課 題 名：特定保健指導基準に対応した肥満職員への健康支援のための調査と生活習慣病予防プログラムによる介入
判　定：承認

2) 申 請 者：上園　慶子
課題番号：IHS-2010-03
課 題 名：肥満職員への健康支援のための調査と介入
判　定：承認

第 3 回倫理委員会（ 平成 22 年 6 月 2 日）

1) 申 請 者：池村　司（人間環境学府修士課程）
課題番号：IHS-2010-04
課 題 名：疲労困憊に至る運動が眼底血流と視力に与える影響
判　　定：条件付き承認（6 月 15 日に承認）

2) 申 請 者：清水美紅（人間環境学府修士課程）
課題番号：IHS-2010-05
課 題 名：顔面，脳，前皮膚および内臓血流量に及ぼす味覚と感覚刺激の影響
判　　定：条件付き承認（6 月 21 日に承認）

3) 申 請 者 : 熊谷　秋三
課題番号 : IHS-2010-06
課 題 名 : 職域における IT 環境を利用した非対面健康支援プログラムによる介入研究
判　　定 : 条件付き承認（6 月 7 日に承認）

第 4 回倫理委員会（ 平成 22 年 7 月 7 日）

1) 申 請 者 : 斉藤　篤司
課題番号 :　IHS-2009-07
課 題 名 : 中高年登山者の身体的・精神的体力
判　　定 : 承認

2) 申 請 者 : 斉藤　篤司
課題番号 :　IHS-2010-08
課 題 名 :他者ペースでのランニングが運動中の感情に及ぼす影響
判　　定 : 承認

3) 申 請 者 : 斉藤　篤司
課題番号 :　IHS-2010-09
課 題 名 : 音楽が自己選択強度でのランニングに及ぼす生理心理的影響
判　　定 : 承認

4) 申 請 者 : 本多　芙美子（人間環境学府博士課程）
課題番号 :　IHS-2010-10
課 題 名 : 短時間ウォーキングの心理的効果の検討
判　　定 : 承認

5)申請者 : 荒木　登茂子（医学研究院医療経営管理学講座）
課題番号 :　IHS-2010-11
課 題 名 : 心残りのある患者の死を経験した看護師の悲嘆反応と感情を表出できる機会の関連
判　　定 : 条件付き承認（7 月 15 日に承認）

第 5 回倫理委員会（ 平成 22 年 9 月 1 日）

1) 申 請 者 : 熊谷　秋三
課題番号 :　IHS-2010-12
課 題 名 : 子どもの体力・身体活動量とそれらに及ぼす親の生活習慣の影響
判　　定 : 条件付き承認（11 月 4 日に承認）

第 6 回倫理委員会（ 平成 22 年 11 月 10 日）

1) 申 請 者 : 熊谷　秋三
課題番号 : IHS-2010-13
課 題 名 : 地域における効果的な認知機能低下改善プログラムの評価
判　　定 :　条件付き承認（11 月 15 日に承認）

2) 申 請 者 : 熊谷　秋三
課題番号 : IHS-2010-14
課 題 名 :　うつ・代謝障害のバイオマーカーとしての脳由来神経栄養因子に関する遺伝子解析
判　　定 : 条件付き承認（11 月 18 日に承認）

第 7 回倫理委員会（ 平成 22 年 12 月 1 日）

1) 申 請 者 : 劉　守君（人間環境学府修士課程）
課題番号 :　IHS-2010-15
課 題 名 : 中国小学生の日常生活における身体活動、生活習慣に関する調査研究
判　　定 : 条件付き承認（12 月 3 日に承認）

第 8 回倫理委員会（ 平成 23 年 2 月 1 日）

1) 申 請 者 : 橋本　公雄
課題番号 : IHS-2010-16
課 題 名 : 大学生の運動・スポーツ行動に対する意識と行動に関する比較文化的研究
判　　定 : 条件付き承認（3 月 2 日に承認）

2) 申 請 者 : 斉藤　篤司
課題番号 : IHS-2010-17
課 題 名 :発酵黒生姜摂取がヒトの安静時および運動時の脂質代謝に及ぼす影響
判　　定 : 条件付き承認（3 月 12 日に承認）

第 9 回倫理委員会（ 平成 23 年 3 月 2 日）

1) 申 請 者 : 鍛島　秀明（人間環境学府修士課程）

課題番号：IHS-2010-18
課 題 名：情動の変化が顔面皮膚血流に与える影響
判　　定：条件付き承認

2) 申 請 者：入江　正洋
課題番号：IHS-2010-19
課 題 名：大学生の薬物乱用に関する意識調査
判　　定：承認

3) 申 請 者：丸山　徹
課題番号：IHS-2010-20
課 題 名：医学部大学院生における全学健康相談業務に関するアンケート調査
判　　定：承認

第 10 回倫理委員会（平成 23 年 3 月 30 日）

1) 申 請 者：荒木　登茂子（医学研究院医療経営管理学講座）
課題番号： IHS-2010-21
課 題 名：小児外来看護に携わる看護師の子どもの権利に対する認識と、説明状況に関する研究―採血場面における分析―
判　　定：承認

2) 申 請 者：熊谷　秋三
課題番号：IHS-2010-22
課 題 名：地域における効果的な介護予防対策に関する調査研究（篠栗研究）
判　　定：承認

（文責：山本教人）

健康教育社会交流委員会

健康教育社会交流委員会は，主に健康科学センター単独で行う秋の公開講座と，筑紫地区の他の研究教育施設と共同で行う春の学内開放（オープンキャンパス）を担当している。

公開講座については，事務の研究協力課を交えて数回協議を行い，企画内容，役割分担，日時と開催場所，具体的な広報活動などを検討した。平成 22 年度は，これまでの博多南地域交流センター「さざんぴあ博多」と前原市健康福祉センター「あごら」の二会場での開催を見直し，「さざんぴあ博多」だけで一日に集約して実施することにした。公開講座をより実り多いものにするために，参加者からのアンケート結果についても解析して，次年度の企画内容に反映させる検討を行っている。以上のように, 公開講座は、立案・計画から準備，広報，実施，反省や分析におよぶ健康科学センターの一つの大きな年間作業である。

一方, 学内開放は，筑紫地区全体での実行委員会が作成する年間計画に基づいて開催されている。健康科学センターの取り組みに関する企画や設営，実施などは実務担当者間で検討され，庶務連絡会議などで報告されている。

（文責: 入江 正洋）

資　　料

健康科学第一部門…… 99
健康科学第二部門……100
年間行事……111

健 康 科 学 第 一 部 門

「健康・スポーツ科学科目（演習・実習）」時の障害事故記録（平成 22 年度）

1）月別事故発生件数

発 生 月	4	5	6	7	10	11	12	1	男子	女子	不明
人　　数	0	2	10	7	0	2	1	2	21	3	0

2）授業時間別事故発生件数

発生時間	午前		午後	
	1 限目	2 限目	3 限目	4 限目
人　　数	3	8	6	7

3）事故発生場所

発生場所	グラウンド	テニスコート	体育館	その他	不明
件　　数	8	1	15	0	0

4）健康・スポーツ科学演習（必修）コース別事故発生件数

発生コース	踏み台昇降	ｳｫｰｷﾝｸﾞ ｼﾞｮｷﾞﾝｸﾞ	体力測定	ストレッチ	スポーツ	SAQ ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ	筋力測定	筋持久力 ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ	不明
件　　数	0	0	4	0	11	0	0	0	0

5）身体運動科学実習（選択）種目別事故発生件数

種　　目	テニス	ﾊﾞﾄﾞﾐﾝﾄﾝ	ソフト	バレー	ﾊﾞｽｹｯﾄ	卓球	ｻｯｶｰ	その他	不明
件　　数	1	2	0	3	1	1	1	0	0

6）事故発生原因

原　　因	不注意	不可抗力	他人	習慣性	用具･施設	体調	天候	指導	技術	その他	不明
件　　数	17	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0

7）傷害種類別件数

種　　類	捻挫	打撲	摩擦･切傷	突き指	脱臼	骨折	肉離れ	その他	不明
件　　数	9	5	7	2	0	0	0	3	0

8）損害部位別件数

部　　位	手	足	腕	脚	肩	腰部	顔面	その他	不明
件　　数	5	13	0	0	0	2	3	1	0

9）傷害の程度

程　　度	応急手当程度	学外治療施設搬入	不明
件　　数	21	4	0

健 康 科 学 第 二 部 門

1. 定期健康診断に関する基礎資料.

1）平成 22 年度　学生定期健康診断　学部学年別　受診者数　受診率

学部等	項目	学部学生						修士課程			博士課程					合計
		1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	4年	5年	
文学部	学生数	165	161	168	230			35	48		22	20	62			911
	受診数	163	95	132	155			31	31		19	12	21			659
人文科学府	受診率	98.8	59.0	78.6	67.4			88.6	64.6		86.4	60.0	33.9			72.3
	学生数							55	61		32	32	78			258
比較社会文化学府	受診数							55	43		20	14	16			148
	受診率							100.0	70.5		62.5	43.8	20.5			57.4
教育学部	学生数	58	51	49	61			131	164		44	43	88			689
	受診数	58	28	41	54			126	121		36	26	36			526
人間環境学府	受診率	100.0	54.9	83.7	88.5			96.2	73.8		81.8	60.5	40.9			76.3
法学部	学生数	199	207	208	283			62	52		11	12	26			1,060
	受診数	199	96	171	187			45	25		5	8	8			744
法学府	受診率	100.0	46.4	82.2	66.1			72.6	48.1		45.5	66.7	30.8			70.2
	学生数							83	97	69						249
法 務 学 府	受診数							76	63	39						178
	受診率							91.6	64.9	56.5						71.5
経済学部	学生数	248	247	257	354			83	91		15	18	28			1,341
	受診数	246	78	212	203			37	29		13	8	5			831
経済学府	受診率	99.2	31.6	82.5	57.3			44.6	31.9		86.7	44.4	17.9			62.0
理学部	学生数	290	285	295	388			140	145		38	22	51			1,654
	受診数	289	105	233	256			135	116		34	17	28			1,213
理学府	受診率	99.7	36.8	79.0	66.0			96.4	80.0		89.5	77.3	54.9			73.3
	学生数							60	64		15	18	16			173
数理学府	受診数							55	54		14	9	9			141
	受診率							91.7	84.4		93.3	50.0	56.3			81.5
	学生数										73	69	31	27	29	229
システム生命科学府	受診数										70	57	23	20	21	191
	受診率										95.9	82.6	74.2	74.1	72.4	83.4
医学部	学生数	268	279	248	277	108	102	56	69		119	135	120	158		1,939
	受診数	266	165	158	253	101	96	53	42		107	99	79	90		1,509
医学系学府	受診率	99.3	59.1	63.7	91.3	93.5	94.1	94.6	60.9		89.9	73.3	65.8	57.0		77.8
歯学部	学生数	60	64	60	54	62	65				41	34	49	57		546
	受診数	56	42	45	49	61	62				36	24	37	39		451
歯学府	受診率	93.3	65.6	75.0	90.7	98.4	95.4				87.8	70.6	75.5	68.4		82.6
薬学部	学生数	86	89	85	88	33		60	68		22	19	33			580
	受診数	82	57	55	82	33		60	55		13	12	20			469
薬学府	受診率	98.8	64.0	64.7	93.2	100.0		100.0	80.9		59.1	63.2	60.6			80.9
工学部	学生数	823	836	850	1,045			427	417		168	115	137			4,818
	受診数	820	310	608	786			423	377		101	68	61			3,554
工学府	受診率	99.6	37.1	71.5	75.2			99.1	90.4		60.1	59.1	44.5			73.8
芸術工学部	学生数	201	206	206	263			172	168		37	30	62			1,345
	受診数	200	47	195	181			156	116		18	9	14			936
芸術工学府	受診率	99.5	22.8	94.7	68.8			90.7	69.0		48.6	30.0	22.6			69.6
	学生数							170	199		48	28	52			497
システム情報科学府	受診数							164	179		31	14	19			407
	受診率							96.5	89.9		64.6	50.0	36.5			81.9
	学生数							218	226		67	45	42			598
総合理工学府	受診数							210	210		56	35	27			538
	受診率							96.3	92.9		83.6	77.8	64.3			90.0
農学部, 農学研究科	学生数	236	243	242	278			218	245		77	57	91			1,687
	受診数	236	119	174	221			204	184		48	32	38			1,256
生物資源環境科学府	受診率	100.0	49.0	71.9	79.5			93.6	75.1		62.3	56.1	41.8			74.5
	学生数	27	28	29	34											118
21世紀プログラム	受診数	27	16	16	21											80
	受診率	100.0	57.1	55.2	61.8											67.8
	学生数							64	63			8	8			143
総合新領域学府	受診数							60	53			5	5			123
	受診率							93.8	84.1			62.5	62.5			86.0
	学生数	2,658	2,696	2,697	3,355	203	167	2,034	2,177	69	837	705	966	242	29	18,835
計	受診数	2,642	1,158	2,040	2,448	195	158	1,890	1,698	39	626	449	441	149	21	13,954
	受診率	99.4	43.0	75.6	73.0	96.1	94.6	92.9	78.0	56.5	74.8	63.7	45.7	61.6	72.4	74.1

2）平成 22 年度　学生定期健康診断精密検査実施状況

胸部Ｘ線

事　　項	間接撮影受検者	要精密者	未受検者	受検者	区　分				
					D30	D31	D32	R	C1
要観察者*		94	15	79	15	61	1	0	2
胸部 X 線間接撮影	13,992	111	1	110	73	18	5	5	9

*前年度の健康診断の結果, D31 または D32 と判定された者

検尿（尿蛋白）

学生区分	受検者数	要精密者	未受験者	受検者	区　　分				
					C1	C2	D32	D33	R
学部生	2,649	180	28	152	1	0	127	17	7
大学院生(修士課程)	1,875	64	11	53	1	2	50	0	0
大学院生 (博士課程)等	96	0	―	―	―	―	―	0	―
その他	2	0	―	―	―	―	―	―	―
計	4,662	244	39	205	2	2	177	17	7

検尿（尿糖）

学生区分	受検者数	要精密者	未受験者	受検者	区 分		
					C1	D32	R
学部生	2,649	8	2	6	1	5	0
大学院生(修士課程)	1,875	4	0	4	0	3	1
大学院生 (博士課程)等	96	0	―	―	―	―	―
その他	2	0	―	―	―	―	―
計	4,622	12	2	10	1	8	1

血圧

学生区分	受検者数	要精密者	未受験者	受験者	区　　分					
					C1	C2	D21	D22	D23	D3
学部生	8,641	376	71	305	0	25	16	8	250	6
大学院生(修士課程)	3,628	203	36	167	1	17	5	4	135	5
大学院生 (博士課程)等	1,686	99	26	73	0	6	1	1	55	10
その他	63	2	0	2	0	0	0	0	2	0
計	14,018	680	133	547	1	48	22	13	442	21

内科検診

学生区分	内科問診	診察受検	証明書記載要	後日面談者	区　　分		
					C1	C2	D3
学部生	8,640	3,083	52	1	0	0	1
大学院生(修士課程)	3,628	2,021	25	0	0	0	0
大学院生 (博士課程)等	1,686	206	10	0	0	0	0
その他	63	8	2	0	0	0	0
計	14,017	5,318	89	1	0	0	1

心電図

学生区分	受検者数	要面談者	証明書発行時要面談者	後日要面談者	区　分		
					C2	D3	R
学部生	2,861	46	1	43	0	34	9
大学院生(修士課程)	778	13	1	12	3	8	1
大学院生 (博士課程)等	84	1	0	1	1	0	0
その他	2	0	―	―	―	―	―
計	3,725	60	2	56	4	42	10

別表検査判定基準（学校保健法施行規則第 7 条第 2 項の別表第 1）

区　分		内　容
生活規正の面	A　（要休業）	授業を休む必要があるもの
	B　（要軽業）	授業に制限を加える必要があるもの
	C　（要注意）	授業をほぼ正常に行ってよいもの
	D　（健　康）	全く平常の生活でよいもの
医　療　の　面	1　（要医療）	医師による直接の医療行為を必要とするもの
	2　（要観察）	医師による直接の医療行為を必要としないが，定期的に医師の観察指導を必要とするもの
	3　（健　康）	医師による直接，間接の医療行為を全く必要としないもの
要観察の頻度	1	年 1 回観察を要する
	2	年 2 回観察を要する
	3	年 3 回以上の観察を要する

3）胸部疾患学生健康診断実施状況（平成 22 年度）

胸部 X 線間接撮影異常者

	受検者	異常者	判定内訳		
			E 判定	A 判定	B 判定
学部生	8,631	54	2	49	3
大学院生（修士課程）	3,624	34	0	33	1
大学院生（博士課程）	1,674	23	1	21	1
その他	63	0	―	―	―
計	13,992	111	3	103	5

要観察対象者

	要観察者
学部学生	34
大学院生（修士課程）	37
大学院生（博士課程）	23
その他	0
計	94

直接撮影実施数

	受検者	直接撮影実施時期	
		5 月	10 月
要観察者・その他	77	71	6
間接撮影異常者※	98	98	0
秋季留学生健康診断	301	0	301
計	476	169	307

※間接撮影Ａ判定の全員，およびＢ判定のうち医師が必要と認めた者

胸部Ｘ線間接撮影判定基準		
区　分		**内　容**
要精査	E	緊急を要するもの
	A	肺野の異常（直接撮影を必要とするもの）
心精査	B	心血管陰影の異常
精査不要	C	上記以外の異常（側弯など）

2. 日常業務に関する基礎資料

1）保健施設利用者数（平成 22 年度）

月別	地区別	受付総数	診察	与薬	病院紹介	健康相談	休養室利用
4 月	センター	77	17	16	5	0	0
	箱崎地区分室	473	49	18	47	1	6
	病院地区分室	177	41	2	6	1	1
	大橋地区分室	52	16	13	0	1	0
	伊都地区ｳｴｽﾄ	600	50	41	47	25	10
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	1,018	140	97	32	13	17
	計	2,397	313	187	137	41	34
5 月	センター	127	17	18	11	5	0
	箱崎地区分室	726	119	48	60	10	19
	病院地区分室	437	71	14	16	2	5
	大橋地区分室	73	26	22	3	0	0
	伊都地区ｳｴｽﾄ	703	87	89	32	55	11
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	789	174	132	47	16	25
	計	2,855	494	323	169	88	60
6 月	センター	160	44	29	6	5	2
	箱崎地区分室	675	94	21	59	8	14
	病院地区分室	825	75	15	15	4	4
	大橋地区分室	84	33	18	1	0	0
	伊都地区ｳｴｽﾄ	788	128	123	40	80	20
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	750	165	170	45	40	48
	計	3,282	539	376	166	137	88
7 月	センター	145	25	17	3	4	2
	箱崎地区分室	791	84	26	57	3	15
	病院地区分室	470	83	10	19	5	2
	大橋地区分室	55	15	12	0	0	6
	伊都地区ｳｴｽﾄ	653	84	91	23	81	29
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	719	68	77	36	22	67
	計	2,833	359	233	138	115	121
8 月	センター	93	22	12	6	4	1
	箱崎地区分室	460	67	5	38	6	7
	病院地区分室	256	43	0	9	2	2
	大橋地区分室	35	10	3	0	0	0
	伊都地区ｳｴｽﾄ	530	62	47	31	100	24
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	165	14	15	8	10	6
	計	1,539	218	82	92	122	40
9 月	センター	90	21	13	3	7	0
	箱崎地区分室	510	64	17	40	1	6
	病院地区分室	342	108	12	6	21	1
	大橋地区分室	45	10	2	0	0	0
	伊都地区ｳｴｽﾄ	486	61	51	22	84	13
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	104	21	16	3	10	6
	計	1,577	285	111	74	123	26
10 月	センター	83	18	19	4	3	0
	箱崎地区分室	541	73	27	53	2	14
	病院地区分室	277	66	9	5	21	5
	大橋地区分室	63	25	18	2	0	0
	伊都地区ｳｴｽﾄ	605	121	116	29	90	23
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	429	72	72	31	19	37
	計	1,998	375	261	124	135	79

11 月	センター	99	25	23	16	4	2
	箱崎地区分室	562	102	43	62	1	16
	病院地区分室	280	78	12	7	24	3
	大橋地区分室	43	15	13	2	0	0
	伊都地区ｳｴｽﾄ	643	225	131	31	62	19
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	356	55	54	29	12	20
	計	1,983	500	276	147	103	60
12 月	センター	74	18	18	5	4	1
	箱崎地区分室	453	70	26	46	5	9
	病院地区分室	309	81	11	10	10	3
	大橋地区分室	50	12	12	2	0	0
	伊都地区ｳｴｽﾄ	470	102	106	36	43	20
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	268	28	39	32	6	14
	計	1,624	311	212	131	68	47
1 月	センター	73	14	16	5	5	2
	箱崎地区分室	408	74	30	57	3	10
	病院地区分室	197	70	17	19	10	2
	大橋地区分室	46	13	13	0	0	2
	伊都地区ｳｴｽﾄ	524	135	119	37	60	19
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	295	46	49	31	5	27
	計	1543	352	244	149	83	62
2 月	センター	60	17	15	4	1	3
	箱崎地区分室	356	86	24	36	12	6
	病院地区分室	238	97	15	19	13	3
	大橋地区分室	41	10	7	4	1	0
	伊都地区ｳｴｽﾄ	360	79	60	24	47	19
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	169	33	25	9	11	11
	計	1,224	322	146	96	85	42
3 月	センター	46	22	13	5	3	1
	箱崎地区分室	369	84	14	30	5	3
	病院地区分室	172	82	10	11	1	4
	大橋地区分室	33	6	3	2	1	0
	伊都地区ｳｴｽﾄ	381	69	42	19	27	7
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	58	8	5	4	3	1
	計	1,059	271	87	71	40	16
計	センター	1,127	260	209	73	45	14
	箱崎地区分室	6,324	966	299	585	57	125
	病院地区分室	3,980	895	127	142	114	35
	大橋地区分室	620	191	136	16	3	8
	伊都地区ｳｴｽﾄ	6,743	1,203	1,016	371	754	214
	伊都地区ｾﾝﾀｰ	5,120	824	751	307	167	279
	計	23,914	4,339	2,538	1,494	1,140	675

2）地区別保健施設利用者数（対学生数の率）

地区	総来室数*	学生来室数	学生一人あたり年間来室回数†
伊都センター	5,120	4,452	0.94
箱崎	6,324	4,163	0.65
病院	3,980	1,507	0.62
筑紫	1,127	710	1.14
大橋	620	524	0.46
伊都ウエスト	6,743	4,913	1.21
計	23,914	16,269	0.84

*総来室数には職員等を含む
†前期と後期の学生数の違いを考慮して算出

3）学部別保健施設利用者数

課程	学部・学府	学生来室数	学生数*	学生一人あたり年間来室回数
学部	文学部	433	751	0.58
	教育学部	137	237	0.58
	法学部	554	914	0..61
	経済学部	645	1,138	0.57
	理学部	986	1,258	0.78
	医学部	616	1,335	0.46
	歯学部	270	365	0.74
	薬学部	247	378	0.65
	工学部	2,870	3,561	0.81
	農学部	764	1,001	0.76
	芸術工学部	517	889	0.58
	21 世紀プログラム	113	117	0.97
大学院	人文科学府	114	187	0.61
	比較社会文化学府	238	313	0.76
	人間環境学府	317	523	0.61
	法学府	154	164	0.94
	経済学府	157	241	0.65
	理学府	486	398	1.22
	数理学府	226	174	1.30
	医学系学府	413	663	0.62
	薬学府	202	210	0.96
	工学府	2,760	1,291	2.14
	システム情報科学府	660	528	1.25
	総合理工学府	670	608	1.10
	生物資源環境科学府	534	685	0.78
	芸術工学府	244	562	0.43
	法務学府	326	251	1.30
	統合新領域学府	108	148	0.73
	歯学府	118	185	0.64
	システム生命科学府	281	232	1.21
	留学生センター他	109	113	0.96
計		16,269	19,420	0.84

*学生数は平成 22 年 5 月 1 日現在（研究生等を含む）

4）健康診断証明書申込者及び発行者（平成 22 年度）

①　総括表

月別		文学	教育	法学	経済	理学	医学	歯学	薬学	工学	農学	21世	人環	シ情	生環	比文	数理	総理工	シ生	芸工	法務	統合新	留セ	計
4月	発行数	5	1	2	6	4	6	1	2	78	7	0	23	7	4	0	13	5	2	11	0	4	0	181
5月	発行数	121	28	112	142	174	393	43	57	1,097	75	10	263	338	89	13	56	306	61	118	8	22	0	3,526
6月	発行数	110	24	47	100	87	201	33	30	221	27	8	34	54	128	12	13	113	11	74	1	10	0	1,338
7月	発行数	49	2	17	41	81	256	122	72	105	32	6	19	41	19	9	10	38	21	42	3	4	3	992
8月	発行数	31	7	12	39	90	81	15	49	63	22	1	24	18	16	6	5	18	0	23	2	4	0	526
9月	発行数	19	1	21	20	44	123	7	7	61	7	0	13	29	28	8	3	26	5	25	3	10	0	460
10月	発行数	21	1	14	8	15	116	44	12	37	4	1	5	23	28	3	2	23	6	8	0	16	0	385
11月	発行数	17	1	3	9	8	74	15	18	69	5	2	7	4	10	3	0	4	0	15	0	5	1	270
12月	発行数	5	0	6	28	18	23	7	16	21	1	1	6	19	20	4	0	6	8	13	2	9	0	213
1月	発行数	6	0	8	12	57	37	14	52	68	1	4	53	10	36	6	4	14	36	44	0	2	1	465
2月	発行数	11	2	17	14	68	21	61	35	163	10	2	32	7	70	1	18	77	17	67	0	19	0	712
3月	発行数	59	3	38	146	135	44	16	66	228	23	3	63	45	126	18	13	141	38	168	5	13	0	1,391
計	発行数	454	70	297	565	781	1,375	378	416	2,211	214	38	542	595	574	83	137	769	205	608	24	118	5	10,459

②　証明書自動発行機による健康診断証明書発行数

月別		文学	教育	法学	経済	理学	医学	歯学	薬学	工学	農学	21世	人環	シ情	生環	比文	数理	総理工	シ生	芸工	法務	統合新	留セ	計
4月	発行数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5月	発行数	119	28	106	140	170	369	43	39	972	74	10	243	304	84	11	47	302	58	116	8	21	0	3,264
6月	発行数	108	23	42	88	87	171	32	29	208	26	8	25	50	126	11	13	109	11	69	1	10	0	1,247
7月	発行数	48	2	17	38	76	237	121	66	99	32	6	17	32	19	9	10	34	19	41	3	4	0	930
8月	発行数	31	2	10	36	84	71	15	45	60	22	1	21	16	16	6	5	18	0	23	2	4	0	488
9月	発行数	19	1	21	20	44	113	7	7	59	6	0	13	25	26	3	3	26	5	25	3	10	0	436
10月	発行数	21	1	13	8	15	102	41	7	34	4	1	5	21	27	3	2	20	6	8	0	16	0	355
11月	発行数	17	1	3	9	8	68	15	12	69	5	2	6	4	6	3	0	4	0	12	0	5	0	249
12月	発行数	5	0	6	22	17	23	7	16	18	1	1	6	18	20	4	0	5	6	13	2	8	0	198
1月	発行数	6	0	8	11	52	32	14	52	61	1	4	53	8	28	6	4	14	21	44	0	2	0	421
2月	発行数	11	2	17	14	63	17	45	34	148	10	2	32	7	67	1	15	77	17	67	0	19	0	665
3月	発行数	59	3	38	140	130	39	15	66	210	19	3	63	38	119	18	11	138	28	168	5	11	0	1,321
計	発行数	444	63	281	526	746	1,242	355	373	1,938	200	38	484	523	538	75	110	747	171	586	24	110	0	9,574

③　各分室毎の申込数及び発行数

分室別		文学	教育	法学	経済	理学	医学	歯学	薬学	工学	農学	21世	人環	シ情	生環	比文	数理	総理工	シ生	芸工	法務	統合新	留セ	計
センター	申込計	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	19	0	0	0	0	0	20
	発行計	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	22	0	0	0	0	0	23
箱崎	申込計	6	2	10	27	15	0	0	0	0	5	0	45	0	23	1	1	0	2	0	0	2	4	143
	発行計	8	6	14	36	25	0	0	0	0	9	0	58	0	36	1	2	0	6	0	0	2	4	207
病院	申込計	0	0	0	0	0	99	16	40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	156
	発行計	0	0	0	0	0	130	22	43	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	196
大橋	申込計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	0	0	0	13
	発行計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22	0	0	0	22
伊都W	申込計	0	0	0	0	1	0	0	0	237	0	0	0	59	0	0	17	0	11	0	0	6	0	331
	発行計	0	0	0	0	2	0	0	0	270	0	0	0	72	0	0	17	0	28	0	0	6	0	395
伊都C	申込計	2	1	2	3	7	3	1	0	2	3	0	0	0	0	2	5	0	0	0	0	0	0	31
	発行計	2	1	2	3	8	3	1	0	2	5	0	0	0	0	7	8	0	0	0	0	0	0	42
計	申込計	8	3	12	30	23	102	17	40	240	8	0	45	59	23	3	23	19	13	13	0	8	5	694
	発行計	10	7	16	39	35	133	23	43	273	14	0	58	72	36	8	27	22	34	22	0	8	5	885

3. 学生相談・精神衛生相談関係統計

1）健康支援パッケージによる面接の結果（平成 22 年度）

精神・心理系

健康支援パッケージの結果					面接結果						
入学者数	回収数	回収率（%）	面接該当者数	面接該当率（%）	受面接数	受面接率（%）	異常なし	性格問題群	神経症問題群	精神病群	身体問題・他
2,685	2,655	98.9%	86	3.2%	83	96.5%	42	6	15	1	19

身体系

健康支援パッケージの結果					面接結果						
入学者数	回収数	回収率（%）	面接該当者数	面接該当率（%）	受面接数	受面接率（%）	異常なし	障害問題群	身体疾患群	精神疾患群	家族の問題･他
2,685	2,655	98.9%	23	0.8%	23	100.0%	4	1	13	1	5

2）学生相談・精神保健相談（平成 22 年度）

		経済	教育	文	法	工	理	農	芸工	21C	経院	人環	人文	法院	工院	理院	生資	総理	比文	シ情	数理	シ生	法科	統領	医	歯	薬	留セ他	卒業生	職員	その他	計
学生相談・精神保健相談	利用回数	70	3	77	71	145	142	120	259	34	1	60	26	12	182	179	163	126	5	90	19	52	26	6	98	49	86	0	113	1160	133	3507
	利用者数	9	3	9	13	34	25	16	39	3	1	11	3	3	24	20	16	13	3	9	3	5	7	3	16	11	16	0	13	304	54	686
サイコリトリート・ロビー	利用回数	139	0	1	57	0	1	69	0	0	0	1	0	0	0	2	2	35	0	22	0	0	1	0	0	0	0	0	320	0	85	735
	利用者数	1	0	1	2	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	2	1	1	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	15	0	2	31

3）学生相談・精神保健相談ケースの診断分類と治療進度（平成 22 年度）

＊教職員自身および教職員に関する相談は除く（学生に関する相談は含む）

精神保健相談 179 名

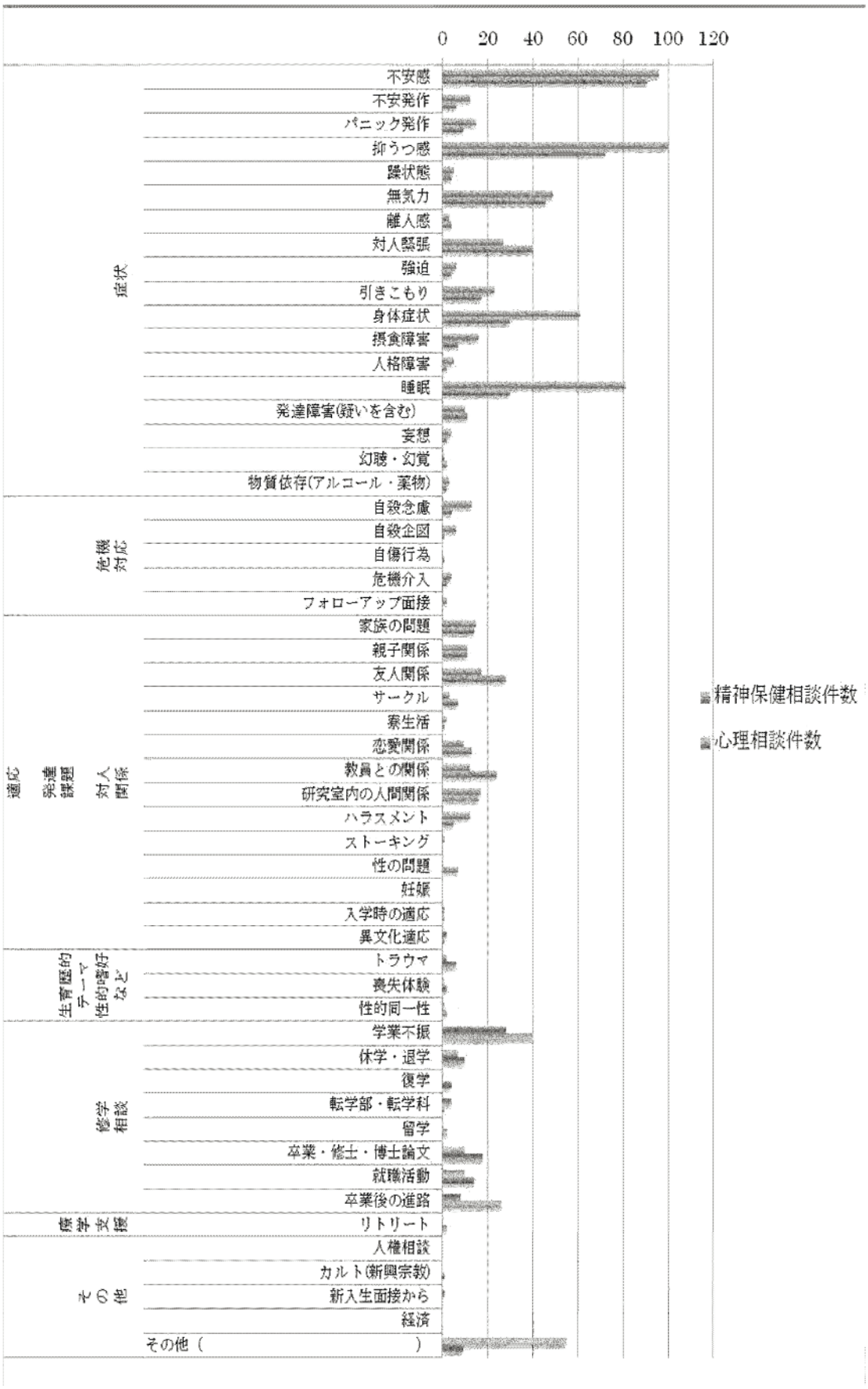
	終了	委託	継続	中断	計（%）
1. ガイダンス	2	0	0	3	5 (2.8)
2. 情緒不安	19	14	21	17	71 (39.7)
3. ノイローゼ	4	11	8	14	37 (20.7)
4. サイコパス群	1	0	1	1	3 (1.7)
5. 精神病群	3	1	7	1	12 (6.7)
6. その他	15	8	4	4	31 (17.3)
7. 関係者の相談	10	0	7	3	20 (11.1)
計(%)	54 (30.2)	34 (19.0)	48 (26.8)	43 (24.0)	179 (100.0)

心理健康相談 227 名

	終了	委託	継続	中断	計（%）
1. ガイダンス	17	0	5	3	25 (11.0)
2. 情緒不安	44	1	37	13	95 (41.9)
3. ノイローゼ	9	4	19	6	38 (16.7)
4. サイコパス群	1	0	0	0	1 (0.4)
5. 精神病群	4	1	7	0	12 (5.3)
6. その他	3	0	11	2	16 (7.1)
7. 関係者の相談	36	0	4	0	40 (17.6)
計（%）	114 (50.2)	6 (2.6)	83 (36.6)	24 (10.6)	227 (100.0)

4）平成 22 年度 新規来談心理相談内容副次分類（ICU の分類に準じる）

（カウンセラーによるもの）（複数チェック有）（来談から現在に至るまでの相談内容分析）



4. 学籍移動と健康に関する基本統計（平成 21 年度）

1）休学者数とその理由

課程／理由	学　部	修　士	博　士	計
疾病	47	31	21	99
経済的理由	126	50	75	251
海外留学	6	10	24	40
その他	9	18	77	104
計	188	109	197	494

2）疾病による休学者の疾患詳細

理　　由	疾患者数
精神科神経科疾患	
統合失調症	4
双極性障害	1
うつ病	24
抑うつ状態	11
気分障害	1
適応障害	11
社会不安障害	3
全般性不安障害	2
神経症	3
強迫性障害	1
神経衰弱状態	1
スチューデントアパシー	2
無気力状態	3
引きこもり	3
倦怠感・不眠	1
身体表現性障害	1
心身症	1
慢性疲労	1
めまい・嘔吐感	1
自律神経失調症	7
性同一性障害	1
境界性人格障害	1
小　　計	84
内科疾患	
心筋梗塞症	1
心臓病疑い	1
慢性肝炎	1
潰瘍性大腸炎	1
関節リウマチ	1
全身性エリテマトーデス	1
気管支喘息重積発作	1
緊張型頭痛	1
脳梗塞後遺症	1
ヘルニア	1
胃がん	2
ユーイング肉腫	1
外傷性脳損傷	1
左足骨折	1
小　　計	15
計	99

3）退学者数とその理由

課程／理由	学 部	修 士	博 士	計
疾病	6	4	6	16
就職	17	27	65	109
他大学受験	25	2	1	28
他学校受験				
再受験				
一身上の都合	36	15	11	62
経済的理由	13	7	8	28
大学院受験	6	5	6	17
在学期間満了	7	2	2	11
単位取得			8	8
家庭の事情		2	3	5
学業不振	7		1	8
海外留学				
その他		3	2	5
計	117	67	113	297

4）除籍者とその理由

課程／理由	学部	修士	博士	計
疾病				0
事故死				0
自殺	3	1		4
授業料未納等	13	10	2	25
計	16	11	2	29

* 平成 21 年度の休学・退学・除籍の統計である。集計時間がかかるため前年度（平成 21 年度）の統計を資料として掲載する。

年間行事（平成 22 年度）

月	行　　事	内　　容	備　　考
4 月	学生定期健康診断の実施 新入学生向け健康教育の開講 新入留学生向け健康教育の開講 健康診断後の精密検査の実施 肥満学生に対する栄養生活指導の実施 広報誌 CAMPUS HEALTH の発行 No.33 入学式	身体計測・検尿・胸部Ｘ線 内科・血圧・心電図 医師派遣	受診者：8,641 名 （含院生 13,954 名） 受診率：新入生　99.4% 4 年生　73.0% 全学年　73.4% (含院生　74.1%)
5 月	健康診断後の精密検査の実施 胸部Ｘ線精密検診の実施 健康支援パッケージに基づく新入生面接の実施	 定期健康診断で精密を要すると判定された学生,胸部疾患の既往歴を有する学生対象 健康（心理・精神・身体）支援のためのスクリーニング面接	各地区分室で実施 受診者：100 名 来室者：106 名
6 月	健康診断後の精密検査の実施 大学評価・学位授与機構試験	 保健師派遣	
7 月	保健管理専門委員会開催		
8 月	九州大学説明会への協力 工学府・システム情報科学府入学試験 総合理工学府入学試験 芸術工学府入学試験 九州地区大学保健管理研究協議会	 医師・保健師派遣 医師派遣 医師・保健師派遣	 佐賀市
9 月	保健管理専門委員会(書面会議) メンタルヘルス講演会(学生の自殺予防とメンタルヘルス対応) 来談学生の親のためのメンタルヘルス講習会		
10 月	全国大学保健管理研究集会 国立大学法人等保健管理施設協議会総会 秋季新入外国人留学生健康診断 新人留学生向け健康教育 広報誌 CAMPUS HEALTH の発行 No.34		千葉市 東京都 受診者:303 名 広報誌 CAMPUS HEALTH の発行 No.34
11 月	工学府駅伝大会参加者の健康診断 留学生健康診断後の精密検査 九州地区メンタルヘルス研究協議会 九州大学ホームカミングディ ＡＯ選抜（21 世紀プログラム）	 保健師派遣 医師・保健師派遣	受診者：95 名 那覇市
12 月	組み換え DNA 実験従事者等に係る健康診断		問診 1,390 名
1 月	大学入試センター試験 メンタルヘルス研修会(自殺とその対策を考える研集会)	医師・保健師派遣	
2 月	保健管理専門委員会 個別学力検査（前期）への協力	 医師・保健師派遣	
3 月	個別学力検査（後期）への協力 来談学生の親のためのメンタルヘルス講習会	医師・保健師派遣	

5. 定期健康診断表

平成 22 年度

九州大学定期健康診断票(A)

学生番号 ID (1 2 3 4 5 6 7 8 9)

フリカナ / 氏名 Name / 生年月日 Birthday 西暦 YY MM DD 生

性別 Sex / 年令(4月1日現在) Age(As of 4/1) 才 Y

学部生 Undergraduate・修士 Master・博士 Doctor・その他 Others ( )

学部 (学府) School / 学科 (専攻) Dept / 学年 School year

受検月日 Date 月 M M 日 D D (11 12 13 14)

該当する項目□にレをつけてください。

(1)今までに病気などで入院や手術をうけたことがありますか？

□ イイエ

□ ハイ

病名	いつ頃
□結核	
□気胸	
□その他 ( )	

(2)現在、どれに該当しますか？

□①健康(とくに医療機関の受診はしていない)

□②医療機関に通院(または入院)している

□③慢性の病気などで修学や日常生活への支障がある

□④心身の不調で相談を希望している

②～④に答えた方は、病名等を記載して下さい。

( )

連絡先 Means of contact

現住所 Address (〒 ー)

携帯電話 Cell phone ー ー

電話 Phone ー ー

E-mail:

研究室名 Name of lab. 内線 Ext. No. ( )

帰省先 Country (〒 ー)

保護者名 Name of parent 電話 Phone ー ー

内科

問診・診 15: 不要 1 / 要 2 印

診断所見: 所見なし / 所見あり

※ 診断所見及び判定(カラム16)をご記入下さい

	疾患名	医療の状況	修学・就労
①		□経過観察中 □現在治療中	□支障なし □支障あり
②		□経過観察中 □現在治療中	□支障なし □支障あり

判定 16	
特記事項なし (健康)	1
健診証明書記載 不要	2
健診証明書記載 要	3

印

異常チェック: 既応歴 / 内科

身体計測

身長 17 18 19 20 cm / 体重 21 22 23 24 kg / 体脂肪 25 26 27 % / BMI / 体脂計 / 腹囲 28 29 30 31 cm

BMI 23 25 / 腹囲

血圧

スクリーニング 一回目: 収縮期血圧 32 33 34 / 拡張期血圧 35 36 37 / 脈拍 38 39 40

二回目: 41 42 43 / 44 45 46 / 47 48 49

三回目: 収縮期血圧 50 51 52 / 拡張期血圧 53 54 55 / 脈拍 56 57 58

印

血圧

胸部X線

間接撮影番号 59 60 61 62 63

間接番号が「00000」と記入されている人は、直接撮影が必要です。間接撮影は受けないで下さい。(回収時に日時をお知らせします。)また過去に直接撮影をうける指示のでた人は受付に相談してください。

直接撮影指示 64: 要観察 1 / その他 2

胸写

尿検査

蛋白 65: − ± + 2+ 3+ 4+ / 1 2 3 4 5 6

糖 66: − ± + 2+ 3+ 4+ / 1 2 3 4 5 6

印 / M 67: 1 / 再検月日・印

蛋白 / 糖

心電図

所見 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78: N SA Af SB ST SVPC VPC RAD LAD LVH RVH

79 80 81 82 83 84 85 86 87 88: LAO RAO IRBBB CRBBB LBBB V-II° III° WPW AST Other

二次検査 89: 不要 1 / 要面接 3 / 発行時面接 4 印

心電図

判定

精密

項目	既応歴	内科	血圧
二次月日			
項目	尿蛋白	尿糖	M
二次月日			
項目	ECG	X線	BMI
二次月日			

(キャンパス) 伊都C 箱崎 病院 筑紫 大橋 伊都W

判定 90: 健康 1 / 要二次 2 / 保留 3 印

証明書自動発行 91: 不可 1 / 既往歴 不可 2

備考

フリガナ
氏名

学部（学府）　学科（専攻）　学部生 MC DC その他（　）　年

学生番号

精密検査（B）

内科

月日 11 12 13 14

面接記録（　）

発行時面接 15 不要 要 1 2

印

病院紹介 16 不要 要 1 2

医療機関名

診断名

内科(PH) 17 生活 18 医療 19 回数

血圧

	月日	収縮期血圧	拡張期血圧	脈拍
一回目	20 21 22 23	24 25 26	27 28 29	30 31 32
二回目	33 34 35 36	37 38 39	40 41 42	43 44 45
三回目	46 47 48 49	50 51 52	53 54 55	56 57 58

	月日	収縮期血圧	拡張期血圧	脈拍
自己測定	59 60 61 62	63 64 65	66 67 68	69 70 71
AB PM	72 73 74 75	76 77 78	79 80 81	82 83 84

病院紹介 85 不要 要 1 2

診断名（　）

医療機関名（　）

血圧(P) 86 生活 87 医療 88 回数

胸部X線

間接判定 89 緊急 E 要直接 A 心精査 B その他 C

直接撮影 月日 90 91 92 93

撮影番号 94 95 96 97

直接判定 98 不要 1 精査 2 6ヶ月 3 1年後 4

精査(直接含む)結果 99 正常 1 異常 2

異常記載

診断名

医療機関名

X線(X) 100 生活 101 医療 102 回数

尿二次

二次 月日 103 104 105 106

蛋白 107 − 1 ± 2 + 3 2+ 4 3+ 5 4+ 6

糖 108 − 1 ± 2 + 3 2+ 4 3+ 5 4+ 6

潜血 109 − 1 ± 2 + 3 2− 4 3+ 5

PH

尿(蛋白)

三次 110 111 112 113

114 − 1 ± 2 + 3 2+ 4 3+ 5 4+ 6

115 − 1 ± 2 + 3 2+ 4 3+ 5 4+ 6

116 − 1 ± 2 + 3 2− 4 3+ 5

問診 117 なし 1 あり 2

病院紹介 118 不要 1 直ちに 2 要 3 1年後 4

診断名

医療機関名

尿蛋白(k) 119 生活 120 医療 121 回数

尿(糖)

病院紹介 122 不要 1 要 2

診断名

医療機関名

尿糖(G) 123 生活 124 医療 125 回数

心電図

月日 126 127 128 129

再ECG 130 なし 1 あり 2

再ECG結果（　）

印

面接記録（　）

病院紹介 131 不要 1 要 2

診断名

医療機関名

心電図(HF) 132 生活 133 医療 134 回数

備考

コード表

*生活規正

要休業	要軽業	要注意	健康	未受検	保留
A	B	C	D	P	R

*医療

要医療	要観察	放置可
1	2	3

*回数

年1回	年2回	年3回以上
1	2	3

備考

証明書自動発行 135 可 1

6. 新入生パッケージ

健康生活支援調査パッケージ

九州大学健康科学センター

合格おめでとうございます。入試の難関をみごとに突破され洋々たる希望に胸をふくらませておられることでしょう。

さて、九州大学では、みなさんがつつがなく学業に精励することができるよういろいろな対策を講じております。なかでも、健康科学センターは学生の心身両面にわたる健康維持増進に万全を期しています。

こうした健康サービス業務をより一層推進するためには、まずあなたの入学当初の健康状態をできる限り正確に知ることが大切です。そのためこのように健康生活支援調査を実施し、その結果にもとづいて、それぞれの専門の教員が、必要に応じてみなさんの今後の学生生活に助言・指導することになっています。

皆さん自身の健康管理、健康増進のために必ず提出してください。

この調査の取扱いについては、個人の秘密が厳守され、健康管理以外の目的（入学取り消し、成績評価、処遇など）には絶対に使用されません。

提出方法：４月２日（水）から７日（月）までの定期健康診断の際、あなたの割り振られた日に持参してください。

なお、入学後は、六本松地区の健康科学センター分室あるいは学生生活修学相談室を、箱崎地区、伊都地区、病院地区及び大橋地区でも健康科学センター分室を気軽に利用されるようおすすめします。

※※※※※ この調査表の記入の仕方 ※※※※※

1．各項目の内容をよく読んで、番号を選ぶ回答の場合は、該当する番号を（　）の中に記入してください。
2．「ハイ」「イイエ」を選ぶ回答の場合は、「ハイ」の場合には１を○で囲み、「イイエ」の場合には２を○で囲み、とばさないようにしてください。
3．氏名、学部等の記入もれがないようにしてください。
4．氏名等の記入例及び部局区分は、最終ページを参照してください。

	学部		学科	学生番号									

部局区分

1	2

生年月日

3	4	5	6	7	8	9

注）1．太枠部分にご記入ください。
2．濁点、半濁点は、1文字分をご使用ください。
3．姓と名の間は、1文字分をお空けください。

	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
フリガナ																				
氏　名																				

入学後の連絡先

住　所（〒　　－　　）	電話　（　　）　番
帰省先（〒　　－　　）	電話　（　　）　番

Ⅰ．大学での修学や生活について

A．合格されましたが満足度はいかがですか
該当する番号を選んで右の（　）にご記入ください …… （　　） 30
1．満足している
2．満足はしていないが、他大学や他学部を受け直すつもりはない
3．満足しておらず、他大学や他学部を受け直すかもしれない

B．入学後の学費および生活費について不安がありますか
該当する番号を選んで右の（　）にご記入ください …… （　　） 31
1．ほとんど不安はない
2．アルバイトをしたり、奨学金がもらえれば何とかなると思う
3．アルバイトをしたり、奨学金がもらえても不安である

	ハイ	イイエ	
C．障害者手帳を持っていますか ……	1	2	32

持っている場合　その部位（　　）　障害の級（　）

D．心身の病気や障害のために日常に支障をきたしていますか

1．身体の病気や障害のために日常の生活に支障をきたしている ……	1	2	33
2．精神の病気や障害のために日常の生活に支障をきたしている ……	1	2	34

Ⅱ．高校時代の生活習慣や健康状態などについて

	ハイ	イイエ	
1．朝、昼、晩、1日3回、規則正しく食事をとっていた ……	1	2	35
2．やせたり太ったり体重の変化が激しかった ……	1	2	36
3．毎日、だいたい同じ時刻に寝るようにしていた ……	1	2	37
4．朝起きがとても苦手である ……	1	2	38
5．寝付きが悪い ……	1	2	39
6．眠りが浅く、夜中によく目が覚める ……	1	2	40
7．朝早く目が覚めて睡眠不足である ……	1	2	41
8．軽い運動でも、ひどく疲れてしまっていた ……	1	2	42
9．風邪をひくと、いつも寝込むほどひどくなる ……	1	2	43
10．小さな事にこだわりやすい ……	1	2	44
11．ちょっとしたことで心を傷つけられやすい ……	1	2	45
12．ちょっとしたことでひどく不安になる ……	1	2	46
13．ちょっとした失敗をずっと悔やんでしまう ……	1	2	47
14．何事でも悲観的に考えてしまう ……	1	2	48
15．思い通りにいかないとカッとして抑えがきかなくなる ……	1	2	49
16．気分が落ち込み、やる気が起こらない ……	1	2	50
17．対人緊張が強くて困っている ……	1	2	51
18．友達作りがうまくできず、いつも孤独である ……	1	2	52
19．悩みを相談できる友人がいた ……	1	2	53
20．学校でイジメにあったことがある ……	1	2	54

Ⅲ．次の病気であると病院などの医療機関で診断されたことがありますか？	ハイ	イイエ	
1．喘息	1	2	55
2．アトピー性皮膚炎	1	2	56
3．1．2．以外のアレルギー疾患（鼻アレルギーなど）	1	2	57
4．肺結核	1	2	58
5．心臓病	1	2	59
6．高血圧	1	2	60
7．低血圧	1	2	61
8．糖尿病	1	2	62
9．高コレステロール血症	1	2	63
10．甲状腺腫または甲状腺機能亢進症	1	2	64
11．胃・十二指腸潰瘍	1	2	65
12．肝炎	1	2	66
13．自律神経失調症（中学生以降）	1	2	67
14．学校の検尿で尿蛋白か尿潜血あった	1	2	68
15．腎臓の病気	1	2	69
16．貧血	1	2	70
17．てんかん	1	2	71
18．神経衰弱・ノイローゼ	1	2	72
19．統合失調症・うつ病・心因反応	1	2	73
20．摂食障害	1	2	74
21．自殺未遂	1	2	75
22．膠原病（SLE、リウマチなど）	1	2	76
23．膠原病以外の難病	1	2	77
23でハイの人　病気の名前（　　）			
24．手術を要した病気	1	2	78
24でハイの人　病気の名前（　　）（　　）歳頃			
25．入院を要した病気（手術以外）	1	2	79
25でハイの人　病気の名前（　　）（　　）歳頃			
26．肥満症	1	2	80
27．（女性のみ）ひどい月経異常（月経痛・月経不順・無月経）がありますか	1	2	81

Ⅳ．家族に次の病気の人がいますか	父親			母親			兄弟（姉妹）		
	ハイ	イイエ		ハイ	イイエ		ハイ	イイエ	
1．高血圧	1	2	82	1	2	83	1	2	84
2．糖尿病	1	2	85	1	2	86	1	2	87
3．高コレステロール血症	1	2	88	1	2	89	1	2	90
4．肥満症	1	2	91	1	2	92	1	2	93
5．肝炎	1	2	94	1	2	95	1	2	96

Ⅴ．健康科学センターでは、診療の他に心身の健康相談および健康教育を行っています	ハイ	イイエ	
1．大学での勉学について現在なやんでおり、相談したいという希望がありますか	1	2	97
2．現在、心理的問題があり、専門家に相談したいですか	1	2	98
3．現在、身体的問題があり、専門家に相談したいですか	1	2	99
4．家族の病気について、専門家に相談したいですか	1	2	100
5．健康教育を受けるのであれば次のテーマに興味がありますか			
1）エイズ、肝炎などの感染症予防	1	2	101
2）禁煙	1	2	102
3）成人病予防	1	2	103
4）ストレス対策	1	2	104
5）性教育	1	2	105
6）減量教室	1	2	106
ア）アルコール問題	1	2	107
8）その他（具体的に：　　）	1	2	108

※もう一度記入したものを見なおして、記入もれなどがないか確かめてください。

《記　入　例》

※学生番号は、定期健康診断の際に、
ご記入ください。

理	学部	物理	学科	学生番号								

部局区分

1	2
S	C

生年月日

3	4	5	6	7	8	9
2	0	2	0	6	2	4

1：昭和
2：平成

注）1．太枠部分をご記入ください。
2．濁点、半濁点は、1文字分をご使用ください。
3．姓と名の間は、1文字分をお空けください。

	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
フリガナ	ヤ	マ	タ゛			タ	ロ	ウ												
氏　名	山田　太郎																			

《コード表》

＊部局区分

文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	医学部
LT	ED	LA	EC	SC	MD

歯学部	薬学部	工学部	芸術工学部	農学部	21世紀
DD	PS	TE	DS	AG	NC

人 事 等 の 一 覧

教職員・兼任教員……119
非常勤講師……121
学医……122
保健管理専門委員会名簿……123

教　職　員（平成 23 年 3 月 31 日現在）

センター長　大 柿 哲 朗　　**副センター長**　一 宮 厚

健康科学第一部門（運動・スポーツ科学）

部門長	教　授	西 村 秀 樹	（スポーツ社会学）
	教　授	大 柿 哲 朗	（運 動 生 理 学）
	教　授	橋 本 公 雄	（スポーツ心理学）
	教　授	熊 谷 秋 三	（健康・運動疫学）
	准教授	齊 藤 篤 司	（運 動 生 化 学）
	准教授	山 本 教 人	（スポーツ社会学）
	准教授	杉 山 佳 生	（スポーツ心理学）
	准教授	林　直 亨	（応 用 生 理 学）
	講　師	高 柳 茂 美	（スポーツ心理学）

健康科学第二部門（健康医学・心理学）

部門長	教　授	上 園 慶 子	（内科学・時間生物学）
	教　授	山 本 和 彦	（内科学・生理人類学）
	教　授	一 宮　厚	（神 経 精 神 医 学）
	准教授	丸 山　徹	（内科学・循環器病学）
	准教授	入 江 正 洋	（心身医学・産業医学）
	准教授	永 野　純	（内科学・心身医学）
	准教授	福 盛 英 明	（健康心理学・臨床心理学）
	准教授	眞 﨑 義 憲	（呼吸器内科学・健康科学）

事務系職員

事務補佐員	高原由紀子
事務補佐員	成 水 貴 代
事務補佐員	笹 部 澄 恵
事務補佐員	下 川 峰 子
事務補佐員	藤 尾 幸 子
事務補佐員	安 籐 美 紀
事務補佐員	田川久美子
事務補佐員	高尾寿美子

技術系職員

技術職員	中 山 博 子	看 護 師
技術職員	松 園 美 貴	保 健 師
技術職員	戸田美紀子	保 健 師
技術補佐員	田 中 朋 子	看 護 師
技術補佐員	荒 川　令	保 健 師
技術補佐員	福 盛 文 恵	保 健 師
技術補佐員	濱 田 百 合	保 健 師
技術補佐員	山 口 祥 子	保 健 師

兼任教員（平成 23 年 3 月 31 日現在）

氏　　名	所　属・職　名
吉 良 潤 一	大学院医学研究院・教授
鈴 木 孝 彦	情報基盤研究開発センター・准教授

健康科学センター内委員会委員名簿（平成 22 年度）

委　員　会　名	委　　員　　名	任　　期	
副センター長	一宮	1	22. 4. 1～23. 3.31
マスター・プラン委員会	○大柿, 一宮, 西村, 上園, 斉藤, 山本(教), 丸山	1	22. 4. 1～23. 3.31
部　門　長	西村（健康科学第一部門）	2	22. 4. 1～24. 3.31
	上園（健康科学第二部門）		22. 4. 1～24. 3.31
研究交流委員会	大柿,一宮, ○山本(教), 高柳, 丸山	2	22. 4. 1～24. 3.31
教育・健康管理部担当者会議代表者	西村, 上園	1	22. 4. 1～23. 3.31
健康教育社会交流委員会	杉山, 山本(教), 入江, 眞﨑		22. 4. 1～23. 3.31
人事委員会	大柿, 西村, 杉山, ○上園, 永野	2	22. 4. 1～23. 3.31
総務委員会	大柿, ○斉藤, 林, 山本(教), 一宮, 福盛, 眞﨑		22. 4. 1～23. 3.31
自己点検・評価委員会	大柿, 橋本, 杉山, 上園, ○丸山		22. 4. 1～23. 3.31
教員業績評価委員会	○大柿, 一宮, 西村, 上園, 熊谷	1	22. 4. 1～23. 3.31
倫理委員会	大柿, 一宮, ○山本(教), 丸山, 高柳, 馬場園*	2	22. 4. 1～24. 3.31
新キャンパス検討委員会	○大柿, 杉山, 林, 福盛, 眞﨑		22. 4. 1～23. 3.31

○印は委員長,　△印は副委員長,　* 外部委員

非常勤講師（平成 22 年度）

氏　名	所　属・職　名	任　期
精神保健相談		
織　部　直　弥	九州大学大学院医学系学府・大学院生	22. 4.16～23. 3.31
横　田　謙治郎	九州大学病院精神科神経科・助教	22. 4.16～22.10.15
平　野　昭　吾	九州大学病院精神科神経科・助教	22.10.16～23. 3.31
川　島　範　子	こころのクリニックやまがた・医師	22. 4. 1～23. 3.31
学生相談		
佐々木　玲　仁	九州大学人間環境学研究院・准教授	22.6.16～23. 3.31
平　井　達　也	九州産業大学・講師	22. 4. 1～23. 3.31
吉　永　亮　治	フリー	22. 4. 1～23. 3.31
太　田　あや乃	フリー	22. 4. 1～23. 3.31
斉　藤　明　子	フリー	22. 4. 1～23. 3.31
高　野　尚　子	福岡カウンセリングセンター・代表	22. 4. 1～23. 3.31
中　園　照　美	フリー	22. 4. 1～23. 3.31
峰　松　　修	九州産業大学・教授	22. 4. 1～23. 3.31
吉　田　加代子	フリー	22. 4. 1～22. 4.30
井　上　綾　子	フリー	22. 5. 1～23. 3.31
馬　場　弓　歌	フリー	22. 4. 1～23. 3.31
健康相談		
久　末　順　子	九州大学大学院医学系学府・大学院生	22. 4. 16～23. 3.31
中　垣　憲　明	九州大学大学院医学系学府・大学院生	22. 4. 16～23. 3.31
野　田　直　孝	九州大学大学院医学系学府・大学院生	22. 4. 16～23. 3.31
原　田　知　佳	九州大学大学院医学系学府・大学院生	22. 4. 16～23. 3.31
松　永　悠　子	九州大学大学院医学系学府・大学院生	22. 4. 16～23. 3.31
古　山　和　人	九州大学大学院医学系学府・大学院生	22. 4. 16～23. 3.31
北　島　裕　子	九州大学大学院医学系学府・大学院生	22. 4. 16～23. 3.31
横　山　哲　也	九州大学大学院医学系学府・大学院生	22. 4. 16～23. 3.31
笹　栗　俊　之	九州大学医学研究院・教授	22. 4. 1～23. 3.31
馬 場 園　　明	九州大学医学研究院・教授	22. 4. 1～23. 3.31
桑　原　一　彰	九州大学医学研究院・准教授	22. 4. 1～23. 3.31
吾　郷　哲　朗	九州大学病院第二内科・助教	22 .4. 1～22.10.15
中　野　敏　昭	九州大学病院第二内科・助教	22.10.16～23. 3.31
尾　前　　豪	今津赤十字病院・内科部長	22. 4. 1～23. 3.31
佐々木　　悠	フリー	22. 4. 1～23. 3.31

平成22年度九州大学学医一覧

平成22年4月1日現在　　健康科学センター

診療科目名	医師氏名	任期開始年月日	新患日	再来日	外来電話	備考
九州大学病院						
内　科	堀内孝彦	17年10月1日	月～金	月～金	5302	救命救急センター 642-5871
	岩瀬正典	20年4月1日				
	伊藤鉄英	21年4月1日				
心療内科	岡　孝和	20年6月1日	月・木	火・水・金	5335	
神経内科	高瀬敬一郎	22年1月1日	火・木・金	月・水	5349	
循環器内科	廣岡良隆	19年4月1日	月～木		5371	
産科婦人科	小林裕明	21年4月1日	月～金（予約制）	月～金	5409	
第一外科	永井英司	20年4月1日	火・木	火・木	5453	
第二外科	矢野篤次郎	19年10月1日	月・水・金	月・水・金	5479	
整形外科	馬渡太郎	22年4月1日		金	5504	
脳神経外科	溝口昌弘	21年4月1日	月・水・金	月・水・金	5533	
心臓血管外科	中島淳博	19年3月1日	月・水・木	水・木	5565	
皮膚科	師井洋一	18年4月1日	月・水・金	火・木	5597	
泌尿器科	関　成人	19年4月1日	火・木	月・水・金	5615	
精神科神経科	川嵜弘詔	19年10月1日	火・木	月～金	5640	
眼　科	宮崎勝徳	19年4月1日	月・水・金	月～金	5660	
耳鼻咽喉科	松本　希	21年4月1日	火・木	月・水・金	5681	
放射線科	阿部光一郎	22年4月1日	月・水・金	月～金	5705	
放射線部	畠中正光	17年10月1日				
総合診療科	林　純	3年7月1日	月～金	月～金	5300	
九州大学病院（歯科医療センター）						
口腔機能修復科（歯内治療科）	吉嶺嘉人	20年8月1日	月～金	月～金	6430	
口腔機能修復科（咬合補綴科）	坂井貴子	18年4月1日			6435	
口腔機能修復科（義歯補綴科）	築山能大	19年4月1日			6440	
口腔顎顔面外科（顎口腔外科）	大部一成	17年10月1日			6445	

受付時間

新　患	8:30～11:00（窓口受付）
再　来	8:20～17:00（窓口受付）　8:15～17:00（自動再来受付機）

平成 22 年度保健管理専門委員会委員名簿

（平成 22. 4. 1 現在）

地　区　等	部　　局　　名	氏　　名	任　　期
委員長	健康科学センター長	大　柿　哲　朗	
箱崎文系地区	大学院人間環境学府	大　場　信　恵	平成 23. 3. 31
箱崎理系地区	理学部	武　田　信　一	平成 23. 3. 31
病院地区	歯学部	野　中　和　明	平成 23. 3. 31
筑紫地区	健康科学センター	眞　﨑　義　憲	平成 23. 3. 31
大橋地区	芸術工学部	小　野　直　樹	平成 23. 3. 31
伊都地区	大学院比較社会文化学府	阿　部　芳　久	平成 23. 3. 31
高等教育開発推進センター	高等教育開発推進センター	福　留　留　美	平成 23. 3. 31
九州大学病院	九州大学病院	本　田　　浩	平成 23. 3. 31
健康科学センター	健康科学センター	上　園　慶　子	平成 24. 3. 31
	学 務 部 長	鈴　本　　司	
	筑紫地区事務部長	増　原　敬　二	

編　集　後　記

平成23年３月11日、東日本を襲った大震災がありました。健康科学センターでも震災関連の相談などがあれば協力することをホームページなどにも掲載いたしました。直接の心の相談実績は少なかったのですが、カウンセリングの中で、地震と津波の映像を繰り返し見て調子が悪くなった、気持ちがふさぐ、などの反応が多くみられました。これらは誰しもが体験するような異常な事態への正常な反応でありますが、話をせずに心の内側に閉じ込めるとうつ状態に移行する可能性もあります。また、社会的にもこれまでの価値観などに変化がおこり、大学のあり方も根本から問われているような状況になってきたと思われます。健康科学センターも研究・教育・業務・社会貢献を通して、より広く人々の健康増進について寄与できるような発展ができるように、一丸となって取り組んでいきたいと思います。　(H.F.)

総務委員会　大柿哲朗　一宮　厚　山本教人　斉藤篤司*
福盛英明*　林　直亨　眞﨑義憲　(*編集担当)

健康科学センター年報　第33巻

平成24年３月26日　印 刷
平成24年３月30日　発 行
発行責任者　大　柿　哲　朗
〒816-8580　福岡県春日市春日公園６丁目１番地
(TEL 092-583-7685, FAX 092-592-2866)
発　行　者　九州大学健康科学センター
印　刷　所　城島印刷株式会社